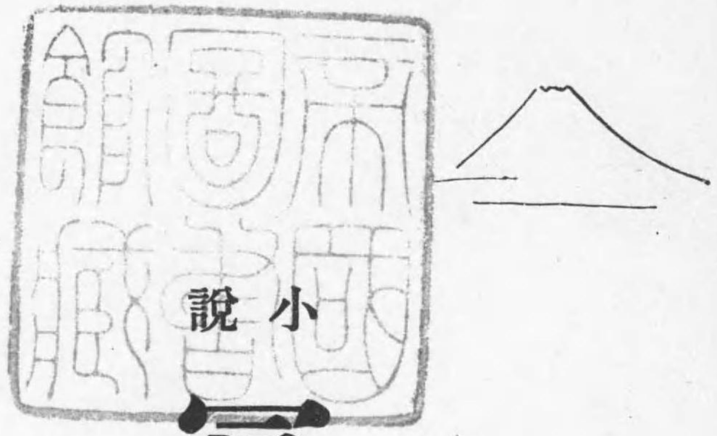
538
155

始



小說

富士

第二卷

德富健次郎
德富愛

大正
15. 8. 3
内交

538-155

帝國圖書館藏

第一章　あらめ屋

一

筆持つ手をのばして、熊次は卓越しに縁側の障子を少し引きあけた。まだ盛に雪が降つて居る。今朝から降り出して、もう一尺から積つて居さう。冬知らずの筈な逗子に、來早々案外な大雪ではある。人通りも稀な前の三崎往還から、川向ふの養神亭かけて眞白な中を、唯一條滿潮時の田越川がドス黒く搖らいで居る。紛々霏々と絶え間なく降りこむ雪も、あの黒い水を如何する事も出來ない。其かはり其處に錨を下ろして居る一隻の伊豆舟は、苫の上堆く雪をかついで、今にも沈みはせぬかと危ぶまれる。あの筵の下にぶりこめられて若し人が居るなら、嘸わびしいことであらう。それとも沖中で此風雪に出會はさなかつたを勿怪の幸に、先刻陸で一杯引つかけて來て、今はあの眞白い筵の下で案外高鼾で寢て居やうも知れぬ。

飈ッ――と一陣北風の吹雪を眞額にうけて、熊次はぴしやり障子をしめた。さらさらと障子を雪の撲つ音が一しきりして、止むだ。筆を措いて、熊次は卓に頰杖をついた。黑地に緣の唐

草模樣を出した雜紗の被をした此卓は、一昨日の朝まで東京は赤坂氷川の金剛纂の小庭に面ふて床の間近く据わつて居た其卓である。簞笥諸道具は靈岸嶋から船便に托したが、卓は瀧車の手荷物で持つて來た。駒子があぶながるに頓着なく、熊次はそれを蒲團包みにした。あらめ屋で荷を解くと、案の定、卓の脚が一本とれて居た。熊次は顏をしかめた。家主の太兵衞さんが見かねて、金鎚と釘で兎に角ぐらつかぬ程度にしてくれたので、熊次は昨日から早速仕事を始めたのであつた。それは家庭雜誌新年附錄の短篇小說であつた。去年の夏の附錄を手紙一本で斷つて以來、家庭雜誌には筆を絶つて居たが、今年は新しく出直すつもりで新年附錄を引受けた。新年と云ふても、月の中旬に雜誌は出るのであつたが、引越し騷ぎに日を過して、締切りが迫つて居た。昨日からせつせと書いて、短篇はあらかた出來て居た。熊次はそれを「漁師の娘」と題した。昨秋遊んだ霞が浦を背景にとつて、人間に失望した親不知の女兒が自然に消え入る、といふ筋の散文詩であつた。

北向きの八疊は寒い。熊次は借り物の角火鉢に手を翳した。而してまだ住みつかぬがらんとした室内を見廻はした。中央を格子障子にした重たい板戸で隔つ南降の豪所の方では、カタコト

と時々小さな音をさして、駒子が夕食の仕度をして居る。雪はまだ降つて居るらしく、ひつそりしいんとした中を、時には咽ぶやうな、また唸るやうな音がするのは、それは一昨夜來近づきになつた海の音でなければならぬ。

熊次は目を瞑つた。つい後にしたばかりの東京生活が、最早夢のやう。過去が遠くなつた。都が遠くなつた。遠くなつた都を、尙遠くするかのやうに、雪が降りくさる。追ひ出されたのではない、われから出て來たものを、丁寧に後から隔ての戸をさされたやうな味氣なさが、こみあげる。

歸らじ　と　出でし都を　白雪の
何隔つとて　降りつもるらむ

――テン、テテン、テン、トン――三味が鳴り出した。川向ふの養神亭である。此雪にも遊びに來て居る客もあるのか。やがて何やら歌ひ出した。

障子の雪明りに聞き耳立つる熊次の頭に、不圖鉢の木の文句が浮んだ。

「ああ降つたる雪かな、

如何に世にある人の面白ふ候ふらん」

「ああ降つたる雪かな。」面白さうに絃歌に興ずる向きもある。然し自分は？

然だ。東京に居たたまれず、家をたたみ、逗子に落ちて來て、此あらめ屋の一室に世を佗ぶる我ではないか。

瞼の裏が熱くなると、涙がこぼれさうになつて來た。大きな、弱い眼をもつ熊次は、何かと云へば直ぐ泣き目立つ彼であつた。

頭を掉つて、熊次は二たびあたりを見廻はした。涙ぐんだ眼が器械的に西隣を隔ての唐紙に落ちると、考が何時しか別路にそれた。唐紙の向ふは同じ無縁琉球の八疊があつて、それも南向きの潤い臺所も、母の老人會仲間の大杉のお婆さんが舊冬から借りて居るが、今は正月歸京中で、誰も居ない。去年の正月は、其八疊に新婚の鴨志田夫妻が棲んで居た。避寒轉地に父母や幼ない甥等を熊次が此あらめ屋に送つて來て、新婚夫妻合唱の讃美歌に耳傾けたも其正月であつた。櫻時まで、夫妻は此隣の八疊に居た。幼ない甥等は、鴨志田の小母さんから

「福、德、幸、貧乏、金持、倉持、疝氣持」

と指を折つて數ふる事を教はつた。春秋と才氣に富む夫妻は、然し貧しい生活をして居た。同じ棟に住む肥後家の臺所に、おしんさんはよく鰹節を借りに來たり、安部川餅をつくるといふて砂糖を借りに來たりした。肥後の女中は炭がなくなるとこぼした。母屋にも借が溜つて、おかみは好い顏をしなかつた。櫻が咲くと、夫妻は東京に歸つて往つた。ある日曜に、夫妻は麴町の教會に出席し、歸りしなに一寸實家に用があるといふて、おしんさんは會堂の門前で別れた。それつきり彼女は歸つて來なかつた。彼女の母も、女を骨折つて夫へ歸へさうとはしなかつた。おしんさんは到頭鴨志田君を見捨てたのであつた。去年の正月此あらめ屋で會つて以來、熊次は鴨志田君に會はなかつた。其後澁谷に住み、夏の出水に鯉を手捉へたとかいふて、「戀を失ふて鯉を獲る」と新聞が地口つた報道を熊次は讀んだ。「失樂園主人」と署して、新聞には時時鴨志田君の哀切な小詩が出た。「大磯小磯は霞の中よ」などは、樂しかつた逗子生活も末方の吟と思はれた。才人、才女、好一對と傍目にも思はれたに、何で此樣な事になつた乎。共處の八疊で睦じく夫に寄り添ひ編物などして居た悧發げな若妻が、何で思ひ切つた事をする氣になつたか。會堂の門前でさり氣なく別れ、一日又一日、歸るか、歸るかと到頭歸らぬ妻を空しく

待つた鴨志田君を思ふと、熊次は胸が痛かつた。

唯一年の間の事である。

戀を得た鴨志田君は、得てそれを失ふた。而して其短かつた舊歡の巢に、躓きかちな三年の結婚生活の後、然も一切を根底から築き直すべく自分は妻と落ちて來た。自分を不幸な者と謂へやう乎？

熊次は長い息をついた。

臺所口の障子があいて、駒子の白い顏が現はれた。

「ランプをつけませうか。」

「え。どうぞ。臺所は寒くはないね？」

「いゝえ、ちつとも。」

雨戸繰るべく、熊次は立上つた。障子をあけると、蒼白い雪の黃昏。川向ふの絃歌は何時しか止んで、薄暗い空から雪はなほ紛々と際限もなく降つて來る。

二

南へ太平洋に向ひ日本國都東京がわんと開いた大口の上顎を伊豆、下顎を房州とすれば、まさに其扁桃腺に見立てらるる三浦半嶋は、地質學者の言によれば、日本の地盤の中でも極新出來のものさうな。それが人間の住家になつて、石器土器の太古から、橘媛同伴で走水から難航海の舟出をされた日本武尊の昔、ずつと降つて今も郡の名にし負ふ三浦大助、三浦道寸の鎌倉時代、戰國時代、それから一足飛びに、ペルリの艦が浦賀沖でうつた新日本誕生の祝砲、日本海軍造船の揺籃として横須賀の擡頭まで、長々しい歴史の回顧は之を措く。東京灣の右の扉をうけたまはる東西三里半、南北四里半、面積七方里の三浦半嶋に規則正しく血が通ひ始めたは、何と云ふても横須賀線開通以後の事である。

明治二十年の夏休に、京都から初めて東上した熊次が、兄や宇土君、深水の太郎君などと其夏初めて海水浴開きをした大磯に遊んだ頃、横須賀線の工事はこれからといふ處であつた。中一

年置いて、明治二十二年の首夏、熊本から上京間もなく、熊次は兄や宇土君と鎌倉から金澤、江の嶋かけて三日の遊をした。圓覺寺の山で初めて山百合の花の盛りに出會し、露垂るる崖からぬうと偉きな白い顔さし出して、むせる程强烈な香を逆らす其花に一驚を喫したも其時であつた。それは横須賀まで全線開通の數日前であつたが、熊次は鎌倉までで歸つてしまつた。二年目の五月、新聞社から休暇をもらつて、初めて横須賀線を終點驛で下車し、浦賀への半途、猿嶋を向ふに見て東京灣の波穩な大津海水浴に遊んだ。三日目に、其名も同じ江州の大津で、來遊中の露國皇太子ニコラス殿下が護衛の巡査津田三造の白刃に傷つけられた珍事出來を耳にして、直ぐ東京に歸つた。往復に逗子といふ驛を通つた。逗子——變な名だ、と思ふたきり、何の珍らしげもない山際の小驛に、熊次は氣もとめなかつた。海近い驛の感じさへなかつた。然し何の緣か、一月たたぬに熊次はまた父と其逗子驛を通つた。母の長姉本山のお香伯母の出京で、氷川町の隱宅は女客が立て込み、殊に昔から母を感服者の本山の長女、斬髪頭の大痘痕、尼將軍おしでさんが隱宅に入り浸つていつかな去らぬので、父がたまりかねて避客旅行に熊次を連れて横須賀在の大津へと飛び出したのであつた。いざとなれば矢も楯もたまらぬ性分を、

父も子も持つて居た。家を出るには出たが、時間が悪くて其夜は横濱一泊を餘儀なくされ、翌日やつと大津に往つた。三日の大津逗留に雨ばかり降つて、話はなく、父は帳場から借りた活字本の弓張月に讀み耽り、熊次は退屈し切つたものである。往復に例の逗子を通ると、父は興ありげにそこら見廻はし、此海邊に舊藩侯の別莊がある話をした。それどころでなく、瀛車の開通以來はやんごとないあたりの御用邸も葉山といふ處に建ち、名ある別莊も追々出來て、此邊一帶は大磯、鎌倉に次ぐ避暑地になりかけて居る事を熊次は知らなかつた。其夏は大磯に避暑した。然し翌明治二十五年の夏は、肥後一家逗子に來て、養神亭のはなれに一夏を過した。別莊へ行く舊藩侯が川越しに腰をかがむる舊老臣に會釋し、貞助も大分工面がよくなつたと見える、と噂さしたものだ。お茶の水の女學生菊池駒子が清人兄と來て、養神亭に空室がないので肥後家族の中に十日置いてもらつたも其時である。大磯より海が穩でよろづ氣安な逗子は、老人子供達の氣に入つた。それから明治二十五、六、七、八年と夏は必逗子に避暑し、明治二十九年の夏は其處に父母養老の住居も成つて、逗子は夏ばかりの逗子ではなくなつた。而して父母が其處に落ちついて半歳たたぬに、眼を開けば熊次駒子も何時しか東京落ちして、あらめ屋の

一室に際限知らぬ生活を始めて居るのであつた。

鎌倉を後に、南へ名越の壓道をぬけると、それから田浦の壓道にかかるまでの間、瀛車は逗子平野を走る。逗子は昔は豆師又は厨子と書いた。吉田東伍の說には、昔の職人名圖師の轉訛であらう、と云ひ、俗說には弘法大師の厨子があつたからの逗子、と謂ふ。兎もあれ大師が行脚時代にはぶら下げたであらう頭陀袋の形をした平野である。海拔三四百尺を越えぬ雜木山松山に三方圍まれて、袋は北西に海へ口を開いて居る。平野の重な創作者を、多胡江川、今は、田越川といふ。田畑村中を悠々とくねり、潮がさすので日の半分は逆に流れ、出水の時ででもなければ滅多にはきはき流るる事をせぬのんきな小川である。蛭が小嶋の昔に思ひ比べ、敵の蘖を殘す恐ろしさをしみじみ思ひ知つた源右府頼朝が平家の根を絶ち蘖を殲す執念は深く、平家の嫡々、重盛には嫡孫、維盛には嗣子の六代御前は其齡十二のいたい氣ざかりを捉へられてすでに沼津の千本松原で斬られる處を、頼朝には睨みの利く僧文覺がやつと命乞ひして法師にしたが、其内頼朝は死し、文覺が朝廷に罪を獲て流罪になると、もう三十になつた弟子の六代も、「髮をば剃り玉ふとも、心までは剃り玉はじ」と召捕られ、到頭此川邊で斬られた。六百餘年前、

青青と茂る川邊の蘆に初秋の風わたる陰暦七月二十六日の事である。あはれ知る土地の子等は、多胡江川を御最期川と名をつけて、今も其月其日に紀念の祭をする。逗子驛から來る葉山——三崎街道は、田越橋で此川を渡る。小田の向ふの小山の裾に、木立こんもりした一堆の邱がある。石段を上れば、章魚根を張つた槻の老樹の下に苔蒸す五輪の石塔、それは六代御前を紀念の石塔である。其上一帶の松、雜木山は、昔櫻が多かつた名殘りに、今も櫻山の名がある。蘆をめぐつて川に沿ひ街道に傍ふ人家の部落が、字櫻山である。田越橋の少し下流で、川は街道と離れ、松林につづく蘆の洲をめぐつてゆるく弧を描き、逗子平野の北東から來る、六代御前の屍が流れたからの「身流れ川」を合はせて、川幅濶うなり、道傍一帶の松の間に群を拔いた三百年の老松一樹空に嘯くあたりでまた街道に會ひ、富士見橋をくぐり、尙一丁餘を流るるともなく海に入る。熊次駒子がはなればなれにはじめて避暑に來た頃までは、此あたりに橋はなく、養神亭へは渡舟で渡つた。

富士見橋から川口までの間、川に街道に傍ひ櫻山を背にして參差とならぶ部落の中程に、ゆつくりと構へた大きな茅葺が荒芽屋である。「あらめ屋」はもと旅籠屋をして居た頃の屋號さうな。

北に三室、南に二室、八疊がすらりならんだ家づくりも、旅籠稼業の昔を思はせる。今は主人は專ら農を業とし、八疊五室の母屋は避暑避寒の客に貸して、家族は母屋の東に鍵形につぎ足した小さな板葺に住み、おかみが荒物店を出し、酒、酢、味噌、醤油其他くさぐさ賣つて居る。主の太兵衛さんは手堅い五十男の苦勞人、若い頃から廉い瘠地を買つては手を入れて上田上畑に仕上げ、それを高値に賣つてはまた廉い地所を買ひして、身代を持直した人である。首とつりかへの實印大切に、無筆に近いが、信望があつて、村會議員をして居る。日清戰爭に衛生長官として男爵を賜はつた智慧者の赤岩さんは養神亭の定客で、太兵衛さんの人となりをよく知つて居るので、資金は出すが金貸しをせぬかと相談をかけたものだ。太兵衛さんは斷はつた。先妻が女一人殘して亡くなつた後、先妻の妹を後入に迎へた。親子程年が違ふ夫を嫌つて、お末さんは若い男と逃げた。然し追手が連れ歸つて詫を入れると、太兵衛さんは兎や角言はず元の鞘に納めた。今は女の子二人、男の子一人もつて、丸髷に齒を染めた三十女の赤ら顔、店から裏へかけ油斷なく黑い眼を見張つて、世帶もちに納まつて居る。居酒屋をするので、往復の馬力がよく母屋の藤棚の柱に馬を繫いで、飲食する。間にはおかみの昔知る男が醉つぱらつて、「お

末さん、ああいふ事もあつたつけがな」と面と向つて驅落の昔を素破ぬくと、おかみはにやにや苦笑して、それが爲勘定の一錢も負けるやうな事をしなかつた。總領娘は葉山に別莊をもつさる大名華族の家に小間使奉公して居、次の娘は小學校通ひ、嗣子の貞公は今年六歳のわんぱく盛り、大人の眞似して卷莫片手に屹と人を見上げる眼はおかみ其ままである。以前は店の細長い土間に二十歳餘の女が立働いて居るをよく見かけたものだ。それは先妻の女で、夫に死なれ男の子一人連れて戻つて來て居るのであつた。其女も去年亡くなり、今はおかみの實母が來て、孤になつた孫の虎吉を世話し、太兵衛さんの農事の手傳ひなどもして、まめに働いて居る。七十近いきつい氣のお婆さんはよく働くかはり、時々癪を起して木小屋に寢た。駒子が見かねて時々やはらかい食べ物を持つて往つたりしてやつた。また喰べ過ぎだよ、とおかみはやさしくしなかつた。ぶつぶつこぼしながら、お婆さんは其内また起き出て働いた。「おつかさん、鮭を燒いときましたよ」と太兵衛さんが姑をいたはつた。「ささほうかいねェ」と孫の虎吉をあやして居る事もあつた。熊次の父は「太兵衛さん」と呼び、母は「おとつさん」といふた。熊次駒子は三人稱で太兵衛さんを呼ぶ時、いつもP公と曰ふた。Papa の頭字である。P公の道樂は

酒である。鬱はらしにも、くたびれ休めにも、酒である。どうかすると、朝から始めて居た。夜は一日の勞働に疲れ切つて、風呂の中で鼾を立てた。獨酌の手すさびに、孫の虎吉にも飲ませたりして、五歳兒が赤い頰をして破蒲團に小さな鼾をかいた。

三

以前熊次の父母が居た日あたりのよい南向きの八疊と其前室ともいふべき北向きの八疊は、東京は深川の商家の隱居夫婦が借りて居、同じ南向きの八疊の臺所とそれにつらなる北向きの八疊は大杉のお婆さんに貸してあつたので、熊次駒子が借り得たは北向きの中の八疊一室に過ぎなかつた。天井、大黑柱、建具などすべてがつしりした田舍普請の黑光るまで時代がついて居るに、舊冬さながら待ちもうけのやうに換えたばかりの無緣琉球の眞新しいのが氣もちが好かつた。室代は月二圓、夏場だけ月五圓といふ約束であつた。先には此室の東南の隅に觀音開きの佛壇があつて、ある夏其處から靑大將がによろによろ這ひ出して來た事があつたりしたが、今は取り拂はれて、其あとにニス塗りの西洋簞笥が嵌め込みになつて居た。以前永らく此家を借りて居た海軍人の置土產といふ事で、英國出來らしい櫛(すき)製の素晴らしい大型の簞笥である。如何樣に大きな畫用紙でも樂(らく)に納まりさうなのが、何より熊次にありがたかつた。臺所の

八疊は大杉さんに貸してあるが、留守ではあるし、炊事場は自由にお使ひ下さい、といふ家主の挨拶であつた。八疊から段落ちの流しにつづく板の間もゆつくりして、農具木臼など隅に置いた土間の濶々したのが田舍らしくて好かつた。井は裏口に直ぐ近く、砂地に低い苔蒸した切石の井戸側、蓋にのせた一つ釣瓶の竹竿が今は裸の無花果の木に立てかけてある。井は淺いが鹹氣は絕えてなく、軟らかい良い水である。雞の家族のくくとあさる砂地に物干しが立つて、向ふは直ぐ綠三寸の小麥畑、兩隣は斜に引込んだ何れも農家。小麥畑の一丁向ふは、高さ三百尺の屏風を立てたやうな櫻山、峰には黑松が立列び、山腹はかさかさした枯萱が一面白茶色の波をうたして居る。

着いた翌朝から、夫妻は自炊生活を始めた。隱宅から母が梅干を持たしてよこした。それからは決して搆ふ事をしなかつた。夫妻も心を引きしめた。すべての負債を拂ふまで、月十圓で生活の方針を立てた。買ひ置きのヘツトを持つて來たので、駒子はよく肉ぬきの葱の綠がちで硬いやつを燒いて食はした。稀に卵でも落せば、恐ろしい贅澤であつた。前川の潮が干(ひ)ると、二人は養神亭下の砂に下りて、小さな淺蜊を掘つてはうまい貝のつゆが出來た。濱で拾ふ雞冠苔(とさか)

は刺身をはなれてもこりこりしてうまく、綠の毛糸を一房剪り揃へたやうな松藻はしやきしやきし、褐色の素麺を束ねたやうなオゴは三杯酢でもよく、味噌汁の實にもならない事もなかつた。藥味が欲しければ山に自然生の山椒の木も苗もあり、摘めば田甫に芹も蓴も土筆嫁菜もある。山で採る山みつばは畑のより香氣が高く、石蕗は蕗よりうまいが、それはもつと暖かになつての事である。豆腐は山の根から毎日賣りに來る。蒼い顏して胡散臭い眼をした丁髷の五十男は、昔の大聖舜ならなくに姉妹二人を妻にして居るさう。葉山から日々魚の荷を擔いで爺さんが賣りに來る。南國の海邊に生れて魚でそだち、今も刺身なしでは夜が明けぬ熊次の父が以前からの得意で、仲よしである。天鵞糸のやうな黄白い髮を丁髷に結ふて、眼口鼻の大きい、俠客肌の惣五郎爺さんは、きまつてあらめ屋の前で荷を下ろした。如何かすると商賣そちのけに、居合はす者を相手に、てきぱきした口調で何角と話し込んだ。其家近く別莊をもつ「天子樣の歌の先生」の噂がよく出たものだ。「へい、今日は」の濁聲と共に、どさり荷を下ろす。南の八疊に居る深川の隱居が庭まわりで一番に出て來る。若い頃は相場などもやつた活氣な、丈の高い、藥鑵頭の爺さんである。お婆さんと唯二人きりなのに、毎日きまつてこれはといふ程買ふ。買

つても、まだ後が欲しさうにして居る。相撲の海の鱗族を腹に入れてしまひたげな買ひ振りである。「そんなに！」とお婆さんが抗議を申出る。「でも、生きてるんだ。」と爺さんは口をもぐもぐさせた。熊次は魚にも好惡があつて、所謂上魚でなければ納まらなかつた。然し何も經濟の問題である。駒子は時には五錢が鰺を買ひ、時には奮發して十錢のセイゴを買つた。あらめ屋のおかみも、稀にはP公が晩酌の肴に、五厘が鯖の切身を買つた。「何、五厘？」と惣五郎さんは圓らな眼を見はつた。

氣樂な周圍に、熊次の氣分は好かつた。雪が降つても、流石に湘南のそれは融くるに早かつた。「漁師の娘」の校正が濟む頃、東京では英照皇太后陛下の崩御があつて、喪裝した都の狀も、京都へ御歛葬の大儀も、すべて新聞で知る田舍はやはりのんきであつた。二丁とはなれぬ父母の住居、其處には兄の家族も居るが、老人の心づけで甥等が邪魔にも來なかつた。實子は月の初に祖母に連れられ、津森叔母の女子學院に預けられた。告別に來ると、叔父はこんなものを書いて與へた。

お實坊の遊學を送る

ねびえすな　またたべすぎな　をばさんの
いふことときいて　けいこせいだせ

「お實ちやん、分つて？」

と叔母がきいた。

「分つてるわ。ねべぇツて、寢ぼうする事でしやう。」

と女學生の卵が言ふた。

月の終り方には船便の荷物も着いて、引越しはいよいよ完全に濟んだ。さし當り不用の物は高所の土間に積ましてもらつたが、箪笥、本箱、椅子、テエブルなど持ち込んだので、八疊一室はしたたか狹くなつた。それは最初の氷川町隱宅の二階の六疊生活に立歸つたやうなものであつた。狹いだけまたちんまりして住みよい氣にもなれた。幼少時代からの愛讀書に、熊次は今昔物語を數ふる事が出來る。閑地に就いた宇治大納言が、宇治の道傍に茶店を設け、休らう貴賤老若がさまざまの話を簾越しに聞いて書いたと傳へられる。三崎街道に面ふ八疊は、障子をしめても話聲は手にとる如く聞こえた。障子を明けると、街道は人の往來の活畫卷物、川向ふ

の養神亭では茶代澤山の藝者連れのお客を送り出す女中番頭のお辭儀の丁寧ぶりも、浮世畫の一枚に値した。東京から眉をとつた子役者が大勢遊びに來て、子供並にきやつきやつと騷ぎ廻はると、「おもちやさん！」などと男衆の注意を叫ぶ一日もあつた。沖から迷ひ込んだ黑い水鳥の一羽を取りこめて、養神亭下から乳屋は長竿でたたき、饅頭屋の亭主は小舟を飛ばして猎を投げ、街道も橋も養神亭も人間總立ちで一羽の巧みに水もぐる鳥を的に囃し興ずる日もあつた。

熊次は畫筆を遊ばせて居なかつた。相摸の海の魚は食はずもあれ、風景に鬱きに來た彼である。うんと畫用紙を彼は仕入れて來た。三脚も、錫の水入れも、彼はもう揃へて居た。落ちついて住む眼には、通りすがりの眼に入らぬものが映つた。見るもの、描くものが身邊にざらにあつた。さしよりは富士である。あらめ屋の緣から富士は見えぬが、沓脫石を下りて十歩街道端に出れば、川向ふ養神亭のはづれから左手に富士が覗いて居る。富士の向つて左に眼立つて小さな尖つた山を、あらめ屋のおかみも覺えて居て、山の名を問ふ客があれば、「あの、はあ、頭の尖つた山がございますでしやう、あれが金時山でございますよ」と、きまつて敎へる。然しあ

らめ屋の庭先から碌に海山の眺望はない。街道に出て、二十歩西へ川口へ行く。川口の砂洲につづく相摸の海、それを見越して眞白の富士が北西にまさまさと現はれる。眼ざましい富士、東面の富士、そこには西から見る頂の歪みもなく、南から見る寶永山の大穴もなく、北から見る群山の小うるさい邪魔もなく、大空を上に、海を下に、のびのびと左右の裳を垂れて思ふさまゆつたりとした端麗な富士である。其富士をうちのせて、相摸、伊豆の連山が龍の如く南にのたうつ。富士の膝下には、常住禮拜の香爐を据えたやうに江の嶋が据はつて居る。何の隔てもなくあからさきにうち向ふ熊次は、唯それぱかりでも逗子に來て住む甲斐はあつた。自然は然し單調な重複をしなかつた。雪に最初のもてなしを受けた熊次は、次から次ぎとさまざまな自然の氣分に觸れた。白白と日は照り、富士をはじめ山といふ山皆はつきりと見えながら、南風浩浩と吹いていつも碧一色の相摸の海に千萬の白馬跳り白龍狂ふ日、街道側の枯草を吹きちぎる風威を斷崖の蔭に避けつつ鳴鶴が岬に三脚を据ゆる熊次の氣は海と共に昂つた。冬ながら寒からぬ雨夕近く收まり、遠山は猶雲にかくれ、とろりと白い海のあなたに江の嶋ぼんやりと浮む夕、川口のさし汐に鰤網をうつ簑笠姿は、水墨で往きたい和やかなものであつた。或は雲間に

日入つて海臙脂色に澱む夕、飛石めいた磯岩に起ちつ蹲みつ影を落して漁婦達の貝を採る、或は逗子の濱一帶を金色に染むる伊豆の入日に、引きあげられた舟の影長々と砂に臥すも、看過せぬものであつた。時には駒子を誘ふて、山越えして鎌倉に行くとして、松の木の間の富士に二時間三時間も引きとめられた。西になだれた山畑の麥は痞せても、振り面白い松を透かした雪の富士、江の嶋も海も見ゆる其處の景色は又なく好かつた。此樣な處に住みたい、と駒子は曰ふた。然さ、水が自由だつたら好いがね、と熊次も殘惜しく見廻はすのであつた。出ては描き、歸つては障子をあけて夕明りに塗り殘しを塗つて居ると、深川隱居のお婆さん緣側傳ひに來て蹲みながら熟々覗き込み、

「私の知り合ひにも、陶器の畫をかく人が居ますが、中々根が盡きるものださうですねェ。」

と、貧しげな畫師をいたはつた。むつつりと碌に返事もせぬ素人畫師は、後で「あの Vulgar が」と駒子にいきまいた。熊次はそれから其お婆さんを Vulgar, Vulgar といふた。Vulgar の室へよく隣の車屋の小娘が遊びに往つた。トンボを結ふた小娘が裏つづきにちよこちよこ走つて行くと、お婆さんは舐めるやうに可愛がつた。「菓子をもらひに來るんだ。」と肴好きのお爺さ

んは吐き出すやうに曰ふた。

*　*　*

逗子に來て、一つの面倒は歐羅巴の兄に轉居の報告をして、事後の同意を求める事であつた。慮劫だ。然し默つて居れぬ。熊次は思ひ切つて長手紙を書いた。それには、逗子轉居の止むべからざるあらゆる理由が、箇條書きにせられた。

「すでに新山、田尻輩と伍して、宇土の頑使是れ奉ずる能はず、さればとて特立一敵國を造る力なし、此まま行かば悶死の外無之と存候……昔者ゲエテ、ミュヨンに言はしめて曰く、獨逸は寒し、伊太利に行かんと。東京の空氣は私にとりてあまりに冷たく候。願はくは湘南に往かん。」

また斯くも書いた。

「私も此頃は人に隷たるを甘んぜざる心湧沸するを覺え候。……月給の如きも、今迄のやうにして可なるか、誰に相談すべくもあらず候へば、依然十一圓宛受取り可申候。」

第二章　「トルストイ」

一

明治二十三年の夏、受持ちのK雜誌雜錄欄に、熊次は「露國文學の泰斗トルストイ伯」を二號に涉つて書いた。それは同雜誌に「佛國文學の泰斗」としてゾラやドォデエの事を書いたつづきに、「今度はトルストイを書いたら」と兄に云はれて、云はるるままに書いたのであつた。トルストイといふ名は熊次に初耳で、トルストイの著作などは勿論一冊も見ては居なかつた。米國の繪入雜誌 The Scribner's Magazine に據つて 性行履歷の一斑を書いたまでである。露西亞の貴族、小說家で、今は百姓の生活をして居る變物といふにいささか興味をもつたが、それ切りの事であつた。兄は其頃私淑して居た英國の詩人で批評家の Matthew Arnold の批評文集に、トルストイの小說に關する評論があつたりした事からトルストイを識つて居て、彼の書

架には英譯「戰爭と平和」などものつて居た。然し熊次がそれを取り下ろしたは、「露國文學の泰斗トルストイ伯」を書いた一年の餘も後の事であつた。其頃反政府の新聞は、よく長い發行停止を喰つて、時には一ヶ月の餘も啞にされたものである。期限が分からぬので、社員も遠出は出來ず、毎日一寸出社しては「未だか」と歸るを例とした。K新聞に課せられた其無理休暇のある一日、熊次は散歩に青山墓地に往つた。明るい、寂かな青山墓地を彼は好きであつた。秋も半を過ぎ、よく晴れた日の午後であつた。熊次は黑いクロオス表紙の大きな一冊を脇ばさむで居た。出かけに兄の書架から不圖取り下ろした英譯「戰爭と平和」であつた。麻布三聯隊の赤煉瓦を淺い谷の向ふに見る、靄ながら虫の音のする空地の草生に足投げ出して、件の大冊を披いた。米國ハアパア社出版の Quarto 型二欄ベタ詰の廉本で、假綴にクロオスの表紙は買主がつけたものらしい。その所有者が確に讀みはじめた事は、二頁の「勢力は資本である」と云ふ句に青鉛筆をひいて居るので分るが、讀み通したかは疑問であつた。全くそれは讀みづらい印刷の、取りつきにくい小說である。時は一八〇五年、處は露京聖彼得堡の皇太后女官の客間、對ナポレオン戰爭前の空氣に居馴染む事は容易でない。讀んではやめ、やめては讀み、

兎に角頁を進めて往つた。人物は皆生きて居る。中にも五分刈頭に近眼鏡、大きな圖體で眞摯な眼をした、莫斯科貴族の私生子ピエエルが出て來ると、興味が頓に加はつた。作者は此男を愛し、自己の多分を彼に投入して居るらしく、彼を通じて熊次は自分自身に繫がる一線を感ぜずには居れなかつた。讀み讀んで、日が入るまで讀みつづけた。鳥の聲に顔を上げ、ややあつて卷を掩ふて熊次は大息した。全く大手筆である。二葉亭の「あひびき」や「めぐりあひ」で知つたツルゲエネフに女性美があれば、此トルストイは男性的作家だ。二十歳の秋に京都は愛宕山下の淸瀧で徹夜して「Les miserables」を讀んで Hugo に參つた以來のそれは昂奮であつた。熊次はトルストイがしたたか好きになつた。其後社中で英國文人叢書に倣ひ、「十二文豪」を出す事になり、或者はカアライルを、ある人はマコオレエを、荻生徂徠を、近松門左衛門を、新井白石を、ゲエテを、ヲルヅヲルス、エマルソン、ユーゴ、頼山陽、瀧澤馬琴をそれぞれ分擔した。トルストイは自然熊次の擔仕になつた。

兄の所藏の「戰爭と平和」は、上卷だけで、ナポレオンの莫斯科占領及び其以後が缺けて居た。下卷を得るは容易でなかつた。明治二十五年には早くからドストイエーフスキイを耽讀したU

君の「罪と罰」の翻譯第一卷が出た。京都のT君などはとくにトオストイを最近の著書まで讀破して、「眞理」といふ雜誌に「トオストイの福音」など書いて居た。然し熊次は「戰爭と平和」の上半を英譯によつて見ただけである。露西亞語で直接露西亞にぶつからず英吉利經由で露西亞に近づくのももどかしい事であつた。英國でも露西亞研究は漸く盛に、鋭敏な記者 W. T Stead などは露探と目せらるるまで露西亞の紹介に努力したものである。ステツドの著「露西亞についての眞實」には、トルストイに關する一章があつた。彼はヤスナヤ、ポリヤナに逗留し、トルストイの書齋で其章を書いて居る。新信仰に入つたトルストイの思想、生活がそれによつて覗はれた。國家を否定し、兵役を非認し、勞働を高調し、無抵抗を唱へなど、虚無黨から暴力を取り去つて然も虚無黨より根こそぎ激烈な主張は、地盤が露西亞だけに全く著しい現象であつた。面白い男だ。痛快な爺さんだ。全く書くにも面白い題目だ。もつと知りたい。最初から順を追ふて知りたい。それには彼の著作を年代順に讀まねばならぬが、國語漢文以外は英語しか解せぬ彼は、英譯をたよる外はない。英國でも露西亞小說の翻譯は盛に、トルストイの翻譯も數種出版せられて居る。目錄で知つて、丸善に注文しても、中々來なかつた。ジヤバ

ン、メエルのケルリー、ヲルシ書店の新着目錄に「アンナ、カレニナ」を見つけて横濱に飛んで往つたは、明治二十六年の五月であつた。歸る瀛車の中で、初めて吾有にしたトルストイの著作、英國スコツト版の革色クロオス表紙七六九頁分厚の一冊を披いて、挿畫を見たり、ベタ詰の本文を覗いたり、わくわくした心地を熊次は忘るる事は出來ぬ。「戰爭と平和」と並んでトルストイの二大小說と稱せらるる「アンナ、カレニナ」、其梗概はアルノルドの評論で知つて居たので、案内なしに最初踏み入つた「戰爭と平和」程の驚駭と感激はなかつたが、五十男のトルストイは此處にも儼然と生きて、愛して、惱むで居た。

「アンナ、カレニナ」を熊次が讀み終る頃、露西亞から新歸朝のKといふ人の話を聞きに、熊次は兄に誘はれてある夜本郷の從兄沼山の又雄さん宅に往つた。Kさんは駿河臺の正教會神學校卒業生で、遠く莫斯科大學に游び、トルストイにも近しくして、共に「老子」の露譯などしたといふ人であつた。聽者は主の又雄さん、肥後兄弟、組合教會のH牧師、S牧師など小さな集會であつた。基督の基督教を唱へ、國教會から破門されたトルストイに、牧師達も興をもつて居た。三十餘の八字髯、着流し姿で商人風のKさんは、トルストイを中心にさまざまの露西

亞話をした。「露文を讀むのをお聞きなすつた事がありますか」といふて、Kさんは持參の假綴本から一頁を讀んだ。而して「何だと」といふ問投詞を澤山入れて、それを口譯した。それは屠牛場の描寫で、卽ち肉食否定論の一節であつた。Kさんはまたトルストイの新著「クロイチエル、ソナタ」の話をして、短刀の切尖がコオルセットを穿つあたりの描寫が何とも云へぬ、と嘆美した。後年Kさんは K誌の爲に其「クロイチエル、ソナタ」を譯し、而して紅葉山人が眞赤になる程原稿に朱を入れ、雜誌に連載したものである。

丁度其頃丸善に米國版の海濱叢書が澤山着いた。米國でも露西亞研究が大分盛んで、The Century 繪入雜誌に掲載された記者ヂォルヂ、ケンナンの西比利亞囚人の生活狀態探檢記などは頗る騷がせたもので、露西亞小說の翻譯も續々出て居た。海邊叢書の中にも、トルストイ初年の作が數種入つて居た。「哥索克」「セバストオポリ」「夫と私」「ポリクウシカ」「イヴン、イリツチの死」「二代」などを熊次は追々に買つて讀んだ。程なくかねて注文して置いた英吉利版の「幼年、少年、及青年」が着いた。トルストイの處女作である。それには幼、少、青年のトルストイが自己を語つて居る。熊次は深い愛と同感を以て讀んだ。「戰爭と平和」に始まつた嘆

美は、處女作に還つていよいよ深い愛になつた。

十二文豪の「トルストイ」を書く事は、熊次に所謂義務ではなかつた。ジョン、ブライトを傳し、コブデンを傳し、グラッドストーンを傳するよりも、At home な仕事であつた。何といふても、型を同じくする人である。日本、露西亞と隔つても、赤の他人では決してない。斯正直な我儘な、撞着だらけの露西亞男に、熊次は多分の自己を見出す事が出來た。擴大された自己を其人に見る心地もした。要するに「トルストイ」を書くのは、熊次に樂(たのしみ)であつた。彼は新聞社の仕事の暇々に、得る限りの材料を集めた。上野の圖書館に往つて調べても見た。然し佛蘭西語、獨逸語を得讀まぬ彼に、多くの獲物はなかつた。甥の貞雄が所謂「サカナやさん」の田崎さんは、二葉亭と並んで露西亞文學の先達であつたが、ツールゲネフ、ドストイエフスキイ、ガンチヤロフを推稱するに反し、トルストイをあまり識らなかつた。たまたま熊次の爲に露國文學史の中から田崎さんが抄譯して來てくれたのは、レフ、トルストイでなくて、從兄アレクセイ、トルストイのそれであつた。

十二文豪は卷を逐ふて滯りなく出で、番外の「ジョンソン」「シルレル」なども出た。今は瀧澤

欠

馬琴と、賴山陽と、トルストイだけが殘つた。「罪と罰」の譯者U君が「春風裡」と題して女學雜誌に「夫と私」を譯載し、K誌に「凄涙」と題して「ポリクウシカ」を出し、博文館から田君が「哥索克」の譯を單行本で出し、森鷗外漁史が「瑞西の客舍に音樂を聞く」と題して、「Lucerne」を譯し、早稻田文學には「生ひ立ちの記」の紹介も出で、作家トルストイも追々知られて來た。熊次は未だ「トルストイ」を書かずに居た。社の出版係植木君は、兄の家塾以來の人である。自由主義の塾に對し、國權黨の學校は石を投げたり、さまざま敵意を見せた。其對抗豫習に、塾の先輩等が夜間敵に扮して襲擊の咄喊を擧げた。眞先に飛出して來た塾生の一人は、三尺もある薪割を振りかざし、獅子奮迅の勢で敵に迫つた。俺だ俺だと化の皮を脫いでも、彼塾生は執念く追ひすがつた。性根者、恐ろしいやつ、とそれから植木君は他にも言はれた。社の廣告係から出版係になつた植木君は、十二文豪も督促して豫定通りドシドシ進行させた。未だ書かぬ熊次を、植木君は催促の的にせずに措かなかつた。編輯局の扉が開く。くるくるした重瞳の眼が、ちつと遙に見込む。唇に微笑を見せて、精悍の氣人を射る植木君が、突々と編輯局の雜沓を奥の隅つこにぼんやりして居る熊次のテエブルに來る。「未だ『トルストイ』は出來

困り入り申候。併しトルストイ先生の宅を訪れたる砌は、別して快活に有之候。此の男も中々ヌカラヌモノにて、若し文學者で名をナサネば、必ラズ何かで名をナス一僻アル男に御座候。決して蟲も殺さぬ佛樣にては無之候。生活の光景は、『アンナ、カレニナ』にあるレウキンに髣髴致候。土京に到りては、所謂る蒼茫萬古の意、荒烟落日の中より來るの想有之、其の天然の美妙と人事の複雜と相待ち、更らに一種の奇感を與へ申候。

ホンガリにては、例のワンブレー翁を訪ひ候。跛ながら元氣の男にて、其の風采より言語迄安場翁に髣髴致し候。露國退治の一件にて、意氣投合致し候。」

逗子に引越し早々此手紙を受取つた熊次は、最早なまけて居れなかつた。

欠

熊次は「トルストイ」を書いた。緊張した氣分で、滯りなく彼は書いた。四六版十二行三十二字詰の二百三十四頁を書くには、何程の時日も要しなかつた。彼は言文一致で書いた。まとまつた一冊の著書を言文一致でする事は、これが最初であつた。書き馴れた流し文より、口語體は碎けて親し味が多い。舊套を破つて自ら新にする意氣も、其處にあつた。乏しい材料で、大まかに書いた「トルストイ」は、一筆畫の肖像程にも行かなかつたが、それでも數週の勞働の後、戛然と校正の筆を擱いた熊次は、兎に角久しい負債の一つを濟ました感があつた。

「トルストイ」は十二文豪の第十卷として、四月に出版された。薄つぺらな冊子を手にして、熊次は慙悔と喜悅を禁じ得なかつた。彼は其序文の中に斯く書いて居た。

「一身屑々汚塵に眠るを慙づる時には、窃にビュルコフに倣つて、翁の主義の實行者となりたいと思ふ事も度々であつた。今日も猶著者は未だ俗心脱せずして、絶對的の平和を唱へ、非愛國非政府を唱ふる能はざるを悲しむ者である。」

これは眞實であつた。熊次のトルストイ共鳴には、限度があつた。それを越えては、大好きのトルストイにすら全い花環を贈り得なかつた。然し其限度の内に於て、日本に於ける一無名文士の肥後熊次は、スラヴの偉なる魂に僞りなく敬意を拂ふたのであつた。

卷頭にはステッドの雜誌「評論の評論」からぬいたトルストイの肖像を入れた。滿面の鬚髯、寛濶な百姓着の腕組みして、額に皺寄せ、眉と眼を一つにして屹と睨んだ其風貌は、全く兄の所謂「鼻の太い天狗さん」であつた。

熊次は逗子生活の最初の收穫を私に駒子に贈つた。其見かへしに、熊次は斯く書いた。

此冊子の成る、一半は卿の力
此冊子の成る、新生涯の始

明治三十年　四月

蘆花生

贈

愛妻

「トルストイ」の最初の讀者は無論駒子であつた。「アンナ、カレニナ」の梗概に、アンナの再墮落を書いて、「可哀想に、折角再生しかけてもまた墮ちて、終に滅亡まで行かねばやまぬ」の句を、あなたでなければ「可哀想に」の一句は書けません、と彼女は曰ふのであつた。

第二の讀者は父であつた。父は「戰爭と平和」の梗概の中、ボルコンスキィ老公爵の持論「人間罪惡の原因は唯二つ、卽ち懶惰と迷信。德義は唯二つ、卽ち勤勉と知識」と云ふに感服し、トルストイのにまさるも劣るまじき太鼻を洗ひざらしのハンカチで邪慳にごりごり摩りながら咳拂ひを一つして、「其通りたい」と曰ふた。

プライト、コブデン以來の文體が好く、言文一致は惜しい事、と無名のはがきをよこしたは、兄の昔の塾生で、駒子が兄の淸人君と同じ高等商業の退學仲間、今大阪で三池紡績の支店を預かる藤原君とは筆蹟で知れた。社の久野さんは「肩が凝らずに讀めます」と言ふてくれたが、

同志社以來熊次の尊敬する沈田先生はある機會に「やはり普通文體の方がいいでしやう」と言ふた。友山君は梗概が面倒だつたでせうと云ふた。雜誌の六號雜錄欄に熊次が書きなぐるものも必ず眼を通して、好きは讃め、評論なども又ものの翻譯で濟ましてあつたりするをただは見逃がさぬ友山君であつた。新聞雜誌に碌に紹介も出なかつた中に、雜誌「文學界」は、「湘南優遊の傑作にして、言文一致二百三十頁とは驚く可し」と冷やかし、「文士の弱音を吐く泣言は下さらぬ」と評した。泣言云々は、序文の中に、

「著者性疎懶、加之此四五年來志氣銷沈して醉日夢月、自家自家に對して恥づる事のみである。從つて十二文豪の中に『トルストイ』の名は揭げてありながら宿約を果さないで今日に到つた。……

今春思ふ所あつて、身を自然大化の浴槽に投じて滿身の汚穢を一新したいと思ふより、湘南に客となつて、舟を漕いだり、蛤を掘つたり、其際々に曾て讀むだトルストイの諸作を翻して、絶えて久しいなつかしい師父に逢ふ心地がして、融然心は悅樂を覺える。終に筆をとつて此小冊子を書いた。」

と書いたが爲である。

M社の所謂「高踏派」の「文學界」と「文學界」の所謂「世間派」のM社の間には、以前から對抗があつて、賴山陽論の事からM社の友山君と「文學界」の透谷子の間に代表的な論戰があつたものである。透谷子が亡くなつて年ふる今日までも、「トルストイ」は其餘沫を受けたのであつた。

「文學界」の冷評は、顏に茶碗の水一杯ぶつかけられた程の不快を熊次に與へた。彼は「トルストイ」を傑作とも思はなかつたし、弱音は確に弱音であつたが、それが彼の眞實だから致方はなかつた。兎もあれ、熊次は「トルストイ」に於て今の自分の精一杯を書いたことを自ら疑ふ事は出來なかつた。

第三章　春を訪ねて

一

熊次が「トルストイ」に沒頭して居た間に、彼岸も過ぎ、春は湘南に遍ねくなつた。川口の潮干に貝とり青苔採る女子供を前景にして、春の海のたりのたりと、ふりさけ見る彼方に越して來た頃一白端嚴の神威をさをさ眉端に迫つた雪の富士も、雪ながら霞に遠のいて、見る眼は恍惚と空に牽かれる。鈴音ちやらちやら、人人の笑ひさざめく聲、表が賑やかなので障子を開けば、赤、白、紫、色とりどりの美しいきれを飾り立てた馬が三四疋、股引しやつぽの旅姿を上にのせ、大勢取り卷いて囃しながら逗子驛の方へと行く。

「何かな、彼(あれ)は？」

勞働姿で藁草履の太兵衛さんは、午食休みの立ちながらぱくぱく煙管の煙を立てつつ、短い寫

だらけの赤黒い惠比須顏を崩して、

「彼ですかい？　彼は、はア、伊勢參宮でございますよ。お伊勢參りでさア。」

成程、伊勢參宮の出立をあしして祝ふのか。菜の花も櫻も咲いて、日は永く、田畑の世話も未だ閑な今日此頃、お伊勢參りは全く詣向きだ。

熊次も遊びに出たくなつた。

「トルストイ」も兎に角出來、社から稿料四十圓送つて來た。ブライトが二十圓、コブデンが三十圓、グラッドストンが五十圓、歴史の片影は二度の勤めものの寄せ集めで無稿料、それから、今度の「トルストイ」が四十圓――四十圓は少し物足らぬ。いつそ使へ、と云ふ氣に熊次はなつた。そこで其中から十五圓だけ懐中し、和服に薩摩下駄、洋傘に三脚を兩手に、肩から白茶クロオスの寫生鞄をつるし、駒子を留守に、ぶらりあらめ屋を出た。

偖何處へ往かう？

不圖垂水君を思ひ出した。最初寫生の手ほどきをしてくれた垂水君に、昨夏以來不沙汰をして居る。今矢口の渡の附近に民家を借り、畫をかいて居る事を熊次は知つて居た。

矢口へ行かう。

川崎で下りて、矢口へ往つた。油繪を描く人の家は、直ぐ知れた。小さな農家の古壘に横になつて書を讀んで居た垂水君は、思ひがけない來訪にいささか驚いて居た。荒壁に幾枚となく立てかけた油繪を先づ見せてもらう。「菜の花や月は東に日は西に」を其ままのや、澤々と三杯酢をかけて食へさうな春菜の畑、水彩に所詮望まれぬ油畫の境地が熊次に羨ましかつた。描きかけと見ゆる岸は暗く川の面だけ夕榮に明るい一枚は、「渡舟待ち」の下畫さうな。毎日入日の頃少しの時間を描きに行くさう。まだ日も高い。寫生をやつて御覽なさい、と垂水君は洋服に換えて熊次の先に立つた。

「此處が一番菜の花の多い處です。」

と垂水君が足をとめたは、六鄕川の左岸、芽が出たばかりの榛の若木が唯一本立つた堤の上、一方は川水につづくべつとりした土の草生、一方は十二分に咲いた菜の花が眼もはるにうちつづく場所であつた。三脚据ゑて、熊次は恐々鉛筆をとりはじめた。傘をさしかけつつ彼此と注意して居た垂水君は、到頭怺えかねて、

「私がやつてお目にかけます。」

と熊次に傘を渡して、代り合つて三脚に腰かけた。勁い線でぐんぐん大體の位置をとると、直ぐ色を塗りはじめる。中心の榛の木を描く時、よくブラッシをならして、幾度も空にかいて見た後、一氣に上から下へ力强く描くのを、熊次は注意して見た。日はやや傾いて、雲雀の歌いよよ盛んに、氣も遠くなる菜の花の香、眼の下に成り行く畵から心が空になると、さしかけた洋傘の位置が狂ふて、垂水君に熊次は小言を吃ふた。村の子供が三人、來て覗く。相手になつて垂水君は無駄口利き利き描きつゞける。遠くに仲間を見つけて、兎の如く子供が跑けて往つて了ふ。寫生は出來上つた。それは油畵がかつた力强いものであつた。

歸ると、頭の尖つた坊ちやん式の若い人が居た。白馬會仲間の東君。榛の木の油畵を描いて來て居る。「僕にはもつと紫に見えたがなア」と東君の留守に垂水君が榛の木の陰を目する。垂水君の居ぬ間に、菜の花の水彩寫生を見て、腑に落ちぬ顏して東君が頭を掉つた。「渡舟待ち」を描きに行く垂水君と熊次がまた家を出て、少し往つて、矢口の渡を右岸に渡り、日暮れ時の緊張した寫生ぶりを見て歸つた時は、もう東君は居なかつた。熊次は一夜厄介になる事にした。

隣の婆さんが炊いて來た飯に、垂水君は牛鑵を切つたりして、主ぶりを見せた。「抒情詩」といふ新體詩集が社から出るさうで、其挿畵は垂水君が描いたさう。顏觸れは處初子、「サカナヤさん」鴨志田等六人で、杉山といふ人のなどは戀の歌ばかり、と垂水君は云ふた。垂水君は西鶴全集を讀んで居た。何か見つかるかも知れません、と云ふ。上野の展覽會に「あるかなきかのとげ」を後で熊次は見た。お七、吉三を描いた美しい畵、吉三のモデルに藝者を使つたさうで、美少年の足があたら內鬱になつて居た。

二

明くる朝、垂水君の書房を辭して、熊次は川崎停車場に立つて居た。

偖、何處へ往かう？

箱根に行かう、と熊次は思ふた。

大船素通り、國府津に初めて下車した熊次は、紫雲英の酒匂川田甫を右に、松の木の間から白波寄する青海を左に見つつ、小田原から湯本に往つて、其夜は福住の客であつた。

溫泉めぐりも、湯治も目的ではない。書行脚に來た彼である。箱根八里を膝栗毛で越して、沼津に下り、駿河灣に沿ふて少し歩いて見やう。

翌朝宿を出ると、熊次は唯有る店で草鞋になつた。下駄は新聞紙にくるみ、繩でからげて手に提げた。挽物細工の店で、小型の箪笥形の針箱を駒子へみやげに買つて、それは風呂敷包にして頸にかけた。金湯山早雲寺に後北條五代の墓を吊ひ、ぽつぽつ舊道を登りはじめた。

山の空はどんよりして、今にも泣き出しさう。

瀧車が出來てはいつも淋しい箱根の舊道、杉並木ばかり昔で、鋪石の凸凹が夥しく歩きにくい。

緩々と熊次は登つた。須雲川の橋へ來たり、樫の木茶屋に休むだりする毎に、インク瓶とペンと手帖を出して覺束ないペンスケッチを試みた。箱根へ半途といふ畑宿に來ると、道をはさむ茅葺の人家、二子山が當面に聳えて、行きあたりの杉の森に一叢櫻の眞盛りが、三脚を立てて水彩の一枚を描かさずに措かなかつた。矢口で垂水君の寫生ぶりを見たばかりの熊次は、今迄にない力が出て、彼は熱心に描いた。鶯が啼いて、靜かな山の上の春である。

ほとほと雨が降り出した。寫生の筆を收めて、徐に熊次はまた登りはじめた。午も大分過ぎて居るらしく、今朝輕く朝食をとつたばかりの腹は恐ろしく減つて、足が重い。雨はいよいよ本降りになつて、持ち重る洋傘の毛繻子は追々雫を滴らし、着物は濡れ、襟にかけた針箱は搖り上げても搖り上げてもずり下つて、したたか咽喉をしめる。ほつほと全身に湯氣が立つが、止まればがたがた身ぶるひが出た。畑宿以來人つ子一人通らぬ山の上、霜枯れた山笹萱茅をたたく雨の音がざあざあと身にしみる。淋しさ過ぎて凄くなる。熊次はヤケになつて路を擇まず登つ

た。息切れがする。咽喉がかわいて溜らぬ。いきなり彼は膝をついて、坂路を小川の如く流れ來る雨水をしたたかに飲んだ。少しは元氣づいて、峠に來た。石の地藏が立つあたりから、路は下りになる。雨にぼかされた蘆の湖が眼下にあらはれる。箱根宿の昔の本陣石内に着いて、びしよ濡れ着物を宿の褞袍に更えた時は、山の上の雨の夕暮、もうランプがついて居た。

熊次は箱根に三日泊つて、蘆の湖と駒ケ岳に親しむだ。夏は避暑の外人に賑合ふらしく、宿の座敷に籐の寢臺、籐の椅子など其ままになつて居て、欄干下にボオトなど繫がれて居るが、春は淋しい山の上であつた。關所址に三脚を据ゑると、しきりに鶯が鳴いた。箱根權現の石の大鳥居、大石燈籠を前景にして、駒ケ岳の圓つこいゆつたりどつしりした姿も好かつた。噂に聞く逆さ富士は生憎見えなかつたが、練つたやうな湖水の上を、蛯子の方から小さな舟が櫓擬軋々次第太りに此方へ漕いで來るも、捨てられぬ趣であつた。

着くと直ぐ言ふてやつた爲替が駒子から屆いた。郵便局もかねて居る宿のおかみが、休日でも難なく渡してくれたので、四日目の朝熊次は箱根を立つて三嶋へ下りた。雨の登りは鬱陶しい事であつたが、麗々した春の日ざしの駿河灣を一目に見下ろして下りは快豁であつた。熊次は

時々立止つて三脚を立てた。北が打開いた處へ來ると、右手に偉きな富士を近々と望むだ。きまりが悪い程、それは近かつた。富士に侍る愛鷹山は赭い膚に紫の頭して、裾野は菜の花の黄茫々と、春は其處に闌である。わが居る山は冬枯がれのままながら、姿は見せぬ鶯が頻に鳴いて居る。やや下りた處に、小さな施行茶屋がある。下總の神道信者といふもんぺをはいた丁髷の爺さんは、廣爲道友鑄此釜云云と鐫つた眞鍮の大茶釜から湯を汲んで熊次に茶をすすめ、三尺もある火箸を双手に突きながら、

「我里はなどかく春の遲かりき
麓は花の散ると聞かくに」

といふ詠み歌をにこにこと熊次の爲に誦した。施行茶屋は寒中もずつと開いて居るさうな。「箱根越す人もあるらし今朝の雪」といふ芭蕉の句を、熊次の父は感吟して居た。瀛車は出來ても、雪の山路に施行茶屋の熱い茶一杯、焚き火の一あたたまりは何程の人助けか知れぬ。

玉くしげ箱根の山に家居して
いくその人を救ひけん君

寫生帖の一葉引きちぎつて、斯く鉛筆の走り書きしてあるじの翁に酬ひ、互に莞爾と別れたも旅の一興であつた。山中宿を過ぎ、松並木を三嶋に下りた。「富士の白雪土用に解けて」と俚謠に歌ふ三嶋は水の美しい所である。一歩町を出れば、紫雲英の一面に咲いた野らを、玉のやうな川が流れ、それに鄙びた大きなふるい水車がゆるやかにめぐつて居るも、看過されぬ景色であつた。

三嶋から車で熊次は牛臥の海水浴旅館に往つた。昨夏戸田から暗い心、焦立たしい神經で來た時の周圍の雜沓と衷(うち)の責苦のかはりに、外には靜かな春の海山、内にはそれに調子を合はす和やかな魂があつた。山の上の春も好かつたが、海のそれも好かつた。熊次はゆるやかな波のささやきを枕邊に聞いて、穩やかな夢を結んだ。

あくる日は、糸のやうな雨が降つたり止んだりする日であつた。しつとり濕つた砂地をあるいて、熊次は我入道の漁村の淋しい春雨を味はひ、水白い狩野川邊に三脚を立てては、向岸の松の絶え間から紺色に半身浮かす愛鷹山、ほんのり黄ばむ菜の花の小雨にぼけたりあらはれたりするのを愛でた。沼津の町を北にぬければ、即ち箱根の山から見たあの一面の菜の花、畔の紫

雲英の紅流れて、向ふに青う村たそがるる裾野の雨の夕暮も、耶馬溪の文人畫師ならなくに、洋傘の蔭ににじみがちな寫生の一枚を獲させずには措かなかつた。

其翌日は美しい春晴、「春風や三保の松原清見寺」といふ日和。然し昨夏遊んで思ひの外に興薄かつた興津や三保に、熊次の氣は向かなかつた。沼津から瀛車で蒲原に下りて、海邊の松原を其處此處と畫趣を求めて歩いた。瀛車の上から見る蒲原あたり、甘蔗の綠房々と南國めいた繁茂を見せて、はらはら松に清見潟の晴波を透かした趣はまさに畫であつたが、下りて歩けば描きたい程のものもなかつた。熊次は海濱傳ひにぶらぶら富士川の川口に往つた。土筆、蒲公英を踏みしだきつつ、古田の畔を彼方此方と歩いた。ふり仰ぐと、富士は直ぐ其處にあはやぶつかりさう。少し左の肩を聳やかし、懐をあけはだけた此處の富士は、相摸の海を隔てていつも見る富士のやうではない、あまりに近く、何でもなさ過ぎる、と熊次は思ふた。此處の景色も何だか眼新しいものではなかつた。何時か何處かで見たやうな、と熊次はまた思ふた。不圖思ひ出した。それはK新聞の創刊の年であつた。熊次は上野で初めてパノラマといふものを見た。それは正しく此邊から描いた富士を中心の景色であつた。「傘を持つて來なかつたが、とうつか

り思ふた」と先に見た社員の一人が言ふたやうに、それは今にも降り出しさうな綠も重い富士景色であつた。今見るは夕晴れの富士、然し一日歩き疲れた熊次は獲物もなしに永い春日の暮るる頃、岩淵の小さな宿に往つた。

あくる朝、宿は未だ寢て居た。熊次は起きぬけに、寫生道具提げて富士川に急いだ。川の流れを分つた一派の潭に三脚を据ゑた。冷やりとして清清しい曙である。曙の富士は八合以上薄雲の被をかついでわづかに雪をほの見せ、膚はすべて薄い桔梗と薔薇の夢見姿である。左に裾山の一つが低く、右の麓一帶は川沿ひの木立ぼいやりと、其中程に一叢近く濃碧の森があつて、其處から睡氣な鷄の聲がする。ぼうつとした川水を覗けば、其處に曙の空も富士も裾の森も眠つて居る。眼程には言ふことを聽かぬ手をつかつて、兎も角も一枚の寫生を成し果てた。春の曙、富士川の富士——此春游の畫卷を結ぶそれは恰好の獲物であつた。

三

醫宅に兄の手紙が倫敦から着いて居た。中に熊次への答があつた。

「熊次氏逗子轉居は、至極同意に候。『君子沒世惡名不稱焉』といふ諺を服膺、何ぞ世道人心のため有益な著述を致され度候。」

熊次にそれは一向うれしくもなかつた。言つてもらうまでもない事である。先に社の財政を紊亂した加世田の一條が報ぜられた時、父への返書に、「小人無罪、懷璧有罪」と兄は書いた。それは熊次の氣に入らなかつた。其處に少しも自反自責が見えぬのが彼に不滿であつた。今自分への返事にも、熊次は高くとまつて居る兄の態度がやはりうれしくなかつた。

宇土君は宇土君で、新聞に書いた。今時の所謂文學者は大志なく、金を獲ては溫泉場に遊んだりするに過ぎぬ、云々。熊次が「トルストイ」の稿料を受取ると直ぐ箱根に往つた事を知る宇土君の、それが熊次へあてつけでなくて何であらう？

熊次は不快であつた。氣がくさくさする。ええ、もつと遊んでやれ。

「三崎に往つて來る。」

駒子に申渡すと、熊次はあくる日さつさとあらめ屋を出た。洋傘なしの三脚持參である。四月も暮のよく霧れた日。はつきりと富士が此方向いて居る。數日前草鞋で越えた箱根が左の方に見える。小さく二つならんだ二子山で見當がよくつく。鳴鶴、森戸と歩んで、長者が崎に來た。これからは生路であつた。三浦半嶋の北西に引込んで、鳴鶴岬に南を限られた逗子の濱から見れば、富士を主の相摸の海はさながらの湖で、溫藉な落ちついた感じであるが、海づたひに南へ行く程富士は段々奥へ退ざり、海は南に太平洋に開け、烽火臺のやうな大嶋の煙、伊豆の天城山は龍頭の海に浮べる如く、景色は豪宕なものになつた。

白い波を見下ろす崖の上の路、雲雀鳴く穗麥畑路、生簀の大籠を道の眞中に引きあげたり何でも屋の店先に土管の山を積んだりした里を通つたりして、長井に來た。葉山あたりから遠望して、何時も長々と三崎を隱してさし出た崎である。熊次は此處で小鯛の煮附で晩い午食を食ふた。

長井からは鋸の齒形に入江がつづく。淺い入江は、海について曲つた路を行く。小網代の深い入江は、二十錢出して小舟で横切つた。未だ三崎へは來なかつた。此路を硯友社の眉山が歩いて書いた名文「ふところ日記」を、熊次は未だ見て居なかつた。彼は唯ひた歩るきに歩いた。日が傾いて、風が吹き出した。熊次は欠伸しいしい下駄ひきずつて歩いた。衣笠の史跡吊ふでもなく、油壺の大學の臨海實驗所を訪ふでもなく、何思ひ何案ずるでもなく無我夢中に六里の路を歩るいて、入日黄いろく港の夕浪風騷ぐ三崎に着いた時は、興も何もさめ果てて居た。山手の小さな宿の二階に上つたが、はづみがついた體はぢつとして居れなかつた。三崎は一向面白さうでもない。一泊して明日城ケ嶋に往つて見る氣にもなれなかつた。直ぐもう歸りたくなつた。浦賀に寄る東京行の小蒸瀾があるといふので、熊次は直ぐ其船で浦賀に行き、明日は歸るにきめた。

正客が魚の籠の間に、それでも人は横になる餘地があるにはあつた。薄暗い船燈頻に搖らいで、瀨戸口の海は荒れて居る。夢現の間に船は三崎を後にした。

浦賀に着いたは、もう眞夜中であつた。艀で上つた三四人の中に、熊次もあつた。浦賀へは大

津から一度來た事があるが、夜は勝手が違ふ。人々の後について、熊次は水に沿ふ暗い一筋町を歩いた。港町の夜はふけて、敎へてもらつた宿は中々起きなかつた。起きても、あけてはくれなかつた。明るい家がある。と思ふと、それは女郎屋であつた。川崎が不圖頭に浮んだ。然し熊次は尙少し歩いた。赤い角燈が眼についた。交番である。覗くと、黑い姿が居る。眠つて居るやうであつたが、熊次の聲に直ぐさめて、仔細を聞くと、「それはお困りでしやう」と先に立つて、先刻起きなかつた宿をたたき起してくれた。巡査さんの聲がかりで、一日の徒歩と半夜の船疲れを、熊次は人間並の宿の二階に休める事が出來た。

昨日は三崎まで唯歩いたきりで、鉛筆スケツチ一枚出來なかつた。今日は日の出前に宿を飛び出し、空に水に朝の光の靜に盈ち滿ちた灣内の景色を一枚と、灣口から鋸山の方を望んだ景色を一枚と、心長閑に成し果てた。眞夜中に來て朝飯前に飛び出した怪しの客は、宿に歸つて午飯近い朝飯を濟ますと、尋常に拂ふものを拂ふて、浦賀を後にした。一度は獨、二度目は父と來た事もある大津を通つて、横須賀からは瀛車で歸つた。

兎も角もわが住む三浦半嶋を一周した譯である。

第四章　兄歸るまで

一

暖かい時候になつて、肴好きの深川爺さん Vulgar 婆さんは東京に歸つた。熊次駒子は早速其あとに引移つた。先に父母も居た南向きの八疊は縁つきの藺疊、東側が半間の床の間になり、床の間につづいて二段の押入戸棚がある。縁から南に折れて大きな茱萸の蔭に厠があり、板の間つづきで北に浴室がある。表に住むだ程は、隱居夫婦が濟むだ後で、手拭さげて店から土間を通つたものであつた。八疊から西へ續いて薄暗い三疊半がある。其處から新しく取りつけた小さな臺所が張り出しになつて居る。前室かはりに表の八疊も奮發して借る事にした。三疊半と西隣の間は紙張りの千本格子で立て切つてあるし、表の八疊と西隣の中の八疊との間は、重い板戸が立つて居るので、八疊二室、三疊半、小さな台所つきの今度の住居は、間借りながら

一軒持つたやうなものであつた。室料はすべてで五圓、七八月は十圓のところ常住だから九圓に負けてくれた。表の八疊も東側がずつと二段の押入戸棚になつて居るので、臺所の土間に久しく積んであつた諸道具も悉皆入れ込んだ。箪笥は三疊半に、椅子テエブルは表の八疊に据ゑた。常用の文卓は、南向き八疊の床の間近く据ゑた。一方臺所の羽目がさし出で、一方厠につづく建仁寺籬に劃られて、手水鉢の葉蘭、這ひ杉、小さな庭の向ふは畑を仕切りの低い四つ目籬の此方に若木の櫻は若葉漸く青葉になり、東隣を隔ての珊瑚樹の籬の彼方、欅の茂つた中からは隣家の木綿機が響いて來る。悉皆穗になつた小麥畑の向ふ、櫻山の山腹もふさふさした青萱の色になつた。熊次の文卓からは、最早街道の浮世繪を常住見る事は出來なかつた。それを見るには、表の八疊のテエブルに行かねばならぬ。珍らしげの物音がすれば、いつでも起つて見に往つた。卓に凭つて居て自然に見るは、小庭と畑と櫻山と空との一部である。空には雲が浮く。山には風が過ぎる。庭には蠶(はるみ)の赤い小蟹が來たり、鷄の家族が來たり、子供が來たり、犬猫が來たりする。蛇が來れば、眼の敵にして殺して了ふ。ある時、小麥畑につづく水田に蛇を見つけて、長竿でたたき殺した。蛇と思ふたら蝮蛇であつた。太兵衛さんが横眼に恐々死骸

を見て、「此奴にくらひつかれでもしやうもんなら！」

熊次駒子のあらめ屋住居もいよいよ落ちついた。東京諸拂ひの滯りも追々皆濟する。都築さんを經て、赤坂一ツ木の染物店から此方では確に拂つた筈のお拂請求が來て、一兩度押問答の末、引越し騷ぎにまぎれ込んだ染物店の受取證がちやんと出て來て、其方の埒もあいた。生計(くらし)もいくらか樂(らく)になる。いささか心苦しい事とし云へば、碌に新聞に書かずに月月給十一圓をもらつて居る事であつた。

熊次夫婦があらめ屋に來て一ト月ばかりすると、大杉のお婆さんは一人娘のおしうさんと東京から來たが、川向ふ養神亭の上手に小さな家を借りたさうで、直ぐ荷物をまとめて其方へ越して往つた。佐賀言葉の人の好いお婆さんである。駒子が遊びに行くと、おしうさんは色々寫眞など出して見せた。洋服の若い男が讀書して居る寫眞は、今洋行中の岩田さんから送つて來たもので、岩田さんは大杉さんの養子、おしうさんの良人になる筈の人であつた。岩田さんの人となりは、女學雜誌の紹介で熊次も知つた。王子から築地まで幾年も毎日徒歩往復して、女學校の世話を燒いた人である。白痴教育を志して、此頃は其研究に渡米して居るのであつた。「西

洋人の様でしやう」とおしうさんは熟と寫眞の岩田さんを見ながら駒子に曰ふた。おしうさんは瀛車の中で莫のむ男にやめて下さいと言ひ得る人であつた。「おまへはよくそんな事が出來るね」と岩田さんは言ふて居たさう。大杉母子は岩田さんを賴み切つて居た。然し岩田さんの洋行前からまだうら若い華族の未亡人がずんずん踏み込んで、岩田さんを世話するやうになつた。老人會仲間で懇意な熊次の母は、齒痒がつてしきりと大杉のお婆さんに警告した。しつかりなさい、油斷をすれば、大切な婿をとられて了ふ。然しお婆さんもおしうさんも岩田さんを信じ切つて居た。大杉の身代を注ぎ込んだ岩田、賴もしい男の岩田、岩田に限つてそんな事はない。其内岩田さんが米國から歸つて來た。自身白痴の子女をもつ子爵夫人は、岩田さんを捉へて放さなかつた。岩田さんの心は何よりも事業にあつた。大杉家の世話になつた恩は忘れぬが、おしうさんを妻には出來ぬ、妹にする、といふ岩田さんの宣告を大杉母子は受けねばならなかつた。あれ程注ぎ込んだ男を見す見す他に取られるなんて意氣地がないにも程がある、取る者も取る者、取られる者も取られる者、と熊次の母は舌皷うつた。川向ふの小さな別莊に、夕方などぼんやり柱にもたれて居るおしうさんの姿が氣の毒に眺められた。これは後の話である。

二

櫻山の松に春蟬が鳴いて、五月五日が來た。熊次駒子の結婚滿三年、四囘目の記念日である。季節につれてか、母の眼病がわるくなつた。

「かうばかりある眼だつた。」

と父が熊次に拇指と人さし指で大きな圓を象どつて見せた程、結婚當時の母は大きな眼をして居た。母の季の妹春竹叔母は少女時代から眼美人と云はれて黑目勝ちの大きな眼をして居たから、母の眼も思はれる。其大きな眼が結婚三年目位からわるくなつた。心身の無理が祟つたのである。兄が腹に入つて居た頃は、すでにつぶれかけた。次の兄が七夜の中に亡くなつた後で、母は總領のお時姉をつれて長崎へ眼の養生に往つたものである。熊次がもの心ついてから、母の眼が快くあいて居たのを見た事がない。押つかぶさる瞼の下から蚊頭(かがしら)のやうな瞳の眼を、斜に見上げるやうにして人を見た。餉臺の五目飯の木鉢につけた散蓮華を母が見つけかねて頭

をかしげ右視左視するのを不圖見て熊次が胸を痛くしたのは、熊本時代の事であつた。母の姉妹の中でも、津森の勝子が眼が悪く、赤子を抱いて夫の家を逃げ出し髪と共に夫婦の縁を切つた頃は、叔母は半盲目で他に手を引かれて歩いたものである。眼美人の春竹叔母も、晩年には母同様瞼の垂下症で、半盲目で死んだ。無理をした眼の三幅對である。東京に上つてからも、母の眼は始終悪かつた。悪いが常で、大抵は其ままに凌いだが、時にはやはり醫者にかかつた。桂園派の歌人で醫科大學出の堀井さんに見てもらつた時代もあつて、下谷御徒士町の薄暗い其玄關に熊次は藥とりに出かけたものである。

母は駒子附添で上京し、九段の名高い水上さんの診察を受けた。駒子は踏所もないまで履物の一ぱいにならんだ玄關の繁昌に驚いたが、患者の臉を一寸かへして一目見たばかりで診斷する水上さんの無造作ぶりにも驚いた。あれでよいのか、と彼女は危ぶむだ。兎に角當分逗留して通ふ必要があつた。此處でよい、と母は近くの下宿に腰を下ろした。其處には田舍出の同病相憐むお婆さん達も居るし、此方の心配はいらぬ、と母が云ふので、駒子は心殘して兎に角歸る事にした。下宿の淋しい饌を賑はすべく、梅びしほ、紫蘇の粉、櫻味噌など母の好物を駒子が

買ひととのへて置いたを、母は一方ならず喜んだ。

駒子が歸ると、二日目に母は比志嶋家に移つたたよりがあつた。全く眼病患者の老人を下宿に一人置きつぱなしも、親類に頼みつぱなしも感心せぬ。父が肝燒く。熊次さんは私が引受けるから附添に往つて下さい、と義姉が駒子に曰ふ。兎に角容子見に熊次が東京に往く事にした。

神田裏猿樂町の比志嶋家に着いた時は、日が斜になつた。駿河臺の崖下、濶々した家屋敷は、明治の初年土木少丞で羽振りのよかつた時代に津森伯父が求めて住んだ邸で、親分肌の伯父が大勢書生を置いて男ぐらしの其中に、子女三人もつてわれから夫の縁を切り、新しい運命を開拓すべく上京した津森勝子叔母が三十九歳の紅一點で居たのは、明治五年の昔であつた。伯父が地方へ轉任の後、邸は比志嶋一家の有であつた。弟の津森伯父に輪をかけたやうな姉の比志嶋伯母は、此邸を梁山泊とせずには措かなかつた。伯父の時代から近づきの醫學生の岩原義兄や、十四で上京した熊次の兄をはじめ、書生大勢其處を巣窟にして勝手次第に振舞ひ、當主直義さん夫妻は小さくなつて居た。直義さんが勤め先きの大藏省出入りの大工が來て、邸内に小さな稲荷の祠が建つ。直義さんが袴をはいて朝々殊勝に柏手うつて拜む。生みの母者が若い甲

乙を呼んで、「あの狀を見なはり」と苦笑したものだ。「あんたの此單衣は似合はんばい、誰某にやんなはり」などと姪達の此着物を取り上げては彼にやり、彼帶を取り上げては此にやるのが道樂であつた。姪達はこぼしながらやはり此家の伯母さんを好いた。伯母に母は氣に入りの妹であつた。伊倉の伯母が十六で肥後の南の海邊から北の伊倉家へ嫁入りした時、十二の母は稽古見習に熊本に出て、やんちや伯母の世話になつた。ある朝伯母は早起して厨に出で、程經て來て見ると、夫は寢たまま頓死して居た。同じ蚊帳に寢て居た母は、少しも義兄の死を知らなかつた。伯母があらためて比志嶋に緣づいたは、其後の事である。津森の總領の双生兒の中で、長女に立てられた本山伯母の小柄で色白の柔和に引かへ、同じ小柄の比志嶋伯母は色黑で烈しい氣象の似ても似つかぬ一對だつた。「お香さんが、お香さんが」と黑い妹は白い姉を鼻であしらつた。赤ン坊の妹お勝を負ぶりながら木山川に飛び込んだ十五の昔から一徹の烈しい氣象で、伯母は他が迷惑がる世話を燒いた。「文金」の勸告まで聽かされた母は、然し此變つた姉を愛せずに居れなかつた。母が上京した時、伯母はもう谷中の墓になつて五年であつた。「手をとりて語り合はなんはらからは訪ふに甲斐なき此苔の下」とは母が墓前の述懷であつた。生前隨

分ひどい目にあはされた比志嶋さんも、母が亡くなつては母を懷ふ心を叔母に寄せ、肥後家に近しくした。比志嶋さんが千葉縣知事時代、父母は招待されて千葉にしばらく逗留したものである。兄とも比志嶋さんは親しかつた。熊次は顏を識り合つただけであつた。唯駒子との緣談進行中、氷川町の隱宅に比志嶋さんが來合はせて、熊次がぼんやりの話から、「比志嶋さんは畳行燈てち私も云はれました。」と比志嶋さんの一言が耳に殘つて居た。東京に出て十年近くなるが、裏猿樂町の此家に熊次は今日初めて來た。

庭に向いた閑靜な座敷に、くつろいで母は寢て居た。主人の比志嶋さんも出て、熊次ははじめてしみじみ挨拶をかはした。比志嶋さんは千葉縣知事を罷められてからしばらく閑地に居たが、此頃は近くに創立さるる勸業銀行の副總裁に内定し、機嫌をよくして居た。直ぐの弟を呼んで毎日十六盤の復習をする、と後で母が笑つて居た。比志嶋の阿父は熊本藩の勘定方根取で、比志嶋さん自身も大藏省の勤務が官途のはじめであつた。律義で一徹な氣象を買はれて、如何はしい地方財政機關に死の宣告を申渡す樣な場合は、人のいやがる役目を引受けさせられたものだ。そんな事から長官海東伯に知られ、伯に兄を紹介したも比志嶋さんであつた。久しい地

方官を歴て來ての勸銀副總裁は、元の畑に歸つて來たものである。十六盤の師匠の外に、比志嶋さんにはまだ弟があつた。一人は眼が薄く、琴を習はせられ、外を歩くによく風呂敷をふり廻はしながら歩く人であつた。末弟は里昂領事時代佛蘭西に同行して、佛語は相應達者であつたが、久しく尾羽うち枯らして、時には人目に立つ不仕だらに、姪のおみきさんの顏を赤くさせたものであつた。

おみきさんを的に文武の師の爭は文の勝に歸して、おみきさんはとくに榊夫人であつた。嫁ぐと直ぐ家の女中を悉皆出して新しくした評判を熊次夫婦も聞いて居た。其大分前の事である、熊次は何時の程からかK雜誌に榊さんの新體詩が續々出るのを見た。情緒纏綿として、いづれ得た戀の歌ならぬはなかつた。おみきさんの薙刀の師は、また筆も執る人であつた。榊さんが戀の歌書く同じ雜誌の附錄に、彼は銀杏の姫に吃り男が失戀する短篇小說を書いた。間もなくおみきさんが變名して婦人科病院に入院して居る噂が聞こえた。母が見舞に行くと、毛布をすつぽり被つておみきさんはものを言はなかつた。すべてが到頭比志嶋さんの耳に入つた。鼻先きで一粒種を横取られた比志嶋さんの怒は烈しく、結婚などは問題の外であつた。事態は重大

になつた。おみきさんの入智慧で、榊さんは兄に縋つた。兄の肝煎で比志嶋さんは不承不承に結婚を許した。初生男子に比志嶋家を嗣がす約束であつた。「直義さんが苦り切つた顏てちやなかつた」と婚禮の席に列なつた母が噂話にも笑止がつた。歌學の師を緣者にもつ事は重寶であつた。榊さんに母は其後始終歌を見てもらふた。兄が見てもらふた「青柳の糸の亂れを解くよしもかな」といふ歌を、松平樂翁公を思はする、と榊さんはほめた。

濶い屋敷に、比志嶋さん素夫婦の生活は靜かさ過ぎて淋しいものであつた。病院や宿屋より此處からお通ひがよからう、といふ比志嶋さんの言葉は實情であつた。母も氣樂にして居る。よろしく賴むで歸るにきめた。夕食の饌が出て、母も起き出で、主人諸共主婦のお給仕で夕食を濟ますと、熊次は暇を告げた。

電燈明るい神保町の通りをずつと歩いて、熊次は九段坂を上つた。水上さんの見込みを聞いて歸らうと謂ふのであつた。印刷した名刺を熊次は未だ持たなかつた。手帖の一部を切つて毛筆で書いた名刺を水上さんの玄關に出すと、玄關番の書生が立ちながら受取つて見て頻に首傾げ、着流し姿の熊次をじろじろ見て、中々取り次がうとはしなかつた。夜分で、先生はつくろいで

居られる。然し熊次が下手から押強く頼むと、漸々奥へ往つたが、やがて出て來て、

「先生が會つて上げやうッて。」

とさも勿體なささうに熊次の頭から浴びせた。

客間に座わつて、電燈の光に入り來る人を見れば、眼のぎよろりとした、八字髯も貧相な、食後の口をもぐもぐさせて着流しの無造作な、それが水上博士であつた。玄關番は尊大で、本尊は碎けて居る。じやらじやらした聲の、そそつかしい口ぶりで、老眼の事だし、全快は兎に角、一時の手當に長い時日は要すまい、といふ話をした。

好い話に安堵した熊次は、玄關番にも懇に禮言ふて、其夜は神田錦輝館前の宿に泊り、翌朝逗子に歸つた。

水上さんの言葉は流石に違はなかつた。醫藥も利けば、裏猿樂町の療養生も利いた。月の終り方には母はもう櫻山隱宅の人であつた。

三

櫻山山腹の青萱の中から、點々白い星の如く山百合の花が浮いて咲き出した。あまり珍らしいので駒子が寫生した程大きな雹が降つて臺無しにしたと思ふた大麥の畑何時か焦れて、家主の太兵衛さんは春の出かはりに華族さんから下つて來た十五娘のお松を相手にさくさくと苅りはじめた。あらめ屋も、鴨志田室には、大杉さんの手引で佐賀の舊藩中と云ふ六十餘の夫婦が來、最初熊次夫婦が居た中の八疊と南の臺所には肋膜上りといふ東京の娘が來た。舊臘太兵衛さんの世話で裏の山手に地所を買つた深水の義兄は、其後一二度見に來たかと思ふと、もう別莊があらかた出來て居た。深水の姉は小さいが、義兄も劣らぬ小男である。姉が深水に嫁いだ年、伊豫の今治で熊次は初めて義兄の寫眞を見た。笑つたやうな細い眼をして、頬髯立派な堂々たる半身像であつた。沼山先生の嫂に當るお婆さんが熊次に曰ふた。「立派な殿御ぶりな、丈が矮いてちいふばつてん。」全く深水さんは小さかつた。別莊工事を見に來ると、土方や職人

共が無遠慮に嘲み笑つた。然し此山椒はひりひりする程辛かつた。深水さんが一目見ると、仕事のアラが分つた。「あらア旦那ぢやねえや、番頭だア」と、きめつけられる腹癒せに皆が蔭口きいた。請負普請の天井に節板を使ふたは約束に違ふ、といふてことごとく張り直させたので、髪を奇麗に撫でつけた瀞痘痕ののつぺりした棟梁が一縮みになつたものだ。近くに別荘工事は捗取るし、室借りの客はうろついて、夏季近い逗子の海邊は日に日に賑やかになる。海に、野に、山に、熊次は日毎寫生のぶらつきをつづけた。

「叔父さんに、お祖父さんが一寸いらつしやいつて。」

障子を開けた表口から、或日甥の貞雄が聲をかけた。貞雄はもう數への八歳。一人遊びに潮干の川をぶらりぶらり歩いて、石垣についた牡蠣をとつては、土管の口からしやらしやら落ちる下水で一寸ゆすいで澄ましてロに入れたりする童であつた。

何故か、熊次は一向行きたくなかつた。貞雄を歸へして、長いこと彼は愚圖ついて居た。然し到頭隣宅に往つた。

英國狀が屆いて居た。父は顏を曇らして居る。

「病氣で、あぶなかつたもン。」

と父が言ふた。

「死んで歸つとだらうたい。」

と母が切なさうな聲で言ふた。

熊次は手紙を見た。手紙はいつもの兄の自筆ではなかつた。淺井君の筆であつた。淺井君が兄の口授のままに筆記したのであつた。書面によると、大陸を廻つて倫敦に歸つたが、歸ると感冒からブライト病といふ腎臓炎を起し、一時は危かつた、然しもう大丈夫、といふのであつた。淺井君の筆は兄が言ふまま心のままを書いて、生きる死ぬるの病氣で心細くなつた遊子の家を懐ふ衷情が切切と響いて居た。

熊次は手紙を見終つた。さまを見ろ、といふ氣に彼はなつた。手紙を差措くと、一言も言はず、突と身を起してあらめ屋に歸つて了ふた。

熊次の衷には、兄に對する不快が久しく鬱積して居る。永い間眼をつぶつて他に自由にされた。縮める限り縮んだ。就中兄には全くの木偶扱ひをされた。わが領分を勝手に蹂躙された。

されるが悪い。然し恨はやはりする者に歸する。久しい鬱憤がややに漏るる機會が來た。兄の外遊留守は謀叛の好機會であつた。出社をやめる。逗子に移る。自意を遂ぐるの手始であつた。永い間ほつたらかした自尊と利益を、彼は怒を含んで着々回收し始めた。回收は手近い所、弱い相手から始まつた。義姉の安子は平民的無差別な人である。ある時熊次が隱宅から歸るとしてすでに庭に下りた處に、義姉は熊次を呼んで、團子の一皿を振舞ふべくそれを縁側に置いた。土足の植木屋でも犒らふやうな仕方を熊次は瞋つた。忿々して歸つた彼は、あらためて父母に抗議を申出た。心易立てはさる事ながら、孟子にもある、「蹴爾而與之、乞人不屑」近親の間にももつと禮義がありたい。甥等が苟にも以前の如く「熊次さん」など名いふを熊次は容赦しなかつた。間接抗議は利いたらしく、義姉は其後も子等に曰ふた、叔父さんな、默つてござるばつてん、耐えちどざるとばい。」

兄の病氣の手紙が着いた頃は、然し彼の病すでに癒えて、もう米國に渡つて居た。歸りが近づいて、逗子でもいろいろ待ち受けの仕度がせられた。櫻山別莊の兄の書齋に据ゑつくるテエブル椅子など買ひに、熊次は東京にやられた。義姉がスリッパアを賴むと、熊次が澁い顏をしたの

で、義姉はたぢたぢとなつた。東京に行くにも同じ道ばかりは面白くない。いつもと違つた道を求めて、熊次は横須賀から滊船で東京に往つた。着くと、さつさと買物を濟して、直ぐ靈岸嶋から船便に托した。スリッパアも彼は忘れなかつた。其代償ででもあるかのやうに、彼は殘りの半日を歌舞伎座に團十菊五の忠臣藏を見る事を忘れなかつた。

第五章　新歸朝者

一

一年ぶりに、兄がいよいよ歸る。今日米國から船が着くといふ六月末のある朝、父と駒子を除く外、肥後の一家は總出で横濱に迎へに往つた。船が一日おくれたので、濱船宿の二階は出迎の人人で芋の子洗ふ雜沓であつた。

人嫌ひな熊次に、人中で過す二日は苦艱であつた。去年の夏以來遠ざかつて居る新聞社中に顔を合はすも面伏であつた。莞爾々々した久野さんが「やうやう待ちつけました。」と挨拶をした。紅葉門下四天王の一人のF君が何かの事からM社に矢を向け、「先生何ぞ速に歸り玉はざる、先生の留守に頭の黑い鼠輩が云云」と書いたに腹を立て、「此方の社中には、社長なしとてやつて行けぬやうなへろへろ武者は一人も居申さず、社長の留守なればこそ我慢もして居る。」と答の

矢を放つた友山君も、猪頸の大きい頭を上げて、太い聲を響かせて居る。深水の義兄、熊次には同志社以來の沈田先生、「人三化七」と自稱する窪い眼、亂杭齒の林田梧軒さんなども追々やつて來る。單衣に袴をはいて、面痔せした鴨志田君にも去年の正月以來の面會であつた。鴨志田君は春に出した「抒情詩」に對する世間の冷評に對し、此頃は雜誌に反駁の氣を吐いて居た。同じく抒情詩仲間の虞初子君は、熊次が左手の繃帶を訝つて、それがいたづらに小麥刈を手傳ふての鎌疵と聞くと、根が農家出の虞初子君は、そんな事だらうと思ふた、と藪睨の眼で熊次の顏を睨めて呵呵と笑つた。熊次が出た後に入社した二三の新顏も居た。虞初子の友人で、都築の細君の緣者といふ富士山下は大宮の丸田君は齒が缺け、俳句の長野君は柔道二段と云ひさうながつしりした體の五分刈頭で、「藤田東湖」を出した水戸出の桐谷君は聲の低い世馴れた人であつた。

「皆さん、手前は淺井敬吾が兄で——」

と名のつて、淺井君に肖てずつと老けた紋付羽織の人が一同に挨拶する。はるばる九州から出迎に來た人人もあつた。長い黑髯、色黑の淵澤さんに熊次は挨拶したが、例の如く二の句がつ

げなかつた。社の肝煎の栃原君が來て、

「熊次さんな、淵澤さんに紹介されなはつたらうか？」

と熊次を目した。郷國葦北の淵澤さんから兄が何千圓か借りて新聞を出したので、而して其金は未だ返濟しきれぬので、淵澤さんは社に大切の人である事を熊次も萬更知らぬではなかつた。淵澤さん其人も初めて見る人ではなかつた。熊次が十七の春、父と兄と岩城叔父の二番目二郎君と、熊本を南へ二里、綠川の川尻から小蒸氣で、祖父の住む葦北に往つた。兄は佐敷から上陸して、人吉へ行く豫定であつた。皆下等に納まつた中に、唯一人上等室に納まつて、立派な鞄など持込ませ、田浦に上陸する時、「どなたも」と挨拶して往つた其人を「あれが淵澤」と乘合ひの人々が言ふて居た。淵澤さんは十五六の息子を一人連れて居た。船中をわがもの貌にかけ廻はるを、船暈で蒼くなつて居る兄が白い眼をくれて憎さげに肱で小突いたものである。其淵澤さんに違ひなかつた。熊次は淵澤さんに好意も惡意もなかつた。然し顏合はせて、一言の挨拶を濟ますと、もう其上に話の接ぎ穗がなかつた。淵澤さんも手持無沙汰になつた。熊次は昔大津の海水浴で、若い女中が熊次の室を顯でしやくつて、「あの座敷は氣がつまるの

ね」と朋輩に言ふのを聞いた。女ばかりか、男にもさうであつた。碎けてかかる先輩が、中途から言葉を丁寧にあらためる經驗を、熊次は昔から持つて居た。誰にも硬くなる熊次は、誰も硬くした。

中々船は着かなかつた。新山君がしばしば瀛船會社に出かけては船の消息を齎らした。觀音崎から未だ影も見えぬといふ事である。一日の緊張に疲れ切つて、熊次が小さな室に肱枕をしてうとうとして居ると、障子の開く音がして、「あ、疲れて」と深水の義兄が何かの話をしに來た人と立去つた。

待ちかねた人人の一群は、街をぶらついた。梧軒さん桐谷君等の一團と、熊次は櫟天通りの丸善に寄つて英文小說を冷やかしたり、伊勢佐木町の初夜に店を張つた女達の氣の毒な姿を見たりした。「勸工場のやう」と熊次が言を、「十軒店の雛市さ」と桐谷君が朱を入れた。

夜食過ぎても船は着かなかつた。明日にならう、といふ事である。歸る者もある。然し大部分は居殘つた。熊次は義姉に曰ふて、一同に菓子を出した。而して其披露を吟夢君に賴むで居た。吟夢君とは已に仲直りをして居た。吟夢君が逗子に來て、あらめ屋に一夜熊次の客であつた事

もある。見せられた水彩の中から一枚見つけて、「ありましたよ、ありましたよ」と叫んだ。正月附録の「漁師の娘」の家に違ひない、と謂ふのであつた。吟夢君の小説は、大抵其ままの事實譚であつた。「漁師の娘」も熊次が霞が浦から拾つて來た實事と吟夢君に思はれて居た。忙しい家庭雜誌の主幹は、此樣な場合にも遊んで居なかつた。編輯用の手紙を小使に出させたりして居た。「田尻さん、此手紙には名宛がありませんが」と小使に手紙を突きつけられて、吟夢さんは眼鏡のうしろに眠たさうな眼をしばしばさせて居た。

いよいよ夜明かしときまつて、瀛船宿の二階は無禮講の各自自由行動に入つた。梧軒さんは確に一度は大西洋太平洋を渡つたらしい古びた黒革の中型鞄から小説らしい唐本を出すと、あたり構はず胡座かいて悠々と讀みはじめる。佐伯幽溪の門下として、梧軒さんは報知に久しい關係であつたが、此頃はM朝報の客分であつた。辛竦名とりの其社の社長と花牌をひいて、梧軒さんは相手から卷き上げる、といふ噂が傳へられた。全く梧軒さんの眼は、親分株の掏摸か探偵かに見る凄味があつた。佐伯さんについて洋行歸りの梧軒さんは、ジュール・エルヌの科學小説、キルキイ、コリンスの准探偵小説から近年はユウゴの飜譯などして、一時飜譯王と云は

れて居たが、熊次の眼にすら誤譯はついた。海外文壇の事情などにも疎かつた。新聞創刊の初年、飜譯係の熊次は相棒の一人と根岸に梧軒さんを訪ねて、ヂョルヂ、エリオツト女史が未だ生きて居るやうな話を聞かされたものだ。梧軒さんの造詣は漢文にあつた。父が七十祝の詩集の清佛戰爭當時、報知の通信員として支那に派遣された梧軒さんの通信を、未だ鄕國に居た兄なども時を同ふせざるを憾むときで嘆美した。梧軒さんが洋行から歸る。兄が上京する。K雜誌の寄書家、新聞の社友として、梧軒さんは折々丈の高い紋付姿を編輯局に見せた。Z.R.Hの三羽烏を使つて、報知新聞主幹の時代もあつたが、最近には友山君を相手で賴山陽論に花を咲かせたものである。十二文豪の賴山陽は、兄の擔任であつたが、梧軒さんが引受ける事になり、序論はぽつぽつM誌に出て居た。兄の外遊については、特に梧軒さんにK新聞、雜誌と其主宰者について書いてもらつて、それを淺井君が英譯し、それを小冊子にして、歐米到る處自己紹介の用に宛てたものである。

垂水君が誰かと睨つこをして居る、と思へば、八字髯の男を前に置いて、半紙に筆で先方の寫

を見ては描き見ては描きして居るのであつた。數人分を寫生して、「髮髻品評會」と垂水君が題した。栃原君がごろり横になり、座蒲團を抱寢の姿が面白いと、米蕾伯の二番目、錦僊君が急いで寫生する。寢る寢ずの間に、初夏の夜は白らむだ。

二

濕船宿の二階の奥座敷に寢て居る母のぢつとつぶつた眼に、歡迎の社中に中心がなく、心區區である事がよく映つた。待たるるは一人でも、待つ者の氣が揃はなかつた事は、いよいよ船が着くといふ場合に現はれた。夜が明ける。船は如何か？　未だ中中着かぬと云ふ。着いたが、檢疫で手間がとれる、上陸は正午にならうと云ふ。と思へば、もう上陸、と云ふ報が突然に來た。血相變へて棧橋へ急ぐ宇土君に、吟夢君、會計の田部君などの一群が伴ふた。熊次も其中にあつた。棧橋へ行くと、船はとくに着いて居る。兄は？

「熊次さん」

と待合室の中から山下君が聲をかけた。兄はもう上陸して、別の宿に上つて居る、といふのであつた。宇土君の顏色が變つた。

熊次は直ぐ其宿に急いだ。宿の二階で、新歸朝者の二人は逸早く鰻丼をばくつついて居た。熊次

が階段から顔を出すと、淺井君と揃ひの米國仕立の藍鼠のセルの背廣で垢ぬけした兄が片膝立てて、「今直ぐ其方へ行くから」と聲をかけた。

程なく皆が待つて居る瀧船宿の二階は總立になつて、萬歳、わアと歡迎の関をあげた。家族は碌々挨拶も出來なかつた。誰やら小坊の熊彦を眞先に抱き上げて父を歡迎さしたと謂ふて、大坊の貞雄が烈しくわめき出す。宇土君の同郷で鐵道の助役を勤むる若者、よく新聞社に制服で來てはじやらじやら聲で笑つたり笑はれたりする元山君、婚禮の席で花婿が醉拂つて醉醒の「水を持つて來い」と叫んだレコォドをもつ男が、暴れ狂ふ貞雄を連れ出し、街で金魚を買つてやつて、やつと機嫌を直さした。そんな事も遠目に見て、入りかはり立ちかはる歡迎の人人に兄は笑顔の應酬をつづける。淺井の兄者を紹介しては、「何ですぜ、あの邊では先生と云へば淺井さんの事と言ひますぜ」と晴れがましい弟の兄に兄は花を持たす事を忘れなかつた。淺井君の兄者は、年久しい小學教師であつた。

* * *

横濱の人ごみからやつとぬけて、兄を中心の内輪一行は横須賀行の瀧車に乘つた。「祈るぞよ千

重の汐路の末かけて國と民とを思ふこころを」と詠んで昨春の暮に其子を送つた母は、無事の歸りを迎へ得て、感謝の默禱に眼もつぶりがちで居る。義姉は硬くなつて、大きな雹が降つた話をする。兄は物珍らしげに子供の顔から窓の外の景色と見廻はして居た。

逗子驛には、あらめ屋の太兵衛さん、大工の棟梁、植木屋の親方、養神亭の主、富士見橋の鈇の饅頭屋のおかみなども出迎へ、一行賑やかに兄には初めての櫻山別莊の門を入つた。

「唯今戻りました。」

洋服の膝をついて頭を下ぐる子を迎ふる父の眼はうるむで居た。駒子が出て挨拶する。中二階の書齋に一旦退いて、義姉の介添で一浴、仕立下ろしの白縞の單衣に白縮の兵兒帶にくつろいだ兄がスリツパアを脱いで座敷に寛座をすると、父はぼくぼく、例の伏目で鼻を時々手巾で摩りながら、矢繼早に問ふ、話す。船中でかぶれたらしい「ぜ」を連發して、兄が醜ゆる。

「熊も畵が上つた。」

と、だしぬけに父が指す稲間には、「水國の秋」のまづい熊次の水彩が挂かつて居た。

賀客が追々やつて來る。深水の別莊から太郎君が來て、

「は、お歸んなさいまし。」

と云ふたきり、二の句はなくて、手持無沙汰で居る。老龍庵の座敷も、勝手元も、誰れさざめくともなく、わアわアといふ賑合である。

夕方になると、父が母を呼びかけた。

「喃、こなたは如何かん？　俺ア今一度禮を言はんと氣が濟まんが。」

而して父は母と着物を換えて、養神亭に休息して居る淺井君に、倫敦で兄の病中の心盡しを禮に往つた。父は先刻も淺井君の顏を見るなり、早速丁寧に禮を述べて居た。快方になるまで病氣のたよりを見合はせた禮を熊次が言ふと、淺井君は妙な顏をして居た。

兄は始終上上の機嫌で居た。仕立下ろしの浴衣を着ると、針が一本刺さつて居た。「お安さん」と其針をとつてさし出され、義姉は一縮になつたが、兄は直ぐ機嫌を直した。浴衣がけで近所を歩いて、饅頭屋の前を通ると、入つて先刻出迎の禮を述べ、襷はづして手をつかふるおかみに恐れ入らした。熊次にも始終笑顏を見せた。熊次は、食物が變る注意を唯一言云ふた外、今日一日何の話も兄にしなかつた。夕方、父母は淺井君に禮に行き、熊次は兄と庭の大松小松の

土堤を歩いて居た。兄が突如懼びない顏を熊次に向けて、

「書は買ふち來たばい。」

と曰ふた。

ツールゲネフの英譯買入れを、熊次は兄への手紙に賴んで居た。

三

兄は翌日淺井君と東京へ往つた。新橋は夥しい歡迎、樂隊の吹奏、旗の先導で、狐に誑されたやうな、といふ兄のたよりが來た。新聞は其光景の一斑を、米壽伯の筆で傳へた。赤坂榎坂町の以前の深水住宅をかねて借りる事になつて居たので、兄が二度目の出京には、義姉を始め子供一同、女中も連れて賑やかに出て往つた。

昨年兄が外遊に出かけて程なく內閣更迭があつて、日清戰爭前から引きつづいた伊藤內閣が崩れ、黑田內閣の中繼を經て、海東內閣になり、而して外務大臣は九年前同じ外務大臣で隻脚をなくした隈伯であつた。海東伯に識られ、隻脚伯にも好い兄は、二伯の提携について少なからぬ力を致したものである。兄が出かけて百日經つと、松隈提携內閣が實現した。兄の歸りは、さながらわが仕組んだ獻立の饗宴に歸り會はしたやうなものであつた。「聞く、君鵬の如く政界に飛ばんとす、と」と友山君が雜誌の公書に書いた如く、新歸朝者の身邊には鬱勃飛騰の氣が

漲つた。本宅一同の東京へ立ちあとを隱宅の掃除の加勢に來た饅頭屋のおかみは、末廣の幸先を祝ふて長箒を倒に立てた。あらめ屋に居る舊鍋嶋藩の中老人は、唯白禮のみし會ふて居た熊次の室へ、裏庭傳ひに小腰を屈めて兄の歸朝の喜を言ひに來た。

第六章　夏

一

富士が碧になつて、逗子の夏が來た。あらめ屋はとくに一ぱいである。養神亭も引切なしに客が來る。隱宅にも子供等が來て祖父母の膝下を賑はして居る。女子學院が夏休になつて、正月以來其處の厄介になつて居た實子も來て、十一歳の女學生は米國女教師そつくりの發音で、チヤアベルがどうの Shake hand がかうのと引つこすつて來た西洋風を吹かして居る。蘆屋と門札うつた深水の新別莊には、京都から義兄夫婦が六人の子女を連れて來、東京からは太郎君が來て、趣味の父子は松葉牡丹の照る貝殼まじりの濱砂利を敷いた庭に細い割竹で波形の埒をしたり、紅白の蓮花咲く麓の小池に通ふ芝生の路の腰かけ石を、直したりして居る。新宿の民家を借りて、上州から岩原の義兄夫婦が、女子學院生のお君と、信者の男の子を一人連れて

來て、岩原さんは蠅を打つたり、義母に頼まれて隱宅に聖書講義に來たり、夕方はきまつて浴衣姿打連れて隱宅に散歩に來た。養神亭には例年來る新男爵の赤岩さんも來て、富士見橋に群がる夕涼みの中に大きな浴衣姿を見せては、知るべの孃さんをからかつて、「おお、これは黑姫さんだ。」などと高笑ひして居た。赤岩さんも醫者は醫者、以前眼病を母が診てもらつた事もあつた。父が朝顏の鉢を贈ると、赤岩さんは「槿花日々新」といふ五言絶をお禮によこした。大隅の志布志に住む岩城の二番目二郎君がはるばるの贈物、圓錐形の蒲葵の帽子を父がかぶつて、七十六翁の凛とした後につづいて、三十五歳の新歸朝、日の出の兄が兵兒帶姿で下駄踏み鳴らし富士見橋を渡る姿を養神亭の座敷から眺めて、「老萊子のやう」と赤岩さんが曰ふた、と父は悦んで熊次に告げた。

寸暇を偸んで、兄は父母の許に來た。然し兄が來れば、訪客が踵を蹶むで來た。長留守の社務の報告に、星野君が來る。秘書格の久野さんが電報信書を一風呂敷持つて來る。友山君と、其女房見たやうな手越君、以前は家庭雜誌主幹、十二文豪の近松門左衛門の著者がゆつくり話しに來る。杉田近くの若人で、マウパツサンなど早くから讀んで居る、眼鏡をかけた金井君は、

イブセンにお會ひでしたか、米國の社會主義は？　など色色の問を出す。落ちついて西洋話をする暇も聞く暇もなかつた。

特に雜誌に關する編輯會議があるので、熊次も出京した。榎阪の宅では、朝から風呂が立つて、七月の暑さを車で走せ廻はる花形の兄は歸つては樂屋風呂に汗を流し、着更えしてまた出かけた。社に近くの共存同衆の二階に編輯會議が開かれて居ると、訪客が入りかはり立ちかはりやつて來る。でつぷり太つた鳳眼のちよつぴり八字髯を立てた紳士が入つて來て、分からぬ言葉で何か言ふ。瘠せぎすの通辯がぺらぺらとそれを譯する。胴衣のポケツトに扇を挿して、顳顬から汗の珠をたらしながら、兄が名刺を見て「五分間御待ち下さい」と椅子に請じ、先客と五分の立談を濟ましてこれから西洋へ出かけるので紹介狀を賴みに來たのであつた。兄の中座で長びいた會議の末、雜誌は今までの月三回を一回にして紙數を增し、大に面目を一新する、といふ事になつた。なまけた熊次もこれから雜誌に缺かさず書かねばならぬ。家庭雜誌も同樣である。それから新聞には早速これを翻案なり翻譯なりして出すやうにと、兄は二冊の英書を熊次に手渡した。「ミカ

エル、デ芽ツトの手記」は短篇の探偵小說集で、一は「歐洲諸朝廷の秘密」であつた。

洋行みやげが追々披露された。父には一疊程の高價な土耳其絨氈を手荷物で兄は持つて來た。夏ながら早速それは父の四疊半の紫檀の卓を前に敷かれた。瑞西の銀時計も、時を大切にする父には喜ばれたみやげであつた。母には老人會などに出あるきの用に横長い小豆革の手提を革物の名所維納から買つて來た。黑い絹レエスのショオルも母への佛蘭西みやげであつた。兄の在米讀者の人人が贈つたといふ捩子で湯を出すやうになつて居る兩手で抱くやうな大きな銀の湯沸しは、稅關が面倒であつたが、無事に逗子に持つて來られて、座敷の置床に光つた。父の三組銀盃以來の銀の輝やきである。瑞西みやげの一見鐵のやうな硫銀片硝子の時計をもらつて、熊次は生涯に初めて時計持ちになつた。時のしるしが見馴れた羅馬數字でなく、亞剌比亞數字であるのも目新しかつた。露西亞のノヴゴロッドの市で買つたといふ金屬製の額皿には、小麥苅の野らに大德利を兩手にかかえて口飲みの若い百姓、半月形の鎌を手にしてにつこり見て居る若妻の模樣が出て居た。英吉利のセッフィルドみやげは髯も剃れさうな鋭利なナイフ。「エルサレム」と希伯來文字を印した橄欖製の定規は坡西土で買つたので、小さな書型の半透明

な石の上に石膏で出したミケランゼロの横顔は、伊太利みやげであつた。駒子は維納出來の壷物の小さい手提をもらつた。みやげの分配は義姉のさし金であつた。薄いを氣の毒がつて、母が後で自分の手提を駒子に讓つた。カアドを一枚もらつた津森叔母は、「結構なおみやげを」と義姉に禮を言ふた。

兄の歸りについて、社員殘らず慰勞として俸給各一ヶ月分の總花を與へられた。一年遊んで月給唯取りの熊次も、十一圓の賞與に漏れなかつた。のみか、翌月からは月俸二十圓を給する旨を、父母列座の席で兄から申渡された。月給二十圓——兄が折紙の最高二十圓に熊次も到達したのである。一圓は積立として會計の手許に差引かるるので、手取りは十九圓の都合であつた。兄が授けた續き物の種本は、何れも相應に面白かつた。熊次は先づ探偵小說の翻案から新聞にのせはじめた。それは氣樂な仕事だし、少なくも筆ならしに相違なかつたが、一年ぶりに筆をとつて探偵小說の翻案は、われながら面伏せであつた。段々墮ちて行く、といふやうな慘な思を彼はした。彼は日記に書いた。

「吁、君、探偵小說にまで君は成り下りし乎。」

然し遊んだ後だし、二十圓の月給をもらう身の上、否應言へたものでもない。赤罫八行二十二字詰、やす唐紙の原稿用紙八九枚乃至十二三枚を一回分として筆太に書き飛ばすと、彼は日日それを逗子驛のポストに入れに往つた。

二

兄の歸朝をさながらのきつかけに、松隈政府の建て直しがあつて、新顔の役者が揃ふ事になつた。献立は早く出來たが、四月以來兩陛下が珍らしく京都御駐蹕中で、御裁可、然る後發表といふ順序が思ひの外に手間どつた。父が氣を揉みはじめたので、熊次も逗子驛から兄に電話をかけて吉左右を聞かずに居れなかつた。やつと月末に「明日午後二時御用召あり」と云ふ電報が來た。やがて新聞は官制の一部改革と新顔の役割を列擧した。新官制で、勅任參事官といふものが出來、鳴らした在野の働き役者がそれぞれの省に配付された。保安條例の愕堂が學堂に復へつて外務の勅奏に納まれば、「日本風景論」の著者が山林局長になつて俺の手下は何千人とお山の大將の悦に入り、瀧山町の佐賀ボーロの二階で瘠せぎすの裸姿から熊次が顔をしかめて嫌いになつた浪人の田原さんが埼玉の知事に納まれば、新歸朝の肥後寅一は內務省の勅參となつて正五位に叙せられた。西鄉戰爭では熊本籠城の剛膽參謀、日淸戰爭では軍令部長の軀を

眞似事ばかり武裝した運送船に取り乘つて黃海海戰に魂を入れ、「薩長薩長と諸君は敵のやうに云ふが、薩長でなくて誰が今日まで難局に當つた乎？」と啖呵をきつて衆議院を沸騰させた薩摩隼人の華山大將が其內務の長官であつた。ある新聞の漫畫は、頑固さうな中爺が瘠形の洋服の若者に手をとられていやいやながら「立憲」と云ふ字の手習をする畫を描いた。

父はほくほく悦んだ。彼自身四十代の昔熊本の縣官となつて藩制改革、新政創始の局に當つた事を、跳り上がる程喜んだ。「御用召あり」の電報が屆いた週の日曜に、櫻山別莊の兄の中二階で、父は陛下御親署の辭令を恭しく押戴いて居た。父から母、母から熊次と手渡さるるそれには、「睦仁」の御筆墨痕鮮やかに、煌々と御璽が輝やいて居た。

「俺の時は、奏任で、太政官の印ばかりだつた。」

と父が言ふ。而して

「阿父(とと)が生きとんなはつたら」

といふ父の眼には涙が光つて居た。母も眼を拭いた。

「可笑しい事で」

と兄が話し出した。先日丸の内で、登閣途中の首相に會つた。話がありきます。では此處へ、と云ふ事で、兄は首相の馬車に乘る。車夫も悧巧なやつで、門鑑なしに内閣まで空車を引いて來た。

「おお、それは。いや、かういふ事もある。」

と父が話を受取つた。昔（それは明治四年、髪は切つて居たが、まだ刀をさして、熊本藩の役人として父が上京した時であつた。）用があつて松――どんを訪ねた。其頃は松――どんも若盛りで、長官の大久保どんの馬車に同乘して今出勤したばかりといふ處であつた。

ふるい思出は、子の輝やかしい未來を豫報するかのやうに、父の記憶にまざまざと蘇つた。

喜の家には、賀客が踵を接した。人に會ふを面倒がる父が、甲乙なしによろこび迎へて、同じやうな挨拶を、少しも倦まずにくり返へした。舞臺が廻れば、久しい在野の處士は、朝に立つ當局である。宇土君に代つて新聞社の總務をやる事になつた山下君が、別莊の兄の書齋に熊次を見ると、

「いよいよ御用新聞になりましたけン、よろッしう。」

と笑つた。政府といふものは「壓制」にきまつたもので、「御用新聞」は其狗も同然に思はされた昔もあつた。首相直轄の新聞故御腹藏なく御話し下さい、と兄の紹介狀を木版にして自由黨の新聞が出すと、「馬鹿な」と父が頭を掉つた。

兄が光るにつれて、熊次は自然萎んだ。

隱宅に養田のおいささんが逗留に來て居た。おいささんの母者は、肥後家の血つづきであつた。肥後家中興の父の所謂「貞七ぢいさん」（實は父の曾祖父）に子女數人あつたが、次男を愛して分家させ、總庄屋の職も次男が嗣いだ。本家の長男は生涯これを銜んだ。貞七ぢいさんもこれには心を傷め、「親一人子一人中の涙川いつか氷のとけて渡らん」と哀なだ。秋の先祖祭の日、父が熊次と兄を前にして、此歌を言ひ出で、潸然と落涙したものである。それは後の話。兎に角貞ぢいさんに愛された次男の家は榮えて、父の父には大勢子女があつたが、本家の血統は二代で絶えた。二代目にも祖父の異母妹との間に子女十一人まで出來たが、生れては死に、生れては死に、十一人が一人殘らず死に果てた。後では子供が生れても、大方死ぬものにきめて、

祝ひに來る者があれば、産婦が腹を立ててぺつと唾をはいた。唯一人妾腹に女子があつた。それが簑田に嫁いで、おいささんの母であつた。妾腹の女は嫁がせ、本家は遠方の他姓から養子を迎へ、父が離別した先妻を妻はして、本家の名の下に他の血が傳はつたのであつた。熊次の緣談に父が先づ思ひ浮べたのが、庶流ながら本家の血の幾分を傳ふる簑田の娘であつた。父は郷里の懇意な醫者に内内手紙でおいささんの健康をただした。其父者の「瘡毒清解後の出なりや」と問ふた。答は清解後といふのであつた。瘡毒云々について、熊次は母に不審を持ち出した。「天草ででも引つこすつて來らしたつだらうたい」と母が吐き出すやうに曰ふた。其父者が緣談を斷つた。然し郷里の地所の世話なども頼むで居た關係から、上京後のおいささんは肥後家に足を近くした。而して歸省せぬ此夏休を、おいささんは隱宅に來て居るのであつた。兄が歸つて往つた日の夕、熊次は白の筒袖裾短に、ぶらりと隱宅に往つた。緣に居合はせたおいささんが一目筒袖姿の熊次を見ると、にやりと笑つた。おいささんの角張つた顎が下つて、にやりとした目口の冷笑は多くを語つた。兄はずんずん出世する、永久に弟は愚圖つく、と其笑は曰ふた。熊次は萎れてあらめ屋に歸つた。而して不快の果を駒子に當り散らさずに措かな

かつた。

全くあまりに著しい對照である。紛らすも、胡麻訛すも、出來た事ではない。光る兄の前に、弟は消え入る外はない。沈んだ日、冴えない日、面白くもない日を熊次は送つた。それは母の眼にとまらずに居なかつた。

ある夕、深水、岩原の一統も落ち合ふて、隱宅の緣は賑やかであつた。熊次は片隅に默然として居た。斜面になつた芝生に西洋風蝶草の花が咲いて居た。おいらん草などまたの名を呼ぶ其花を、肥後の家では大根花と下司扱ひに云ふて居た。大根の花に似て居るからであつた。麻の葉めいたしやんとした葉をして、丈夫な緣の莖をつつとのべ、下から上へと宵毎に咲いては長い莢をした實になつて行く其花は、紫紅の上唇、白の下唇、蝶の鬚に似た長い花蕊を出して、やさしい花でも、上品な花でもないが、ぱつちりとやはり美しい花である。

母が獨語するやうに言ふた。

「西洋の花は丈夫だなア。あたり搆はず、ずウんずん自分の花を咲かす。」

其一言を耳にはさんで、熊次はあらめ屋に歸つた。

全くだ。然であつた。兄は兄、自分は自分だ。兄の奴隷で自分は無い筈だ。自分には自分の立場がある筈。兄の出世が、自分の邪魔にならうか。自分は自分の好きにやればよいのだ。熊次は兄の命のままに日日探偵小説の稿案を新聞に書いて居る。然しそれはそれ、此方は此方で何か別に心ゆくものを書かねばならぬ。刷新さるる雜誌の爲に、熊次は「風景畫家コロオ」を書いた。

「畫家をして高潔ならしめよ。彼をして六塵の欲に誘はれず、超然として專心一意其向ふ所に向はしめよ。彼が心をして娼嫉不平より自由ならしめ、彼をして世間の好惡に淡からしめ、單へに美と眞とに走らしめよ。人間滑稽の多半は實に彼が有ならん。一架の畫布は彼が帝國なり。一尺の畫毫は彼が王笏なり。彼は竭きざる自然の泉を汲むで、自から服し、人に服せしむ。箇中に無限の快樂あり、慰藉あり、生命あり。コロオの如きは、實に帝王も享くる能はざるの幸福を有するものなりき。」

と熊次は書いた。

材料は「露國文學の泰斗トルストイ伯」の場合と同じく、The Scribner's Magazine に據つた。原文にコロオの「Orpheus 朝を迎ふ」の寫眞版が出て居た。夜の雲西に流れ、東から明けそむる曙に、林端に立つた詩人が左手に希臘琴を擎げ、袒ぬいだ右手を高くのばして心も空に朝を歡び迎ふる畫である。熊次は雜誌の卷頭、一頁大の口繪にすべくそれを添へて、原稿と手紙を社に送つた。

母の激勵を須つ男は、熊次のみではなかつた。兄の出世は、岩原の義兄にも烈しい刺戟であつた。兄の歸朝に、岩原さんは上州から父によろこびの手紙して、大臣にも、と書いた。逗子で顏を會はすと、昔の後輩があたりを拂ふ追風に、岩原さんも中てられずに居なかつた。

「いよいよ發表がありましたな。」

と兄に言ふ岩原さんの聲は沈んで居た。みやげの所望に兄がそらすと、

「みやげ物なぞ別に。」

と岩原さんの顏は暗かつた。やつと好い事を思ひついたやうに、兄が英國でサア、アツクランド訪問の事を話し出した。ラスキンの知人で、英國では知名の士である。信仰を問はれた。

「ラショナリスト てち言ふたもン。」

と兄が熊次を顧みた。「我儕自身にあらずして、義に向つて動く傾向の流れ」といふ非人格神を信ずるマシウ、アルノルドの流れを兄も汲んで居た。

すると、アツクランド躍起となつて有神論を説きはじめ、昂奮して到頭御客の前で卒倒した。

「そりやア面白いな。」

と岩原さんがやうやう喜べる事に會つた。

然し岩原さんの煩悶は中々そんな事で止まなかつた。

ある夕、隱宅の縁に腰かけながら、母に向つて岩原さんは何時となく述懷をはじめて居た。田舍の教師生活はまことに慘なものである。教會は薄給だし、何一つ思ふに任せぬ。今一つ別教會をかけ持ちしやうかとも思ふ。

母が相槌を打ち打ち、慰めて、ああた方が辛抱して、しつかりやつて下さらねば、といふた。

岩原さんの鬱憤が段々募つて、遂々脱線すると、時を得た世間の人人の誰をしかとの當もない攻撃非難を浴びせかけ、

「屹度役人になるつもりで、それで——」

「はあ?」

と母の聲が尖つた。深入りし過ぎた岩原さんは、口を噤むだ。

熊次は後で母が雞肉のソツプを作つて岩原さんに持たせてやつた事を聞いた。岩原さんは泣かぬばかりに喜んださう。あくる日、あらめ屋に遊びに來た岩原さんは、駒子がさし出す湯呑の茶を一口飲んで、

「ウム、こらソツプ!」

と驚いた顏を上げた。

熊次が母の眞似をしたのであつた。

三

あらめ屋の隣室に來て居る肋膜上りのお蝶さんは、町娘らしい容子をして居たが、父は陸軍中佐で日清戰爭に第二軍司令官の副官として出征し、遼東半嶋で病死したさうな。病後の髪を無造作に引詰めに結つて、蒼白い、さらさらした娘であつた。もらひ物の返禮に駒子が枇杷を贈つた。「大好物で」とお蝶さんはよろこびを言ふたが、ある日臺所に居て聞くともなく駒子はお蝶さんが話すのを聞いた。

「わたし、あの、お隣から枇杷をいただいたけど、恐かつたから、捨てたの。」

お蝶さんの伯父さんに、くされ桃を喰つてコレラで死んだ人があつた事を後で聞いた。

「お隣の小父さん小母さんは、他人のやうな口をきいていらつしやることよ。」

といふ聲もした。妻を呼ぶに「お」の字と「さん」をつけ、而して硬くるしい何かがお蝶さんには變にうけとれたのであつた。最初お蝶さんを連れて來た母者は、直ぐ歸り、直ぐの妹が少

し來て居た。

「姉さん、此處の瀧車は何處まで通つて居るの？」

「武豊だの、それからまだいろんな——」

問答が熊次を危く噴き出させた。姉妹で何か言ひ爭ひ、お蝶さんが口早に妹をやり込める聲も聞こえた。鴨志田室の佐賀の老夫婦が笑つて聲をかけると、

「あの、妹と喧嘩してるんでございますよ。」

とお蝶さんはあつさりしたものであつた。

妹が歸ると、六歳位の男の子が來た。肩幅の濶い、眉の濃い、聲の太い、生ひ先を思はす子は、お蝶さんの末弟、名は寛といふさうなが、お蝶さんは「僕さん」と呼んで居た。僕、僕が、僕に、僕、僕と寛坊自らいふので、皆が「僕さん」といふことになつたのであつた。僕さんは姉さんに「お蝶さん」といふた。おやつが欲しくなると、僕さんは足拍子面白く踏んで、

「お蝶さんウ——お蝶さん

何か頂戴——頂戴ねぇ——」

と踊つた。

「お姉様と云はなきや何も上げないことよ。」

と姉は威嚴を示した。此方の室で、熊次夫妻は微笑の顏を見合はせた。

子供の無い熊次夫婦にも、夏は子供客が絶えなかつた。隱宅から姪の實子や貞雄熊彦が來る。實子の一つ年下の深水の奈那子は、姉の總領で、淺黑い神經質の顏をしかめて「うるさい」と幼少時代に言ふたを母方の祖父に覺えられて、今も「うるさいが來た」と祖父は笑ふ。別莊工事の職人に眼口のやかましかつた奈那子の父は、子供の事にも細かに口小言をきいた。奈那子があらめ屋に來ると、

「阿父さんが叱つてばかり居やはる。わたしは內に居なくともええもんやさかい、わたしをもろて頂戴。よウ、本當に。直ぐ呉れはるさかい。」

と叔母の駒子が膝をゆすぶつて口說き立てたものだ。其弟の谷雄は、剽輕な二皮目の、太閤樣の幼な顏をして、御所の周圍の小さな溝の流れにモロコが居る話や、近頃上方にはやるチヤンコ節、ドンドン節を叔父に聞かせた。

「『まるい卵も切りよで四角、ドンドン』といふのと、『まるい卵も切りよがわるい、四角ドンドン』といふのと、二つある。」

と話は中々精密であつた。其妹のおとめは、赤ン坊で一度上京して、熊次駒子が新婚の住居、氷川隱宅の二階の六疊で小さな鼻に汗をかきながら書寢をした事もあつた。今は五歲、減多にものを言はぬかはり、昔ながら鼻に汗かく特徵をもつて居た。

新盆過ぎると、お蝶さんの母者は子供殘らず、それに川端といふ親類の少年二人まで引具して來たので、あらめ屋は沸きかへる賑合になつた。幸野の母者お靜さんは、昔熊次に洗禮を授けた美以美(メソヂスト)の牧師の細君に何處やら肖て居た。四十近い色白の、體格もしつかりした、鼠の眼のやうに可愛い眼をした、四國生れの婦人であつた。總領のお蝶さん十八、澄代さん十六、克己さん十四、和子(かずこ)さん十一、百合さん九つ、季の僕さんが六つ。克己さんは眼が薄く、年長大柄の川端の三郎さんが薄面倒がつて嵩(かさ)にかかると、聞きつけた克己さんの母者がぐいと一本三郎さんに釘をささずに措かなかつた。川端の弟の四郎さんは氣の弱い少年、食ひ過ぎの腸加答兒で死ぬやうな呻吟をしたりして居た。おかつぱをふさふささせて阿母そつくりの小さな眼をし

た百合さんは瘠形で、姉の和子さんは猪首、怒り肩、小相撲取の體格をして居た。切つた前髪の下にさげすむやうな眼で人を睨めて、亂杭齒の太い聲で、

「あのね、あたしはお饅頭なんかいくら食べたつて、何ともないことよ。ゆうさんは直ぐわるくなつてよ。」

と駒子に曰ふた。獨り遊びの口癖に、「和子さん、かの字か、かんじうか。百合さん、ゆの字か、ゆんじうか」などと言ふて居る。母者は特に和子さんと彼女を呼んだ。兄妹喧嘩して、眼の凜い克己さんが「氣ちがひ！」と妹を罵つた。

「何をお言ひです？　妹ぢやありませんか。おまへが阿父さんに代つて面倒を見てやらねばならぬ妹ぢやありませんか。」

と口早に叱る母者の聲に涙があつた。熊次も駒子も此變りものを可愛がつた。和子さんは駒子になついて、よく遊びに來た。和子さんに連れて、百合さんや少年達も裏庭傳ひに遊びに來た。夫妻が拾ひ溜めた貝の棚を覗いたり、寫生をひねくつたり、何をして居ますね、お邪魔になるといけませんよ、と母者が隣室から聲をかけても一向頓着しなかつた。熊次は三少年二少女と

僕さんをモデルに覺束ないチヨオク畫を試みた。皆が「小父さん、小母さん」と熊次駒子の事をいふた。「小父さん小母さんではお可哀想だ、お兄様、お姉様と申上げるのですよ」と母者が笑つた。

大型の籐の眩かけ椅子が一つ、あらめ屋にあつた。中の八疊の西洋簞笥と共に、それは先住の海軍人の置きみやげである。熊次はそれを借り、表は騷々しいので居間にして居る裏の八疊の縁側に据ゑて、蟬しぐれ降るやうな櫻山を見上げながら讀書した。ある日の午後、熊次はその椅子にかけて「歐洲諸朝廷の祕密」を讀んで居た。裏庭の足音に不圖眼を上げた。無花果の一叢茂つて、桔梗や玉簪花がほとり近く咲いて居る井のこなたから眞白い顏が此方を見て居る。それは眞白に塗つて居る澄代さんであつた。澄代さんは盆前にも一度來たが、熊次はよく顏も見なかつた。

「何であんなに塗るのだらう？」

と熊次は思ふた。

澄代さんは十六、しやくんだ顏の、早口で、眼は阿母そつくりの眼をして居た。お蝶さんは「澄

ちやん」と呼び、母者は「澄代さん」と呼んだ。姉の病中、一人で臺所なども受持つた。寢ぼけて、「澤庵が二本にね、それから――」と母者に話しかけた話を、お蝶さんがよく笑草にした。母者には內證で、どうにかして曙染の衣裳がつくりたいものと、姉と二人で肝膽を碎いた話は、母者の口から駒子は聞いた。父中佐が在世の砌は、麴町の官舍に住んで、姉妹は女子學院に通ふた。姉は出來の好い方ではなかつた。妹の澄代さんが通學の途中で、「これ持つて往つて」と何か白いまるめたものを送りの馬丁が袂に押入れた。後で買物にやられた馬丁が、店先で風呂敷のつもりで袂から出すと、それは腰のものであつた。女子學院の一つ話を夫妻が聞いたは、後の事である。澄代さんは人の良い俠であつた。

逗子の夏は眞盛りになつて、晝は海邊、夕は川邊が、鍔廣の海水帽や白い着物で賑合ふた。熊次は日々海に入つた。彼は可なり泳げた。駒子は大抵留守をした。濱には未だ葭簀の小屋がけもなく、しつかりした海着も人人はもたなかつた。麥稈の海水帽を白紐で顎の下にくくつて、べつたり體にくつついた晒しの袖無し姿で濱路をとぼとぼ歸る女達の容子は、見られたものではなかつた。あらめ屋の女達は、滅多に海に入らなかつた。

鎌倉の海はよく人が死ぬ。然し穩やかな逗子の海でも死ぬ人もあつた。ある日、濱の騷ぎの中を見れば、猿股をはいた十七八の丁稚風なのが底をぬいた麥酒樽にのせられ、火あぶりになつて居る。腹の皮が少しこげる程になつても、蘇生しない。立合ひの醫師も駄目を宣告した。脚氣衝心であつた。今朝東京から來たS舍の活版職工の一人で、皆海の中でふざけて居ると、此一人が呀といふて水の中へ引くりかへつた。戯談と思ふた、と連れの裸男の一人が蒼くなつて言ふのであつた。急ぎ足にやつて來た丈の高い胡麻鹽口髭の人を熊次も識つて居た。雜誌、出版物は勿論、日日の新聞すらも社で組んでS舍で刷るので、S舍の社長のSさんはよく表附の下駄ばきでかたかた編輯局に上つて來たものだ。早くから若い人人と社會主義の研究をしたり、人口問題を考へて移民會社を組織したりして居る先覺者のSさんは、富士見橋の上流大曲りの洲嘴に耐震家屋といふ新式 Cottage 風の別莊を建て、其附近に平屋づくりの數棟を建て、塘を築いて潮入の池をつくり、自分も來ればS舍の職工もかはるがはる休養させたものであつた。喜んで今日來た職工の一人があまりに果敢ない最後に、Sさんは愀然として居た。不圖見ると、澄代さんや赤い帶の妹達が遠くから死骸を覗いて居た。和子さんがあらめ屋に走せ歸る

なり、

「小母さん、恐い事よ、土左衛門が、ね、――」

と眼の色を變へて云ふた。

「土左衛門」といふ語を知らなかつた駒子は、和子さんが何を言ふのかと一寸思ふた。

月うつとりと海穩やかな宵が其日の後につづいた。珍らしく夜海に入つた熊次は、思ひがけない水の溫かさに、思ひついて川口を渉るとあらめ屋の庭先から駒子を呼んだ。駒子が勇み立つて、隣の女連を誘ふた。お蝶さんは病後で用心し、澄代さんと和子さんが駒子について來た。

やがて大小三人の白衣姿が、熊次につづいて川口を渡つた。駒越さぬ水をわたるにも、駒子は犇と夫の腕にすがつた。駒子は少しも泳げなかつた。熊次は手をとつて駒子を泳がした。

「小父さん、泳がして！」

唸つて和子さんが兩手をさしのべた。水の中でも、和子さんは思ひの外に重かつた。

夜の海溫かに、白い姿の二つ三つ肩ぎり浸つて笑ひさざめきぽちやぽちやするのも、しづかに面白い光景であつた。

あくる日熊次はあけ放した表の八疊のテエブルに凭つて居た。縁側で澄代さんが髪を梳いて居るのが見える。頭を上ぐる拍子に、不圖此方を見る。二櫛目にまたまじまじ疑問の眼を上げる。しやくんだ顏の白くもない、それは少しも美しいといふ娘ではないが、やはり可愛い娘であつた。

夕方は一日の打ちとけ時である。熊次夫婦は幸野の家族と話して居た。話半に、一番西の端にかけて居る澄代さんが口早に、

「小父さんは身輕で門を乘り越えるのがお上手ですと。」

といふた。駒子が話したな、と熊次は思ふた。

「宅の馬丁がね、よく門を乘り越えて遊びにばつかり往つて、本當に困りましたよ。」

と幸野の母者が苦笑した。

馬丁と一緒にされて、熊次は腹も立たなかつた。

熊次の氣の向きを駒子も幸野の母者も感ぜずに居なかつた。海のあなたに日は入つて、川水に養神亭の灯影流るる夕暮に、あらめ屋の庭先きには、緣代が幾箇もならんで夕涼の人を待つて

居る。幸野の母者がお蝶さん澄代さんとかけて居る。隣の緣代が人待ち貌にあいて居る。駒子を誘ふ。否、と云ふ。熊次は一人でやをら下りて行く。「御散歩でございますか。」と母者が先をうつ。構はず隣の緣代に腰を下ろす。話がはづまぬ。熊次が駒子を呼ぶ。

「私は此處でお話を筆記して居ます。」

と駒子が應へる。母者がお蝶さんに耳打ちして立ち上る。母者の白い姿が橋を渡つて向ふ河岸に見ゆる頃は、熊次も流石に重い臀を上げて緣代をはなれた。

先頃まであらめ屋に居た老夫婦の知邊の青年が、老夫婦の歸り後もあらめ屋に遊びに來た。Hさんはやはり佐賀の人、美術學校の彫塑科に居るが、肺がわるくて、母者と靜養に來て居るさう。「サカナヤさん」に肖た柔和な淺黑い顏をして、聲が少しかすれて居る。磯釣りが仕事で、ベラ、カサゴなど飯の菜位は毎日釣る、と熊次に話した。熊次は寫生が重で、釣の方は閑却して居る。夕方の散歩に、熊次はHさんと打連れて歸る。あらめ屋近く來ると、藤色の娘が二人向ふから川岸を歩いて來る。お蝶さんと澄代さんであつた。噂の曙染ならずも、二九と二八が藤色揃ひの姿はたそがれの眼に美しい。お蝶さんが玩具の手桶を提げて居る。Hさんが一寸拜見

して、心易くものを言ふ。それが熊次に妬ましかつた。

山手の新別莊に居る深水の太郎君が、ある日熊次に曰ふた。

「あらめ屋には大分若い女が來て居ますねえ。」

「え、え。」

「畫を描かせてくれんかなア。」

「さあ？」

「一々持ち運ぶも面倒ですが、畫の具箱を何處かあなたの室の隅に置かしてくれませんか。」

「タアペンテインの臭は眞平です。」

黙もなく熊次は突ばなした。

四

洋行みやげの書籍の荷が着いたし、社の慰勞會がある、といふので、八月の十九日と云ふ日に熊次は上京する事にした。かねて惣五郎爺に頼んで、生きた鎌倉蝦の一籠をみやげに買つた。隣の澄代さんや少年達も今日歸るさうで、朝から髪結が來て居たが、やがて結ひ立ての桃割れで澄代さんが入つて來た。

「あのウ、お湯に參りますんで、其間に小父さんが往つておしまひなさるといけませんから。」

と暇を告げた。

「それは御互様にお暑い事で。」

と熊次は笑つた。桃割の告別は好いが、澄代さんの母者が先刻熊次の今日出京を聞いて、「今日？」と眼を圓くしながら、では澄代も御一緒に、とも云はず一瀧車おくらしたのも、熊次がいよいよ車に乘る際に、もう湯から歸つた姿は座敷に見えながら二度と澄代さんが出て來なか

つたのも、頗物足らぬものであつた。

東京は車の上も眩暈する程暑かつた。榎坂の客間には宇土君が居た。一年留守の重荷を下ろしてほつとしたげに、少し沈んで居る。「陋使是れ奉ずる能はず」と西洋の兄に書いた當の宇土君と差向ひになる事は、流石に面伏せであつた。宇土君も不快な客子に見えた。兄が來て、留守中の話になると、宇土君は月給の不足など云ふた社員の不快話をして、段々熱くなり、星野は義氣がある、と熱心に星野君をほめた。鎌倉蝦の籠が披露される。兄の家にみやげを持つて來るのが、熊次にはきまりがわるかつた。そんな事があるものか、持つて來るが本當だ、と眞顏に兄が打消す。「エビで書を釣る」やうなもの、と熊次が獨語する。兄が宇土君と眼を見合はした。新着の英書は客間に堆く積まれた。處初子なんか鳳呂敷持參でやつて來た、まだ弟も來ないから待つてくれ、と云ふたと兄が笑ふ。注文の英譯ツールゲネフが六冊。これも持つて往つたらよからうとくれたのが、イブセンの英譯五冊、Bjornson といふ初めて聞く作家の小說四冊。何れも倫敦で求めたもので、大型の横綴「Louvre et Luxemburg」は巴里みやげの新古繪畫彫刻の寫眞版であつた。兄は筆硯を呼んで、其すべてに世界遍遊の紀念の題詞を書いてくれた。

書生の杉山君が義ましげに言ふ。兄の家にもと書生を置かなかつた。新境涯の必要が常例を破つた。熊本辯丸出しの武骨な杉山君は、熊次の知らぬ獨逸語を始めて居て、玄關番の几上には「Gott ist Liebe」など書き取りがのつて居た。

熊次は虞初子君に挨拶なしには濟まぬ氣がした。月給一ヶ月分の賞與を、遊んで居たからと虞初子一人が返へしたといふ兄の話も聞いて居る。われから滅多に人に近づく事をせぬ熊次は、珍らしく虞初子の宅を訪ねた。山王下の秋蟬の音の降るやうな小闇い住居であつた。茶を持つて出た三十近い細君は、昔「歸省」の篇中に「薄紅に光る顏もて」梨をむいた戀人であつた。「歸省」が出た年に結婚して、初生子は出世作の字音其まま「輝生」と名づけられたが、其子は亡せて、世帶じみた妻の夫は新しいインスピレエションを求めかねて時々家を負ふ蝸牛の嘆を歌つて居る。「抒情詩」の噂から談、文藝に入ると、虞初子は曰ふた、梧軒さん等より自分等は新しく、自分等より鴨志田はまだ新しい。熊次もそれに異論はなかつた。鴨志田君の才藻は、入社當時から熊次も眼を刮つて居る。熊次が切りぬきの名文集には、虞初子君の「小天地」と共に、鴨志田君の小品が貼られてあつた。鴨志田君の日記「自から欺かざるの記」を虞初子は

預けられ、悉皆讀まされて居た。それにはしん子さんを對象に戀を得て之を失ふまでの經過が包まず書いてあるさうな。「ああ吾儘では」と虞初子はつくづく嘆息するのであつた。

其夕熊次は京橋三橋亭の會に往つた。社に近い手輕な西洋料理、何かと云へば其二階が會場になつた。すべての社員を集へた慰勞の會は、また總務の舊を送り、新を迎ふる披露の會であつた。兄は腹心の宇土君が横濱で刷つた雜誌を手荷物で東京に提げて來た昔からの事を說き出して、一朝夕にはあらぬ宇土君の勞を犒ひ、「他の腹心」の山下君を手短に新當局として紹介した。熊次の席の傍にも立つて、逗子の釣の一口話をして、「釣でもやはり兄は兄」と皆を笑はす事を忘れなかつた。

書籍の重い包を持つて、あくる夕熊次は逗子に歸つた。

熊次は早速ツールゲネフを讀みはじめた。追々と手に入れたトルストイ物の裝釘と異つて、婦人持ちにふさはしい小型の、印刷もぱらりとした、黄いろいクロオス表紙の瀟洒としたそれは、ツールゲネフにふさはしいものであつた。先づ「遊獵者のスケツチ」から熊次は始めた。二葉亭の譯で初めてツールゲネフを知つた「あひびき」が、其中にあつた。英譯で讀むより、頭の

中にある二葉亭の譯が尙好かつた。ツールゲネフ集と同じ型で水色クロオス表紙のビヨルンソンの小說も、先づ「Synnöve Solbakken」を覗いた。那威の田園小說で、素朴な味があつた。茶色の紙を被せた澁い裝釘のイブセンは後廻はしにした。「Louvre et Luxemburg」の中には、コロオの風景もあつたが、大部分は見るにきまりが惡いやうな女の裸體であつた。それを見せられた最初の客は、駒子の親友であつた。出雲の平田吟子さんは、任地仙臺への歸り途、卒業で別れて四年目に駒子を訪ふたのであつた。出雲の儒者の娘は、手紙で熊次が思ふたやうなきちんとして柔らかな人であつた。姉といつたやうな親友の珍らしい來訪に、駒子はわくわく何のもてなしも出來なかつた。見せられた貝の一つを取り上げて、「これ頂戴な」と吟子さんは曰ふた。

「平田さん、言つて上げましやうか——これ、頂戴な」と眼口も一つにした駒子が呂律も廻はらぬ口早に、平田さんの寫似をした。夫妻の水彩寫生を見て、男はやはり男らしい、と吟子さんは熊次の蘆の湖の小舟をほめた。裸體畫帖にはいささか驚いて居たが、驚いては濟まぬ、といつたやうにつつしんで見て居た。律義な吟子さんは「義務年限はお果しなすつた方が好いけれども」と駒子に曰ふた。然しそれ以上は言はなかつた。吟子さんが問ふた淸人兄の消息を、駒子

は答ふる事が出來なかつた。「お小さいのがおいでですと好いのですけれど」と吟子さんは二人きりのあまり片づいた室内をしんみりと見廻はすのであつた。兎に角夫妻の容子にいささか安堵したらしく、先を急ぐ吟子さんは直ぐに暇を告げた。熊次は「トルストイ」を吟子さんに贈つた。駒子は逗子驛で友の北歸を見送つた。

吟子さんを口切りに、裸體畫帖は頻に人目に觸れた。油繪の太郎君は、中でも背面美人の座像のたまらなく肉附がよいのに小半時も見入り、しばしば口舐めずりをして居たが、到頭徑一寸程もある涎の珠をぽつたり畫帖の上に落した。而して悠々と浴衣の袖でそれを拭いたものである。

五

海の水が追々冷え、イラが蛰したり、高い波が立つたり、夏も終に近くなる程、海邊はこしばしの雜沓が加はつた。中等がこむので上等に乘つたら誰某に會ふた、と兄が噂をしたりした。來は來ても、狹い別莊の內も外も人だらけの、休養どころでないあまりの雜沓に、不興氣な顏をして兄が直ぐ引返へす日曜もあつた。

「何か大事が出來たのぢやなツかの？」

と父が心配顏をする。母が折角の丹精を一箸でもと兄を引きとめ、

「お相伴しなはり。」

と熊次を呼んだりした。

あらめ屋も、新しい雜沓が熊次をうんざりさせた。澄代さんが妹二人と少年達をつれて歸京した後、鴨志田室に新客の一組が來た。小田といふ官吏の一家、主人は一度も顏を見せず、若い

母と十五六の淺黑い娘、眼鏡をかけた青年は頓田さんと呼ばれて養子らしく、娘に英語を敎へては「お婿さんにさうするものがあるものか」などいふ聲がしたが、「お隣は變よ、頓田さんが阿母さんの膝に枕して居てよ」と窃にお蝶さんが母者に囁く聲も聞こえた。熊次は眼鏡の男を嫌つて、ものも言はなかつた。頓田君は躍起となつて、熊次夫妻の室の眞前の緣代にわざわざ大の字に踏反つて熊次を挑むだ。それを尻眼にかけて、簾を下げた室內を熊次は往つたり來たりした。「高慢な」と唸やき唸やき頓田君は引きあげて往つた。熊次が引き込む程、頓田君はあらめ屋に男一人かのやうに出しやばつた。「奥さんも隨分怒りつぽウだ」と無遠慮に幸野の母者に言ふたりした。

「坊ちやん。」

眼鏡が呼ぶ。

「何アに？　頓田さん。」

僕さんの聲。

「坊ちやん、歌つて御覽。」

「歌つて上げましやうか。

書生さん――

勉強なまけて

學校が落第で、

ジヤンスイ　ホウ。」

「じやんスイ」とヤケに聲張り上げて、「ホウ」と投げる六歳童が効ない太い聲。

「はつ、はつ、はつ。」

と眼鏡が悦に入る。心やす立てが過ぎては、時には「頓田さん、いやアよ。」と蠹所でお蝶さんが大きな聲を立てた。

「拳固をあげたいやうですね。」

とお蝶さんの母者が腹を立てた。澄代さんが居なくてよかつた、と熊次は思ふた。

到頭八月も今日で終る日が來た。隣二組の容も明日は歸るといふ事である。其日の夕、刷新された雜誌の九月號が熊次の許に屆いた。「御批判如何に候哉」といふ星野君の手紙が添ふて居

る。卵色表紙の分厚な一冊は、手に持つたばかりでも面目を新にして居る。卷頭には「憎黄的惡感」を兄が書いて居る。世界を廻つて白人の黄色憎惡を痛感した兄は、「擧國一致」の警語を日本に齎らして歸つた。黄色人種は白人に憎まれて居る、日本は憎まれて居る、內輪喧嘩の秋でない、擧國一致して外に當らねばならぬ、と謂ふのであつた。友山君の「戰國策とマキアベリーを讀む」は兄に宛てて、あなたが空間的に世界を旅する間、自分は時間的に古今の歷史をあるいた、と書き起して、颯爽として紙に聲ある雄文であつた。戀妻に去られて詩境一段を深めた鴨志田君も「おとづれ」に氣を吐いて居る。

熊次の「風景畫家コロオ」は？

中々出て來ぬ。段々頁をめくつて、いつもの六號雜錄欄に熊次はそれを見出した。卷頭一頁大の口繪にする筈の「オルフイユス朝を迎ふ」は、小さなカツトになつて、本文六號の中に入つて居る。「卷頭に」と書いた句は、「ここに」と改められて居る。

熊次はびつくりした。次にうんざりした。更にがつかりした。果ては赫となつた。

俺を辱しめた奴は、何者だ？

一體如何したといふのであらう？
手紙で言ふてやつたに安心して、熊次は校正も見なかつた。先方は忙しいどさくさ紛れに、よくも手紙は見ず、すべて以前通りと速了し、文は六號欄に、カットもそれに準じてつくつた。
雜誌編輯の鴨志田の忠二君が本文を校正して始めて間違を發見したが、時日が無いのでつひ其ままにした、といふ事が後で分つた。
「細か字ぢや讀みにくか。」
と父が後でこぼした。
それは熊次に眞額の打擊であつた。兄は出世する。雜誌は新しくなる。自分は——
「何時までも同じに。」
と雜誌を取り上げて熟々六號欄を見て居た駒子が、悵然と言つた。
妻の一言が熊次の腸を剜つた。其通りだ。あまりに眞實だ。
突然烈しい怒が熊次を捉へた。
「な、何？　何時までも——？　失禮な——」

あらめ屋が家鳴りする程大喝一聲すると、ぎりぎり齒を言はせながら、手足を飛ばして烈しく駒子を打ちたたいた。
逗子に移つてからも、熊次は時々駒子を打つた。兄の歸朝が近くなると、餘計に打つ機會が出て來た。隣のお蝶さんはばちばちいふ響を聞いて、何かと思ふた。然し今夜のやうに怒つた事はない。熊次の怒鳴と切齒と打撲は、あらめ屋中に鳴り渡つた。
打つても、蹴つても、尙足らぬ。
「隱宅に來い、來い！」
熊次は駒子を曳きずつた。
「隱宅にはおいささんが居るから」
腸をしぼるやうな聲して、駒子は泣き伏した。
熊次の怒は追々燃え下つた。あたりはひつそりして居る。
其夜熊次は蚊帳に入つたが、一睡もしなかつた。夜深に、隣の幸野の母者が又隣の小田の母者に、

「あんなでも――」

と襖越し潜々聲に語る聲が聞こえた。

明くる朝、小田の組が先づ立つた。簾越しちらと見た眼鏡の顔は、今迄に見ぬ眞顏になつて屠た。一瀧車おくれて、幸野の母者も眼を泣き腫らして面伏せな駒子に挨拶して、お蝶さん僕さんと歸つて往つた。

新別莊の深水一家は京都に、岩原夫婦は上州に、驟宅の子供等もおいささんも追々東京に歸つて往つた。

向ふの養神亭も、濱も、大風の後のやうに靜になつて、明治三十年の逗子の夏は過ぎた。

第七章　青雲白雲

一

騷がせの都の客が去つて、平常の逗子になると、熊次も機嫌を直して、讀み、書き、散歩、寫生といふ日常生活が、型の如く繰り返へされた。臺所や針仕事、其間々に駒子はスキントン萬國史を讀んだ。初秋の風そよそよ青い相模の海をわたつて、まるまると太つた鰹、サウダ鰹が夥しくとれる時節である。背は黑潮の色に濃く腹は波の名殘りに白光る海の子等が釣られ、揚げられ、算を亂して往來に積まれる。あらめ屋のおかみが値のやすい汐合を澤山に買つて剖き、蒸し、燻し、干して鰹節をつくる。駒子も見習ふて、生涯に初めて鰹節十本つくつた。

ゆく夏と共に人波のさつと引いたあとには、日くつきの者ばかりが殘る。母者同伴の病彫刻生が店立を吃つて困じて居たので、岩原の家族が居た新宿の民家を敎へてやると、お蔭で快く置

いてくれたと菓子折を持つてあらめ屋に禮に來た。然し病氣柄遠慮をしたのか、滅多に顔を見せなかつた。山手の深水別莊に、皆が京都に歸つた後も、太郎君一人踏み留つて、三食はあらめ屋から運ばせ、悠々と畫を描いて居た。それは熊次に小うるさい事であつた。蔦は何か狙つて居る。蔦の輪が追々小さくなると、果てはあらめ屋の裏庭であらめ屋のお松をモデルに太郎君は油畫を描きはじめた。山本芳翠門下から白馬會にうつり、十年の勉强で太郎君はしつかりした腕をもつて居た。氷川町時代の事である、兄の懇意な獨逸歸りのH畫伯が父の油繪肖像を畫いてくれた。母の肖像もなくてはといふ事になつて、太郎君に頼んだ。出來上つたそれは、ちと顔幅の濶いを難にして、確に肖て居た。裏庭での太郎君が仕事を、熊次は駒子の見るを喜ばなかつたが、自身は木炭の最初から時々見に往つた。畫になると云ふので、結ひ立ての銀杏返へしに花簪、奉公先きの子爵夫人から拜領の帶、單衣、白足袋まではいてお孃さん式の滿艦飾、いそいそ庭に立つたお松は、首傾くる畫師の今少し田舍らしくと云ふ注文で、一格下の着更を餘儀なくされた。一人では淋しいとあつて、お婆さんも立たせられた。「婆アはこれで澤山でございましやうから」と、仕事着のままきちんと口を結んでお婆さんは立つた。一時間もすると、

お松はつづけざまに欠伸をした。其後、上野の展覽會で「彼岸詣」といふ太郎君の畫を熊次は見た。赤帶の娘が日傘をさして先に立ち、腰の少し曲つたお婆さんが後から行く。お松に肖た娘は、くたびれ切つて眠むさうな顔うつ下げて居た。

珍らしい客は虞初子であつた。先月山王下を訪ねた際の、遊びに來ませんか、往きます、が實現したのであつた。眞率な客は本箱の歐羅巴みやげを見ては「些ア裾分けせにやいかんな。」と眞顔に怨じ、熊次の近業を談じては、「熊次君の筆にかかれば、探偵小說も上品になる。」と曰ふた。それは熊次にうれしい言ではなかつた。夕方隱宅に兄が來た知らせがある。虞初子が直ぐ往かうとする。兄も疲れて居やうから、ととめる主の言に、「全く兄さんとは東京で始終會ふけれども、あなたとは稀だから」と客は勝手に自分の言ふ事を言ふた。あくる日兄も來て、あらめ屋の熊次の居間は珍しく賑合ふた。兄は官場の忙しい中から雜誌に社說を、新聞に東京だよりを書き、小品を口授し、眼ざましい働を續けて居た。大に書くやうに、と兄は虞初子に促した。「熊次なんかもちつとも書かんもんだから」と兄が熊次を顧みた。「書いても何だか張り合ひがなかつたもんですから」と言つてしまつて、甘えるやうな媚びるやうなわがロぶりがたま

らなく熊次はいやになつた。

虞初子は三日泊つた。駒子の前少し硬くなつたつつましいお客は、熊次にさして重荷でもなかつた。中秋近い月の夜に、主客二人は森戸まで散歩した。和歌の話をして、やはり師について正則に學ぶ要を虞初子は唱へた。早くから自流の新體詩など作つて納まつて居た虞初子は、近年松波紅葉社中の人になつて、短歌も格に入つて居た。行く行く語らひながら月影を踏む葉山路、小闇い山邊は夥しい虫の音が調子一ぱひに噴しいまで鳴きしきる。細かに聞けばさまざまの虫の音であつた。斯樣な舊詠がある、と虞初子は誦しはじめた。藪睨みの小男、年ふる木彫の猿に肖た顏をしながら、虞初子が調子を張つて朗吟すれば、玉のやうな音が咽喉からころがり出た。然し今夜は好音を虫に讓つて、會話調に唯誦するのであつた。

「おのがじし鳴くとはすれどなかなかに
　亂れざりけり虫のこゑごゑ」

「好い歌です。」と熊次も三誦深い興に入つた。

あくる朝虞初子は歸つた。川口近い街道のまだしつとりとした朝露の砂路に魚屋が下ろした籠

に眼を射る碧色を見れば、昨夜の蝦網で今朝上つたばかりのワタリ蟹。五つ買つて、早速虞初子の家つとにした。月夜の蟹に肉少ない事を、海邊の生活未だ日の淺い熊次は知らなかつた。

驛まで送つて、二人は別れた。

「あなたの奥さんは、全く人間には勿體ないやうな方。」

と虞初子は一言置土産を殘して往つた。

兄は土曜の夕方から日曜かけて大抵缺かさず來た。兵兒帶姿で街道の石垣の上からダボハゼを釣つて居ると、若い將校を連れた鍾馗顏の海軍服が

「太公望をやつちよるな。」

と車の上から聲をかけて通つた。

「誰です？」

「彼が軍兵衛たい。」

と兄は葉山の別莊にでも行くらしい軍兵衛「大臣」の後を見送つた。新宿の漁師の舟で、鯵釣りベラ釣りに兄が出る日は、熊次が何時もお伴をした。

不慮の死をして去年の夏の熊次夫婦が氷川の住居をいとど暗くした藤を世話した隱宅女中が暇をとつて、後におさんといふ女中が來た。彼女の父はお世辭者の名とりであつた。店で買物をしても、賣つて下さつてありがたうございます、とお客の方から禮を言ふた。娘のおさんも二十歳の銀杏返し、婀娜めいた裝をして眼を瞬き、舌足らずの甘へた口をきいた。兄が風呂に入ると、おさんが背を流す。風呂から上つて、兄が中二階から鏡を呼ぶ。おさんが「へい」と應へて自分のを持つて行く。母が氣にして顏をしかめた。月曜の朝、歸りしなに庭の秋薔薇一輪摘んで、

「お駒さん。」

と駒子を呼んで、兄が胴衣の釦穴に挿させる。まじまじ見る熊次は不快であつた。兄が來る日は、熊次は氣が重くなつた。兄が居る内は、熊次は駒子に殊更慳貪に當つた。十月に入ると、兄が東北漫遊に出かけたしらせに、熊次は少し息をついた。

二

別莊の庭に紅白の秋櫻が咲いて秋しづかな漁村に、慘ましい出來事が起つた。A子爵夫人が葉山の別莊で自殺した。あらめ屋のお松が此春まで小間使に上つて居た夫人である。子爵は東北の小大名、別莊附近から上つた妾にうち込み、さんざ夫人をいぢめた。實家の微祿した夫人は、鬱懷のやり場なく、苦しみぬいた揚句到頭懷劍の切尖に突伏して、三十前の未だ若い生命を絕つた。遺された七歳の姫の髪を撫でて、臨檢の警部が涙にくれたさうである。

お松を呼んで、子爵夫妻の話を聞いた。子爵は器用で手が利いた。銃獵も上手、女のすなる毛糸の編物なども上手で、「御前、私にも御敎へ遊ばして」などと女共が甘えたものである。花牌が上手で、葉山の若い者が寄つて遊ぶとよく「諏訪の臺をはじめやう」と言ふては花牌をひいた。「諏訪の臺」は子爵の別莊地の字であつた。森戸の橋から山手に高く見ゆる卵色の洋館を、熊次も遠ながら見識つて知る。つい先頃の事、お松はあらめ屋の前を子爵夫人が小さい姫の手

をひいて行くを見つけた。驛に車がなかつたさうな。お松は「おていちやま」を負つて、車のある所まで行き、それが最後のお別れであつた。魚屋の惣五郎爺が翌朝あらめ屋の庭先で、荷を下ろしての噂話の聲は沈んで居た。昨日諏訪の臺に寄ると、奥様はしばらくうち案じて居たが、「爺やのお肴を買ふのもこれ限になるかも知れぬから」といろいろ買つた。東京に御歸りになりますんで、と惣五郎爺が問に、「ええ、まあそんな事になるでしやう。」と子爵夫人は淋しくうち笑んだ。熊次駒子はしんみりと其話を聞いた。東京の新聞は記者を派して現場について色色書き立てた。逗子には肥後氏兄弟の別莊もあるから新聞に出るかも知れぬ、と子爵夫人が子爵を諫めて居た、と書いた新聞もあつた。

東北漫遊に出かけた兄からは、泊り泊りのたよりが來た。北へ行く程秋は深く、仙臺から、松嶋から、漆の紅葉の盛岡から卷紙に筆太に書き流した情趣饒かな手束は、櫻山別莊に披かれて父母の朝夕を慰めた。青森狀が屆いた夕、突然兄が歸京の報は傳はつた。合はせものは離れもの、薩摩と進歩黨とさう何時までもしつくり行くものでもなかつた。内輪揉めがはじまつた。火蓋は野馴れた進歩黨側から切られた。進歩黨は常議員會を開いて、閣員中の異分子を斥くる

事、外三ケ條の要求を首相に突きつけた。それは最初から最後通牒の劍幕であつた。松隈橋渡し役の兄は、地方漫遊どころでなかつた。急電北に飛んで、兄は南に馳せ歸つた。

富士の頭が白くなつて、十月二十五日が來た。熊次の誕辰である。「三十路にて立つ」と元旦に歌つた熊次は、今日正に三十の誕辰を迎へたのである。

富士の雪を見て、熊次の心は山の秋に騁せた。駒子は以前秋の修學旅行で日光から長野善光寺へも往つて居る。熊次は日光も鹽原も未だ見ない。社の仕事は精出して半月分は片づけてあるし、明日の出發に差支はない。が、兄に一言なくてはならぬ。熊次は一通の手紙を書いた。而して紙尾に斯く書き添へた。

家兄急御用により東北より歸京し、
われ日光鹽原に遊ばむとす

熊

青い雲、
白い雲、
同じ雲でも、
わしや白雲よ。
わがまま氣ままに、
空を飛ぶ。

斯手紙をあくる朝驛のポストに抛り込むと、直ぐ其瀧車で熊次は逗子を後にした。東京素通り、上野の瀧車を宇都宮で乘換え、男體山の影蒼黑く山氣身にしむ日の夕、讃岐屋といふ小さな宿の二階から彼は淋しい日光の町を眺めて居た。

日光の秋は絢爛な雄大を以て熊次を壓倒した。東照宮は後に、先づ中禪寺に行くべく宿を出て、朱塗の曲欄碧流を跨ぐ神橋に來ると、彼はもう息をのむだ。何と云ふ秋の色、何と云ふ水の音！　關門でもう熊次は「日光」の囚はれ人であつた。含滿が淵は、彼を三時間引きとめて、覺束ない一枚の寫生を果すまでは立たせなかつた。去年の初夏、熊次がまだ出社をつづけて居

た時分、編輯會議の結果、虞初子は日光に山水を見に書きに往つた。書筆携へての同伴を虞初子は私に熊次に勸めたが、熊次は應じなかつた。虞初子の筆は極力夏の含滿が淵を描いて居たが、今眼に見る秋のそれは繪も文も中々描けるものではなかつた。清瀧の路傍にも、熊次は三脚を立てた。深澤の谿に入ると、大石の間を轟々とたぎり落つる大谷川の水の美しさは、日光山彙を山火事のやうに烘る秋葉の美を晒ふかに思はれた。方等の瀧見茶屋で、また二時間の餘も引かかつた。追々に日が暮れかかる。二十五折の山阪路を登り果てて、暮烟に樺のほの白い大平をやうやう中禪寺の湖畔に出ると、入り日のあとの空は黃に、湖は白く、周圍の山山は暗く、此方の水畔に柚の焚火が赤かつた。其赤い火に纏むだ兩手をかざす前に、然し熊次は急いでまた寫生帖を披かずに居なかつた。

中禪寺湖畔の一夜は、奇寒に夢も成りかねた。和泉屋の二階に、夜すがら水のぴたぴた言ふ神秘な音を聞いた。明けて見る湖は暗綠を湛えて、周圍の山は音無しの火のやうに、美しいより凄かつた。熊次は其日韓々の音肝に答ふる華嚴の瀑を仰ぎ、相撲取の手程大きい楓の紅葉を採り、しばしば三脚を路邊に立て、一日がかりで日光に歸り、小西の別館に宿つた。日光に來て宮

を見ないでは濟まぬ。あくる朝案内者の後から型の通り歩いた。然し自然にうたれた眼は、駒子が敎へた木目の虎も、左甚五郎の眠り猫も、乃至案内者が誇り貌に說きひけらかす金銀の燭臺も、さして熊次の感興を牽かなかつた。彼は午后の瀧車で日光を立ち、其夜は西那須野の宿に居た。而してあくる日は霜枯の那須野三里を歩いて、關谷から車で箒川の谿谷を溯り、下鹽原は福渡戸のますやに着いた。

熊次は鹽原に一週間居た。日光は紅葉の盛りであつたが、鹽原は着いた日の夜、川畔のます屋別莊、三階建の層樓をみしみし搖り撼かす大嵐が吹いて、紅葉は奇麗に散つてしまつた。夏は兎に角、未だあまり知られぬ鹽原の秋を見に來る都の客は稀に、大きな別莊には熊次の外に、新聞の續き物を書く人其挿畫を描く浮世繪師の兄弟を子に持つ隱居夫婦が、曾遊の子に勸められて紅葉見に來て居たきりで、それも歸つた後は、「風の福渡戸」晝も表の戸をさして世を外の淋しいことであつた。秋霧つづきに、三脚持つて熊次は鹽原中を心ゆく程歩き廻つた。ある日は案内の爺について落葉踏み分け瀑めぐりをした。上鹽原のはづれに三脚を立てて居ると、雪がちらちら落ちて來て、七歲童が繩を絢ふ貧しい民家の圍爐裡傍にしばしの宿りを熊次は求め

た。日光の雄大の後に、鹽原の幽邃は熊次の心神を澄ました。箒川には幾條の支流が流れ込む。一つの小谷に一つの流れがある。一つの流れには、其音樂がある。日頃聞くとはなしに聞き馴れた海の音樂とはまた異つた空山流水の曲に、熊次は心耳を澄ました。それは彼の衷なるものにぴつたり合つて、忘られぬ音となつた。二十年の後、熊次はそれについて斯く書いた。

私の心耳に折りふし響く音樂がある。

私は何時其音樂を聞き始めたか、よくは覺えぬ。

よくは覺えぬが、一つの記臆がある。

今を距る約二十年前、明治三十年の晩秋、ある日私は野州鹽原の鹿の股川の滑に腰かけて居た。箒川の支流の一つで、上流には幾箇もの瀑があり、下流は一枚岩の可なり急勾配の川床を流れて居る。鹽飽橋から鹽の湯に通ふ山路の崖をざらざら滑りに滑り下りて、私は川床に下りたのであつた。秋も暮の事で、水は瘠せ、紅葉落葉のちらばる川床の眞中を細細と水は流れ行く。丁度鹿の股川が箒川に落ち合ふ少し上の處である。勾配のついた川床を、

水はS字に曲つて、いそいそ落ちて行く。行く手に、小さな峰が立ちふさがつて居る。葉をふるつた楓や青々した松が山形に峰を裝ふて、片岨は禿げて居る。水はそれに行き當り、左に折れて山の峽に吸ひ込まれるやうに消えて行く。下手なスケッチをしながら、私は何時となく水の音に聞き入つた。

水は流るる。流るるままに歌ふ。水は流るる。音も流るる。眼は流るる水を追ひ、耳は流る音を慕ふ。山に響き、谷にこもつて、譬へやうもない幽玄な其音よ。聞き入るままに遠くなる。尙遠くなる。幽かになる。絶え絶えになる。眼に見る水はもう山の峽に見えなくなつても、歌はまださながらに峰の彼方から響いて來る。終るかとすれば、また最初の調に還つて耳爽やかに流れ行く。私はまた其音につれて流るる。何と云ふなつかしい音であらう。此は水の音であらうか。否、山水の精、秋の精、此空山に形は見えぬあるもののたるみなく誦する流水の卷であらねばならぬ。

私はそれを忘るる事が出來ぬ。

もしかしたら、私にそれは初耳でなかつたかも知れぬ。子供の時から聞いて居たのかも知

れぬ。其調子の弦を私は私の衷にもつて生れて來たのがたまたま鹽原の山中ではつきり喚びさまされたのかも知れぬ。兎に角、私はそれ以來時時頭の中に此音を聽く。

夜半不圖さめて、此響に眼が冴え、何時までも聞き入ることがある。

書いたりする時は、此音が響く。響く時はまた書かずに居れない。此音を聽くことなしに書く事は、砂を嚙むやうなものである。

例へば電氣の通ふた架空線、それにポールをかけて私の筆はするすると凝滯なく快く駛る事が出來る。然し其線に觸るる事なしには、如何に書かうとあせつても駄目である。

私は私の心耳に響く其音樂を說明する事は出來ない。

それは複雜な音ではない。然し高低も屈曲もない一本調子ではない。而して年と共に音量は成長する。

それは金屬性の音で、やや淋しい。然し嚴肅な、悲壯な、涼し澄んだ、凛凛しい音である。すうと一氣に伸しては少し息つき、また十分に張つて、上り、上り、上り行く音である。

初春の淺みどりの空に跳る大凧のうなりか。似て居る。然し私の耳に響く音は、それより

も澄んで居る。

朔北に響く胡茄の哀か。いささか似て居る。然し私が聞く音には、ヨリ多くの彈力がある、強靱性がある。而して上昇が特質だ。

私の耳に響くは、罪も惡も死も知らぬ天人の樂ではない。反逆の怒號、惡魔の冷笑のそれでもない。涙同時に、唯頽廢の嘆きや絶望の歌ではない。Wattsの畫いた「望」が眼かくしされて手さぐあり、悔もあり、然も上りに上る音樂である。私の音樂は、ぱつちりと眼を開りに唯一條殘る破琴の弦を搔き鳴らす心細い音ではない。いて、見つつ、哀しみつつ、然も信じつつ、樂みつつ、大宇宙を波うつて彌上り行く人間神の進行曲である。

上鹽原で崖から剝がした木の葉石、買つた貝の化石と、數枚の寫生と、頭に殘る幽韻を家つとに、熊次は鹽原を後にした。而してまた西那須野に一泊して、小山から友部、それから海岸線で瀛車の上から霞が浦を遠望しつつ上野に着いた。丁度白馬會展覽會があつて、居合はした垂水

君は熊次が三脚提げて一廉の畫家ぶりを咲つた。展覽會には矢口や逗子で馴染の畫もあつた。何れの畫もそれぞれに面白く、素人には描けぬものであつたが、熊次の頭の中の畫に比べてはお話にならぬものであつた。上野から熊次は社に立寄つた。兄は居なかつた。松隈聯盟終に破れて、今日隈伯の辭表が出たといふ日であつた。熊次は直ぐ逗子に歸つた。

熊次が留守にすると、駒子は生活が懶くなつた。すべてが臆劫になつて、飯もあらめ屋で炊くのを分けてもらつた。あらめ屋では米一粒もない純麥の飯なので、駒子は冷たくなつたボロボロの麥飯に茶を漬けて、梅干菜に形ばかりの食を終へた。往々二食、或は一食の事もあつた。夜は淋しいので、宿の娘のお松を泊りに呼んだ。新聞には熊次が送つて置いた「白糸」が出て居た。「歐洲朝廷の祕密」の中の一章の自由譯で、ブルガリアの首相が外套の領についた白糸を目標に刺殺される凄い物語である。駒子が讀んで聞かすと、お松が後を見い見い駒子にすり寄つた。熊次が未だ鹽原に居る内、駒子は爲替の手紙にさう書き送つた。十日の小旅行にも、熊次はきまつて旅費の追送をさせた。

第八章　年暮るる

一

しばらくあいて居たあらめ屋の隣三室を借りて、女連れが來た。北海道は函館の素封家の一粒種といふ二十五六の人の好い娘娘した女は、引つめに結つて、輕い咳をした。兩親は亡くなり、夫は番頭上りの養子で、其妹といふ若い女がついて來て何角の世話をした。兄は何處に批の打所もない男振り、とさもない妹が誇り貌に言ふて、病前の妻や藝者などと一同に撮つた寫眞をあらめ屋のおかみに見せたりして居た。黑塗の飯櫃、蒔繪の椀、旅先の道具持物の素晴しい立派さに、あらめ屋のおかみは恐れ入つた。函館の本宅では、二階に二十疊の絹の蚊帳を釣つて寢るさうな。五圓もする下駄をあらめ屋の庭先きで盜まれ、「あんまりわたし達が贅澤をするものだから」と北のなまりで空咳(から)まじりにあらめ屋のおかみにわぶる聲が聞こえた。最初連

れて來た四十女が、お隣は若御夫婦と聞いて、「妒(や)いちやいけませんよ」と言ふ聲を、「いやーン」と鼻聲が打消した。暖かい日の午後など、十歳許の親類の女の子と、養神亭下の潮干に赤い袖口を見せて淺蜊を掘つたりする姿が、あはれに眺められた。

隈伯辭職の二日後、横須賀に軍艦明石の進水式があつた。二千八百噸の巡洋艦も、日本出來といふに多大の人氣があつた。程なく新造戰艦「富士」が英國から着いた。日淸戰爭後、日本が初めて有(も)つ一萬噸級の最新式戰鬪艦である。「富士」は大なる期待の的であつた。海軍次官のK大佐は都々逸が得意である。艤裝ほぼ成つて「富士」の寫眞が英國から屆くと、

「寫眞ばかりじや　わしや氣が濟まぬ
　早く呼びたい　お富士さん」

と大佐は歌つた。其富士が横須賀に來た。一般の見物は出來ぬが、緣故の向きは特別觀覽が許される。內務省勅任參事官の肩書つき兄の紹介狀が來たので、父母熊次夫婦横須賀に往つた。

繹から見る一萬二千六百四十九噸の戰艦は、さして大きくも覺えなかつたが、乘つて見て流石にゆつたりして居た。紹介狀を出す。Sと云ふ丈高い快活な少尉が出て來て案內する。先づ司

令塔の壁の厚さ。

「鐵でございますかな。」

と父がトントンたたいて驚嘆の聲を放つた。艦首艦尾の主砲、砲塔の素晴らしさ。一個八百斤の砲彈を、彈藥庫から滑車仕掛でするすると垂直の圓柱形通洞を引上ぐる無造作さ。あの大砲で此砲彈が飛べば、的になるものは全く一溜りもあるまい。甲鐵と名のあるは三千七百噸の扶桑が唯一隻、四千噸そこそこの巡洋艦松嶋を旗艦に、旭日旗を翻へす我艦隊が死力を盡してうてど中れど九千噸級の裝甲定遠、鎮遠に齒が立たぬと黃海の海戰に日本の將士が切齒して口惜がつたは、唯四年前であつた。

少尉の案内につれて、一行上甲板を下る處に、八字髭の瀟洒とした大尉が來て、少尉に代つた。囘航委員で英國に出張中、倫敦で兄の病氣を見舞つた事もあるY大尉であつた。將官室、士官室、水兵達の釣寢床の行列正しく卷き上げられて居るあたりから、下つて水雷發射管、水雷防禦網、艦内一わたり見るべきものを見終ると、大尉は一行を士官室に請じて茶菓をもてなし、兄の近狀を問ふのであつた。先頃の進水式にも來た話をしかけて、熊次は軍艦の名をは

たと忘れた。「明石の進水式に」と、七十六の父が子の記臆を補ふのであつた。

「富士」はやがて横須賀軍港附になつた。

二

十月の末、東北から急行歸京した肥後寅一は、むづかしい位置に自身を見出した。松隈の橋渡しをした彼は、其橋がひかれて了ふ此際に、松か、隈か、何方へ行くか、其一を擇ばねばならなかつた。在朝唯三月、仕事はこれからといふ場合に、力の位置を見捨つるは容易でない。努力して造り立てた聯盟を、われから崩す者の忌忌しさは癪に障はる。彼の心は決した。歸る早々、恬淡な山林局長は彼を訪ねて連袂辭職を慫慂した。進歩黨側の友人の多くは、勿論彼をさうするものにきめて居た。其期待を空しくするを、寅一は辭せなかつた。東北から彼が歸つて四日目に、首相の覺書は進歩黨の要求を手強く突刻ねた。二週間立たず隈伯は辭職した。隻脚伯の辭職で、内閣其ものが隻脚になつた。

隈伯に連れて野黨出の役者大抵退場した中に、知事の田原さんは居殘り組の一人であつた。辭職の勸誘に答へて「檀の浦まで參るつもり」と書いたので、檀の浦知事の異名を負はされた。

明石の進水式に、兄の先輩で經濟學者の馬淵さんが「お役目御苦勞」と冷やかした。馬淵さんは兄が在鄕當時から兄の文章を讀んで肥後の昔の秀才水足博泉に比し、東都文壇へ手引きをしたのも馬淵さんであつた。然し新進の記者がずんずん頭角を露はすにつれて、相互の間には隔りが出來た。馬淵さんがある事から一時世間の物議の的になつた事がある。馬淵さんの親戚の記者が憤々して虞初子に兄の新聞の冷淡を罵つた。馬淵の窮境に加勢もせぬ、恩知らず、と謂ふのであつた。虞初子も以前は馬淵さんの經濟雜誌に居た。虞初子が悄氣て兄のデスクに其事を傳へに來た。兄が少し考へて曰ふた、ジョンソンが云つたぢやないですか、人は兎角與へた以上に與へたと思ふ、と。何角につけて、馬淵さんは昔の後輩が癪に障つた。だから明石の進水式に冷やかしが出た。兄が應へた。「檀の浦まで漕ぐですから。」兄が後で熊次に曰ふた。平知盛が男なのは、最後まで戰ふたからだ。父は其子に信頼した。人の政變につき挨拶をする者があれば、父は手巾で鼻を一こすりして曰ふた。

「ええ、ええ、どうして、その、現の相撲を取らせて見んと。」

合はせものが離るれば、離れものが一つになる。深水の太郎君と簑田のおいささんの緣談が知

らぬ間に整ふた。芝公園の三緣亭で結婚式と披露があるさうで、熊次夫妻も招待狀を受取つた。お袖さんが亡くなつて、太郎君の獨樓ももう二年の餘になる。誰の前でも平氣に胡座をかき、阿父にも「呑」と返事をする太郎君は、女にも直截で大胆であつた。若い女や異母妹達が寢る蚊帳に太郎君が寢そべると、彼の繼母は顏をしかめた。沖釣りに大勢往つて、船暈で寢て居る弟の妻の傍にずんずん寄つて、生簀の魚をまさくる彼を、熊次も不快の眼に見た。夕暮あらめ屋前の川端に、浴衣姿で熊次夫妻が立つて居る。別莊から下りて來た太郎君がつかつか駒子の側に寄る。すつと躱して、駒子は熊次の右に出た。駒子は身のこなしが早かつた。まだ東京に居た時分、瀧野川の紅葉見て歸り途、行き會ふた男女四人連れの中の四十男がいきなり駒子の前に蹲むと思ふと、駒子はするり熊次の右に居た。無禮を氣づいてふりかへり怒罵を熊次が浴せた時は、もう五六間行き過ぎて居た。色黑の頑丈な體をして、沙翁のテムペストに出て來るキヤリバンを思はす蠻的な太郎君を、熊次は嫌つた。「恐い」と駒子も曰ふて居る。「彼體が」と恐れをなして居る。其太郎君が結婚する。擇りに擇つて、簑田のおいささんと結婚する。何は兎もあれ、太郎君の結婚は虎の檻が出來るやうなものである。

お祝ひの鎌倉蝦一籠持つて、熊次駒子は出京した。榎坂で熊次は紋付羽織袴に、駒子は婚禮着の淺黃縮緬の二枚襲に更め、義姉と車を連ねて三緣亭に往つた。K新聞の創業披露も、宇土君の結婚披露も、三緣亭であつた。

三緣亭の廣間は、來賓で賑合ふて居る。兄ももう來て居た。「ぢやァ好かん、來てござる」と義姉は駒子の肩に顏を埋めた。深水義兄の矮い羽織袴姿が忙しさうに人込みを縫ふ。眞中の大椅子にドツかとかけて居た兄が、つかつかと寄つて、「何かお手傳ひがありますなら」といふ。皆はしやぐ中に、兄は殊更はしやいで居た。沖繩人が琉球獨立の請願に來たから、そんな馬鹿な事は罷りならぬ、と叱つたなどと役所話をしては氣づいて笑に紛らし、椅子の背越しに若い溫厚な紳士を顧みては「舊交を溫めやうじやありませんか」と曰ふて居る。紳士は昔昔の同志社で熊次も識つて居る、今學習院教授の古田さんであつた。十一二の昔を知る古田さんは、熊次に大きくなつた子供並の挨拶をした。古田さんは兄と同じく深水の借家の一つに住んで居る。子供が往つてお邪魔をする、御挨拶をしたい、と兄は古田さんに夫人への紹介を求める。艶々しい丸髷の古田夫人の生國を聞いて、「もと私は九州生れ——ですか」などと兄が笑ふ。來賓は

新郎新婦の縁者で、大抵熊次の知人であつた。壁際のソファに、黒の裾模様の盛装した女がかけて居る。金つぼ眼で時々見廻はす。誰かと思へば、駒子の大病後熊本歸りの氷川町に今日の花嫁などと訪ねて來た事もある外村のおしんさんであつた。「何處の奥さん？」と疑問の眼鏡を仰向けて、尾崎牧師が小聲に人に問ふて居る。兄の同志社同級で恐い白眼をした糸嶋牧師は、然し顏に似合はぬやさしい小父さんである。宇土君は耶蘇信者をやめる時、糸嶋牧師に數箇條の難問を提出し、牧師が答辯が出來ぬをきつかけに、信仰を止めた。然し子供時代の熊次は恐い眼の此小父さんが金を貸してくれた記憶をもつ。兄の同級生は兄の弟に何か話さねばならなかつたが、何も無いので、父母の安否を問ふた。着飾つた女達の中に、四年前の婚禮着其ままの束髪姿初々しい駒子は義姉と並んでしほらしくソファにかけて居た。通りかかりの兄が見つけて、二言三言、其顏を覗き込むやうにして急には其處を立ち去りかねた。

綿服の羽織袴で髯堂々とした江見牧師の司式で、別室に婚式が始まつた。江見夫人の介添で、牧師に面ふて立つた黒紋付の裾模様、白茶繻珍の帶に扇を挿した高嶋田の新婦の後姿は、五分刈頭で羽織袴の新郎より二寸も高く見えた。式が終ると、親類縁者の握手がある。兄がさつさ

と握手を濟す。後が途絶える。兄が促す。義姉の後から熊次、熊次の後から駒子、順次に新郎新婦の手を握つた。眞白に塗つた丈の高い新婦の伏目を見ると、熊次はこれが第一の縁談に自分を刎ねた候補者である事を思はずに居れなかつた。後で熊次は駒子に曰ふた、おしんさんの手をぐいと引握つてやつた。太郎君が公然と駒子の手を握る千歳一遇の機會を空しくしなかつた事を、熊次は二十年後までは知らなかつた。

酒ぬきの西洋料理、心易い仲の饗宴は、皿ナイフの音の中に新郎新婦そちのけの談笑が賑やかであつた。新郎の父者のしんみりした挨拶の後に、尾崎糸嶋の牧師達が相ついで卓上演説をする。「大家さんにお嫁さんが來なすつた」と兄が輕く扱ふ。熊髯の德田さんは上州人、以前兄の雜誌にも、また創刊時代の新聞にも編輯をして居た。赤の毛糸の大黒頭巾をかぶつて、青い筒袖に綠の兵兒帶をしめ、靴を穿いて編輯席から工場に往復するので、職工達が「五色さん」と綽名したものだ。漢文出の慷慨家で、演説得意の雄辯家である。深水の借家に以前は住んだ。結婚の時、新郎立つて長々と演説し、「終に臨んで」と一段調子を張り上げたものである。德田さんが何と新妻を呼ぶかと氣をつけたら「增江さアン」と呼んでうれしかつた、婚禮の席で花

蟹がむしやむしや車蝦を食べたにも感心した、と深水の姉が噂をした。今夕も德田さんは演說の機會を逃がさなかつた。兄が西洋みやげの「擧國一致」を引出して、上州と熊本の結婚がさしよりそれだ、と黑い髯と凛々たる聲をふるつた。

*　　*　　*

あくる朝、逗子へ歸るとして、兄の居間に入ると、社の久野さんが來て居た。多くの信書に應酬の要旨を兄は久野さんに口授して居る。「直ぐ返へすやうにするから」と返事をさすのは、隈伯の執事へであらねばならなかつた。洋行前、隈伯が兄に曰ふた、いくらでもお使ひなさい。歐山米水、一年の長い道中に、ある銀行の手から旅費の補充がしばしば海外へ送られた。彫しい西洋みやげもそれで求められた。松隈內閣の限りは何事もなかつた。松隈手切れとなつて、松伯に附いた兄が受くる報復の祟りは、先づ立替旅費の返濟要求であつた。然しそれは彼が背むるを須つ苦味の大牢の前菜に過ぎなかつた。

熊次駒子が逗子に歸ると程なく新婚夫婦も蜜月旅行に來た。流行の黑の吾妻コオトで、まだ嶋田のままのおいささんが太郎君の後について川向ふの砂洲を歩く姿があらめ屋から眺められた。

三

年は行く行く暮に向ふ。風の吹かぬ日は、初冬の海も靜に、一月おくれで年中行事をする海村に師走のさまもなく、悠々としたものである。唯穩やかならぬは、都の政界の日は一日より險惡な騷ぎにつれ、渦の中心に子を置く父母の胸であつた。

追出されの片輪心中に終つた進步黨は、不心中者の生殘りを取殺さずには措かぬといきまいた。首相の辭職勸告。內閣不信任決議。つづけざまに砲彈が出て來たばかりの政府に飛ぶ。あはよくば進步黨の後入りにと狙つた自由黨も、思はしく運ばぬ腹癒せには、寄手に早變りしてわめき立てる。孤城をめぐる咆哮に、政府の落日も遠からずと見えた。昔の寄手は今日の受身、戰鬪好きの壯い魂は攻め立てられる程意地になつた。日々の新聞に世情を察して子の上を案ずる父が

「もうよかろ。」

と心配を募らした。子は中々罷めぬ。ふらつく首相の腰を押しては、飽くまでも闘はうとする。議會が開かれる。今日内閣不信任案が提出される其日に、突如議會解散の令が下つた。三日目に突如首相辭職の報が傳はつた。老相の腰が碎けたのである。隈伯が罷めても、首相が居た。首相が罷めては、殉死の外はない。兄も辭表を出した。在朝半歳、また一布衣記者に彼は復つたのである。

大晦日の午後、兄は義姉子供殘らず引具して年とりに逗子に來た。兄は未だ忿々して居た。川端を歩きながら兄は熊次に曰ふた、辭職する程なら解散せぬがよし、解散する程なら辭職は馬鹿々々しい、腰ぬけにも程がある、本當に意氣地なしにも程がある。而して川に向つてぺつと唾を吐いた。

同じ内務省の衛生局長Gさんは、父の同窓沼山門下の長谷部男爵の婿である。頻に兄の留任運動をしたさうな。「自分は違ふ」と兄は終に辭職した。それでもGさんを兄は德とした。兄は無念が中々止まなかつた。然し父母は兄の顏を見てやつと安堵の面地をした。

去年の除夜は、兄は倫敦に居た。今年は打揃ひ、熊次夫婦もあらめ屋から來て、櫻山別莊の夕

食は賑やかであつた。

團欒が解けると、歸るは歸り、臥すは臥し、櫻山の星の夜ふけて吹くとしもなき松風、海の音、

明治三十年は靜に暮れた。

第九章　富士の目ざめ

一

明治三十一年の元旦に、熊次駒子はあらめ屋から隠宅に出かけて新年の慶をのべ、吉例の雑煮を祝ふた。終つて、父母をはじめ一同吉書を書いた。兄は除夜の吟を書いた。

湘海孤村守歳時　寒燈獨座有幽思
何來天樂徹宵響　松韻潮聲兩不知

好い詩だ。それでこそエマアソンを耽讀し、靜思餘錄を書く兄であつた。兄は更に人の囑によつて、額を書いた。

上帝

紫峰生　謹書

「おお、よかぞ。」
と父が聲をかけた。

熊次は歌を書いた。

白雪の
富士の高嶺は
高くとも
のぼらばのぼる
道はありなむ

「好い歌だな。」
と母が悅んだ。
これは去年の詠であつた。明治二十四年の夏に一度すでに富士の絕頂をきはめた熊次は、眼に見る富士を歌には意味しなかつた。最初「あらなむ」として居た。森戸へ月夜の散歩に、處初子に此歌を誦したら、「あらなむ」では命令法になると注意し、さて一兩度吟じて見て、「歌ですなア。」と嘆じた。駒子が來り嫁ぐ前までは、年毎の吉書に、熊次が筆を執ると父は眼を背けたものであつた。母が公に熊次のものを悅んだ事は、殆んど此が始めてである。

幸先が好い。今年は好い新年である。此新年を記念す可く、熊次は寫眞が欲しかつた。兄はすすまず、父も面倒がつた。あらめ屋に遊びに來た姪甥を、叔父が嗾しかけた。

「皆でお祖父さん處へ往つて、暴れて來い。」

而して正月の三日に、父母、兄夫婦、熊次夫婦、兄の子女四人、一同横須賀に往つて寫眞を撮つた。横須賀の停車場で兄は知人に會つた。

「今頃此處に何をしとると思ふだらう。」

と兄は憮然として居た。熊次は兄の歳晩の詩について、斯く詠んだ。

靜なる心に音の通ふかな
　軒の松風磯の白波

「呑、そら詩よりも其方が好い。」

と兄は空返事をした。而して直ぐ東京へ歸つて往つた。

「白雪の富士」の歌で年を始めた熊次は、朝々早起して川口から日の出前の富士を眺むる事をはじめた。鴨志田君が話した曙の富士を、去年の正月は取紛れてよくも注意しなかつた。今年は

じめて眼をとめて見た。彼は新聞に「此頃の富士の曙」を書いた。

心あらん人に見せたきは、此頃の富士の曙。

午前六時過ぎ、試に逗子の濱に立ちて望め。眼前には、水蒸氣渦まく相模灘を見む。灘の果には、水平線に沿ふてほの暗き藍色を見む。若し其北端に同じ藍色の富士を見ずば、諸君恐らくは足柄箱根伊豆の連山の其藍色一抹の中に潜むを知らざる可し。

海も山も未だ眠れるなり。

唯一抹、薔薇色の光あり。富士の巔を距る弓杖許りにして、横に棚引く。寒を忍びて、暫く立ちて見よ。諸君は其薔薇色の光の、一秒々々富士の巔に向つて這ひ下るを認む可し。

丈、五尺、三尺、而して寸。

富士は今睡より覺めんとすなり。

今覺めぬ。見よ、嶺の東の一角、薔薇色になりしを。

請ふ、瞬かずして見よ。今富士の巔にかかりし紅霞は、見るが内に富士の曉闇を追ひ下ろ

し行くなり。一分—二分—肩—胸。見よ、天邊に立つ珊瑚の富士を。桃色に匂ふ雪の膚、山は透き徹らむとすなり。

富士は薄紅に覺めぬ。請ふ眼を下に移せ。紅霞は已に最も北なる大山の頭にかかりぬ。早や、足柄に及びぬ。箱根に移りぬ。見よ、圖を追ひ行く曙の足の迅さを。紅追ひ藍奔りて、伊豆の連山、已に桃色に染まりぬ。

紅なる曙の足、伊豆山脈の南端天城山を越ゆる時は、請ふ眼を回へして富士の下を望め。紫匂ふ江の嶋のあたりに、忽然として二三の金帆の閃くを見む。

海已に醒めたるなり。

諸君若し倦まずして猶彳まば、やがて江の嶋に對ふ腰越の岬赫として醒むるを見む。次で小坪の岬に及ぶを見む。更に立ちて、諸君が影の長く前に落つる頃に到らば、相模灘の水蒸氣漸く收まりて海光一碧、鏡の如くなるを見む。此時、眼を擧げて見よ。群山紅褪せて、空は卵黄より上りて極めて薄き普漏西亞藍色となり、白雪の富士高く晴空に倚るを見む。

ああ、心あらん人に見せたきは、此頃の富士の曙。

次の日曜に來た兄が、あらめ屋の前で、熊次に問ふた。

「何れが足柄かい？」

「あれです。」

「さうすると其隣が箱根で——」

兄は富士をいただく連山の鎖を、今始めて見るやうに見直した。

熊次が出京して社に行くと、

「富士の景色が好いさうですね。」

と其細君に駒子が洋畫の手ほどきをしてもらつた飾磨さんが、讀經聲で挨拶するのであつた。

「富士の曙」を手始めに、熊次は時々新聞に散文詩體の小品を書いた。それは熊次が新聞雜誌に出すツールゲネフやビヨルンゾンのまづい翻譯や、薄つぺらな翻案や、「風景畫家コロオ」の六號待遇に憤激して五號仲間に入れてもらう爲かのやうに書いた未熟未完の創作物や、雜誌の口繪にすべくかねて澤山に出來て居る泰西名士肖像の銅版の中から雜誌編輯の忠二君が勝手に撰り出して、「今度は何某を願上候」と言ふて來るまま書くを餘儀なくさるる繪ときの小傳などよ

り書き甲斐のあるものであつた。

文字のスケッチ以外、色彩でするスケッチも勿論熊次は止めなかつた。三脚持參で出さへすれば、何か見つけた。時には駒子と遠出もした。街道傍の人家にこんもり茂つた大株の椿にちらほら赤い花が見えて、海苔綠なる川口の潮干に雪の富士絶え絶えに影うつす二月には、父から金三圓借りて、昨春の遊蹤を追ふて駒子と海のあなたに二日の寫生旅行をした。小田原で寄せ鍋の午食はうまかつた。湯本に往つて、此處ではもう咲いて居る梅に夕月ほのかな早雲寺に詣で、一夜は福住に浴泉の客であつた。あくる日、箱根見物は塔の澤までにして、歸途は煙の如く小雨霞む酒匂川の堤で一枚、平塚でわざわざ下りて馬入川の磧で一枚、寫生した。二人で寫生すれば、熊次は何時も次通りの位置を妻にすすめ、後で自身は最上の位置を占めた。それでも熊次の寫生が駒子のより好いとは限らなかつた。

二

熊次が東京に出て今年は最早十年目である。著譯の四五冊は出して居るし、折々の筆のすさびに仲間にほめられたものもあるが、彼はまだ少しも世間に識られて居ない。海のものとも山のものともつかぬ彼は、雅號すらきめて居なかつた。雅號の一定を兄に勸められて、近頃は蘆花生と大抵署す事にして居るが、蘆花生とは誰と滅多に問ふてくれる者もない。蘆花の雅號のはじまりは、はつきりした記憶はない。恐らく伊豫今治に居て漢詩を作り始めた頃であらう。十九、二十歳の同志社時代には、仲好しの片貝などが、「おい、蘆花逸ウ」と呼んだものである。大江逸といふ兄の別號に倣ふて、逸の字をつけて居た。二十一、二の熊本時代では、十五錢出してわざわざ「蘆花逸生」の印を鑿らした事もあつた。「天南地北年々客、唯有蘆花似故人」といふ雁を詠じた宋人の詩から「雁金の友」と別稱した事もあつた。「友」の字もいづれ兄の雜誌の一字を無斷頂戴したものであつた。二十二で東京に出て以來、名を署すものには、兄がつけ

たり自分がつけたり其時次第で雅號もいろいろ變はつたが、到頭もとの蘆花に落ちついた。兎に角、雅號が蘆花にせよ、實名が肥後熊次にせよ、出京十年もうそろそろ名が出てもよい時である。今年は自分の生涯にも劃期的一年であらねばならぬ。作物をまとめて、世間に問ふて見たい。熊次はさう兄に言ふて、原稿の整理にかかつた。

やりはじめて見て、熊次は自己の所產の貧弱さに、今更一驚を喫する外はなかつた。十年書いて、これはといふ小品一つない。あらん限りの中から搔き集めて、十三行三十八字詰、二百二十二頁の薄つぺらな小冊を滿たすに、準翻譯の一篇が加へられねばならなかつた。何れも雜誌或は新聞に一度出て多少評判の好かつたものを輯めた。卷尾の阿蘇山を描いた「夏の山」の一篇だけが、初めて日の目を見る舊稿であつた。此雜纂を何ど名づけるかは、一苦心であつた。兄の外遊中、留守居が財政困難切りぬけの一策に、新刊物を濫發した爲、從來M社の出版と云へば賣れるにきまつて居たやうなのが、さつぱり賣れなくなつて居た。熊次は千思萬考の末、到頭わが文藝的處女作集に「青山白雲」の名を冠せた。事務主幹の田部君が熊次に曰ふた。それは好い名です、此頃の書物は、「千紫萬紅」てちいふやうな名でなけにや賣れまッせん。少し前に、

熊次は新聞に素人寫生家の懺悔を書いた。青山白雲の序に、彼はそれを使つた。其中に斯く彼は書いて居た。

「余が畫を學び始めてより、二年已に過ぎぬ。二年を過ぎ、塗抹するもの、僅に滿つ。進む所果して幾干ぞ。何もなし、更になし。唯吾曩きに見得たりと思ひし自然の、見れば見る程宏大不可思議にして、之れに對すれば眼眩し手戰くを覺ゆるのみ。曩きに諸先生の作を見て、自然の何の所にか斯くの如き色彩形狀あらむと思ひしもの、今は其れよりも百層千層驚く可きものを眼前に見るを覺ゆるのみ。而して吾畫く所の曩きに自ら瀨戸物屋の店頭に似たりと謂ひしものに刻々類し行くを驚くのみ。吁余は知らざるなり、何も知らざるなり。其の自然を見ると謂ひしものは、見ずして夢みしなり。畫を知ると謂ひしものは、知らずして論ぜしなり。二年の精神を竭して何をか學び得たる。余は唯余が畫の事に於て一も知る所なきを知りたる耳。豈ただ畫のみならん、渾ての事に於て皆然りしなり。

余は感じて、思はざりき。夢みて、見ざりき。知らずして、言ひたりき。
天は吾爲めに斯宏大なる自然と人の卷を開きたるに、余は眼を閉ぢて自家の囈語に耽りしなり。
二年の畫學修業は、余が眼を開きぬ。
嗚呼余が眼を開きたるや晩矣。然れども「悛むるに晩矣と云ふことなし。」願はくば心を虛ふし、赤子となりて、俯して造化の祕書の第一頁を披かん。」

それは熊次の心其ままを打出したものであつた。元旦の吉書と共に、それは熊次が新發心の宣誓、門出の喇叭であつた。
同時に、熊次は家庭雜誌に書き捨ての泰西婦人の小傳などを掻き集め、袖珍の小册として出す事にした。處初子外二三子の文もあつたが、大部分熊次の筆であつた。それには

かへり見よ世世にかしこき其人を
なししいさほは家のははき木

と七十七叟の父が手跡を木版にして扉につけた。世界古今名婦鑑の名は、兄の命名であつた。
「青山白雲」は肥後熊次著として三月下旬に、「名婦鑑」は蘆花生編として四月中旬に出版された。共に定價二十五錢で、千部刷つて中々再版にならなかつた。「澤山やれぬ」と兄が氣の毒さうに曰ふた。「青山白雲」に二十圓、「名婦鑑」に三十圓熊次は受取つた。問題は金ではなかつた。名婦鑑は兎に角、文壇に差出した名刺がはりの「青山白雲」が何の手答もなかつたのが、少からぬ熊次の失望であつた。約十年前熊次の處女出版のブライト傳に長文の批評をした讀賣新聞のNさんが、「青山白雲」に對し、「由ありげなる序文は讀まず、『夏の山』はたしかに面白し」と一句言ふただけで、新聞雜誌は大抵默つた。「青山白雲」前無名の熊次は、「青山白雲」後も依然たる無名氏であつた。自分も大したものには勿論思つて居なかつたにしろ、少しは何とか言つてくれさうなものと思ふて居た熊次は、流石にがつかりした。以前友山君が駿河言葉で駿河歌を作つたそれに倣ふて、熊次は田舍唄數篇を新聞に寄せた。中に

わたしや田舍者、

日うらの椿、
花は咲いても、
人に知られで散るばかり。
好いわいな、
好いわいな。

といふのがあつた。「青山白雲」の淡い失望を遣る詞であつた。

失望を慰す可く、常に自然が待つて居る。一昨年の秋見た水國の今度は春を見に、熊次は四月の初鶯常陸へ出かけた。道づれには、東京で蕉村句集を買つた。俳句はやらぬが讀むは好きで、芭蕉の句集は熊次も永川町の前期に讀んで居た。虞初子が十二文豪の「ヲルヅヲルス」を書いて柳柳州に比して居たのを、寧ろ蕉に比した方がよいと書いて、虞初子を躍起とならせ、其後虞初子とU君のヲルヅヲルス——芭蕉論戰に、虞初子が一俳諧師と芭蕉を輕く扱ふたに對し、滅多に差出ぬ熊次が横鎗を入れて、いよいよ虞初子を憤激させた昔もあつた。芭蕉はふるい馴

染、蕪村は初對面であつた。彼に芭蕉の渾厚は無い。然し畫人の俳句集は、素人寫生家の畫行脚に恰好の道づれであつた。

水國の春は未だ少し早かつた。菰蒲蘆葭の綠々した五六月にこそ來べきであつた。加之雨がちが興を殺いだ。土浦に着いて、櫻川のほとりをぶらついて居ると、もう小雨になつた。あくる日は窓もあけられぬ吹き降りに霞が浦を小蒸氣で渡てわたり、潮來素通り、大船津に上陸し、鹿嶋に往つて泊つた。白砂の鹿嶋は明神の宮居にふさはしい淨土である。あくる日は晴れて朝詣の清々しさ、朝日に雫こぼるる樅の林の心地よさ。波の音をしるべに砂丘を越えて初めて見る鹿嶋灘の眺望は雄渾に、凄い程寂しく、逗子あたりの人なつこい海とは全く別な印象であつた。大船津への歸り途、遠い森の梢からお寺の屋根を覗かせた榮の花に雲雀の鹿嶋臺は、路傍に三脚を据ゆるスケツチの人をうつとりさせずに置かなかつた。翌日はまた雨。筵掩ふた小舟に搖られて大船津から加村に渡つた。水國の秋の遊にかねて眼をつけて置いた大利根のほとりの小さな村である。水際の宿の二階から見れば、利根の春雨唯茫々と薄ら寒く、「大河を前に家二軒」蕪村がちやんと今日の趣を言ひ盡して居た。雨に興も盡き果てた熊次は、翌日瀧船で佐

原に渡り、瀛車で成田に往つた。鹿嶋詣と、不動様の初詣が此行で唯二日の晴であつた。成田から千葉へ瀛車、千葉から横濱行の瀛船に乘つた。富士艦見物に行く赤十字の徽章つけた人人で船は一ぱいであつた。

唯しばらくの間に、當陸より相模の春はたけて居た。

三

年は一年と逗子も知られて來るにつれて、來る可き夏の仕度に案内記の編纂を企つる人人があつて、其口繪を描きに垂水君がやつて來た。川口の干潮に、臀向きに居すわつて居る大型の和船を前景にして、垂水君は伊豆かけて相模の海の片影を畫の具箱の畫板に描いた。眼鏡をかけた二重外套駒下駄の紳士が街道から下りて來て言葉をかける。毎日記者で、案内記の材料をとりに來た人である。船を描き描き、「深水君に渡りをつけずばなるまい」と垂水君が笑ふ。太郎君は舟を描く事が手に入つて居た。記者が去ると、西洋人の男女三人連れが來て見て、"Very well done" と黒の女が曰へば、"Too much ground" と若い赤の女が批を入れる。「毛唐があんな事をぬかして居ましたね。」と垂水君が舌皷をうつ。繪は空を少なく、船を高くあげた異つた趣向であつた。

垂水君は描き果てて夕方歸つたが、同じ白馬會仲間の黒井君は北海道の女連れが去つた後のあ

らめ屋の一室を借りて、しばらく逗留して畫を描いて居た。おとなしい畫家は、隣の熊次夫婦の事を、「仲が好いね。」と其友達に囁やいて居た。

淋しい駒子を珍らしい友の一人が訪づれて來た。昨夏來た平田吟子は東京に出ての友であつたが、此春訪ねて來た中田咲子は熊本時代の友であつた。福岡生れの彼女は、其兄が軍醫で第六師團に奉職した關係から一家しばらく熊本に住み、學校仲間で駒子と親しい仲になつた。駒子より二つ年上の彼女は、駒子の父にも可愛がられた。駒子が熊本で試驗に通つて東京女高師に來ると、福岡の女子師範に居た咲子さんも撰拔で女高師に來たがつたが、學校の事情に遮られて上京を果さず、焦ちに焦つて一時頭を惡くした事を駒子は遠ながら聞いて居た。其後京都に往き、同志社女學校を卒業した。今は東京に居て、麻布の香蘭女學校に教鞭をとつて居る。十年ぶりに會つて見れば、二人は昔ながらに氣の合ふ仲であつた。

髮の素直な、面長で蒼白い、さらさらした咲子さんは、一週間夫婦の客であつた。駒子と山をあるいたり、駒子がスキントン萬國史の不審をきいたりした。「私もあなたのやうに同志社にでも入ればよかつた。」と駒子は今更昔自分を羨んだ咲子さんを羨んだ。駒子の父が可愛がつた

駒子の友を、駒子の夫も心よくもてなした。御馳走ぶりに、熊次は咲子さんを横須賀の富士艦見物に伴ふた。駒子は留守し、羽織のない咲子さんに一張羅の淺葱縮緬の羽織を貸した。隣室の畫家黑井君も、宿の主の太兵衛さんも、同行した。横須賀で出會ふた黑井君の仲間の畫具箱をつるした一人も、人數に加はつた。

此前最初に案内してくれたS少尉が、今日も一行を案内してくれるのであつた。美しかるべき「富士」の艦首の金飾りが、無慘や剝げ落ちたままになつて居る。費用不足で、と少尉はこぼすのであつた。山内砲の說明で、山内の名が熊次の耳に殘つた。革囊をつるして立ちながら引切なしにやつて來る士卒を相手に流るる如く應答裁決して居る甲板士官は、忙しい中に熊次と語を交ゆる際を見出し、新聞にも關係して居る者が苟も日本海軍に其人ある嶋村速雄を識らぬを歎きの眼を瞪つて居た。下甲板に下りるペンキを新塗の梯子に來ると、咲子さんは羽織を脫いで袖だたみして抱へて下りた。士官室で茶菓の馳走になり、偖歸るとして太兵衛さんの行衛が不明になり、困じ果てた揚句、舷門近いベンチに莞爾々々とをさまつて居る太兵衛さんを見出した時、熊次は危く此善良な家主に對し皮肉の一つも浴びせたい氣にならずに居れなかつた。

富士艦見物のお禮に、黒井さんは後で種々西洋野菜をくれた。熊次はお禮に「青山白雲」をS少尉に送つた。士官室一同大喝采で讀んだ、といふ元氣な禮狀がやがて來た。お咲さんは駒子と舊交を溫め、歡んで歸つて往つた。「淸い方!」と咲子さんは熊次を其妻にほめた。「どれ、見して頂戴」と駒子が引たくるやうにして見た熊次の日記には、

「彼女は淸き婦人にして愛すべし。」

と妻の友の事を書いてあつた。

第十章　山へ

一

五月五日が來た。結婚の第五紀念日。

嫁いで滿四年、未だに母になり得ぬ駒子は淋しかつた。榎坂の兄の家には、洋行歸り後はじめての女の子が生れ、祖母の名を其ままお千代とつけられた。祖父は小千代と分けて呼んだ。舊風結婚した深水のおいささんも身重と聞くし、五十男を亭主にもつあらめ屋のおかみも、產月近い大きな腹をして居る。いつまでも二人ぎりの駒子は、一入淋しかつた。それに、肉身の淸人兄には熊本で無理に別れた以來一度も會はぬし、血筋のたよりもすつかり絕えた彼女は、何角につけて心細かつた。

一昨年の五月、兄の外遊送別會で逢つた以來、熊次も淸人君には一度も會はなかつた。東京に

は居る。報知新聞にも恐らく居る。然しはつきりした事は知らなかつた。知らうともしなかつた。自分自身立つか立たぬかの境である。妻の兄どころでない。消息のないを好い事にして、熊次は菊池とも清人とも念頭に浮ぶる事をしなかつた。

つい二三日前の事である。兄が東京への歸り瀛車に、鎌倉まで熊次夫婦も同行した。

「清人さんも喃」

と兄が卒然駒子に話しかけた。

清人君も今度函館商業會議所の書記長に聘せられ、北海道に赴任した。月俸は八十圓。

「俺なら二十圓以上は出さぬ。」

と横目にぢろり熊次を見て、兄が笑つた。

熊次は身が熱くなつた。

五月五日を迎へて、熊次は何だか逗子にぢつとして居れなかつた。

夕食の時、突然駒子に曰ふた。

「何處か遊びに往かう？」

「ええ、往きましやう。」

遊びに出るといへば、何時も二つ返事の彼女である。

「何處へ往かう？」

海邊に居る夫婦の心は、期せずして山に騁せた。出湯の湧く山へ往かう。箱根は近いが、塔の澤までは二月に往つて居る。何處か眞新しい處へ往かう。

「伊香保に往かう。」

「ええ、さうしましやう。」

駒子が勇み立つた。

伊香保は上州の岩原夫婦もほめちぎつて居た。深水の姉を媒妁のお禮に伊香保湯治をふるまはれた江見牧師夫妻が、翌年結婚三年目で冢子をまうけた話も聞いて居る。景色の好さは成嶋柳北の紀行で讀んだ。「さまざまの虫さまざまの花に鳴きて秋面白き伊香保山かな」といふ柳北の歌も覺えて居る。柳北時代に瀛車はなかつた。東京から高崎まで、夜をこめてがたくり馬車に搖られ、馭者が一鞭あてると眼も眩む程烈しい動搖に、乘合一同今にも顚覆を豫期して唯はら

はらしたものだ。それでも好きな伊香保に柳北は往かずに居れなかつた。今は逗子から日着きも出來る。

「伊香保へ往かう。」

夫妻の伊香保行は、母も大賛成であつた。

昨夜思ひ立つて、今日の午前夫妻はもう東京に出て三菱銀行の特別當座預の窓口に立つて居た。兄の留守に加世田が流用した郷里の賣却地所代三千圓の内、熊次の分百五十圓は昨秋返濟されて、三菱に預けてあつた。其中から熊次は伊香保行の費用に五十圓引出した。分家當初の約束通り、三池紡績利子代の本家から月十圓の支給は昨年限り打切つて、今年になつて壹千圓の同株券が熊次に渡された。然し十一圓の社の月俸が二十圓に昇給しやうと、雜誌の特別收入があらうと、入るだけのものは奇麗に出て行く熊次の家計では、湯治費も資本に喰ひ込む外なかつた。

五十圓懐中して大盡の氣もちになつた熊次は、駒子とまた上野から瀛車に乘り、新桑の綠を窓から眺めつつ、其夕方は高崎の町はづれ、宮元町の基督教會堂附屬牧師の住居に、岩原の義兄

夫婦とうちくつろいで話して居た。

同志社を飛び出した熊次が熊本から東京に歸參した其年の秋、同志社の邦語神學科をおくれ馳せに卒へた岩原さんは、家族をつれて東上し、先づ秩父は大宮に傳道師生活を始めた。秩父から上州藤岡に出た。熊次が母とうち連れ移轉早々の藤岡生活を見舞つたのは、駒子と結婚前年の碓氷、妙義が錦に染まる頃であつた。藤岡からやがて岩原さんは高崎教會の牧師に遷つた。高崎は上州でも重要な位置である。上州の岩原と云へば、彦左衛門と綽名をされて、組合教會でもやかまし者の名とりであつた。岩原さんが斯くぢりぢりせり上つて來る其間に、岩原家では尾の道の流浪時代に生れた二番目のおてんば娘のおとみが亡くなり、金太郎といふ活潑な男の子が生れて、婦人病の母に此子が生れたは枯木に花が咲いたと喜ばれた甲斐もなく、可愛さかりに消ゆるやうに亡くなり、唯一粒殘つた總領のお君は今女子學院に出て居る。婆や一人使つて、集會のない日は淋しい生活をして居る義兄夫婦は、熊次夫婦の思ひがけない來訪を一方ならず喜んだ。

逗子の噂、兄の噂、而して談は信仰問題に落ちねば止まなかつた。十八で洗禮を受けた熊次は、

三十一歳の今日、すでに所謂基督者(クリスチヤン)ではなかつた。彼は祈禱せず、聖書を讀まず、教會には勿論行かなかつた。然し自然は彼の聖書で、自然に對する敬虔と憧憬は即ち彼の祈禱であつた。

一昨年の夏以來氣まづくなつた「親鸞眞傳」の浦田君が、今年は珍らしく逗子に彼を訪ね、また手紙をよこした。「青山白雲」は自然の Miniature を見るやう、と浦田君は曰ふた。Miniature は似而小なるもので、其ものでなく、眞物でない。「君は美より眞を探らんとし、余は眞より美を觀ぜんとす」とも史傳研究に熱心なる浦田君は書いた。それは嘘ではなかつた。自然美から神に溯らうとする熊次と、專ら人間味に立つ岩原さんとの間には、やはり年齢以外の不同があつた。岩原さんも「青山白雲」は讀んで居た。然し彼は其れについてあまり共鳴するものを有たなかつた。「グラツドストーン傳」に感心した岩原さんは、「青山白雲」を嘘にも面白いとは云へなかつた。然しもともと同じ耶蘇教畑に生ひ立つて、氣質も相似た二人は、信仰上にも同じ傾きはもつて居た。出し合はせて見て、

「こりや意外に近い。」

と岩原さんは悦んだ。

「遠くちや大變。」

と姉がつんとした。熊次が十八歳熊本で洗禮を受くる時、此姉も大江の姉も安永の姉も同時に洗禮を受けた。大樣な岩原姉も姑や小姑の間に色々心配する由を聞いて、十七の弟は「一日の苦勞は一日にて足れり」と馬太傳の一句を姉に書き送つたものだ。あなたの神は遠すぎる、と姉に言ふた事もあつた。

然し組合教會の牧師として專ら聖書の信仰に楯籠る基督本位の岩原さんと、齡の十三も下の散文詩人の熊次の間には、やはり如何ともし難い隔りがあつた。自然の感じ方が違つた。基督の見方が違つた。ふるい教義が立ちふさがつた。面倒な議論は大嫌ひの熊次は、はづみに乘つて無遠慮に義兄牧師にふるいと思ふ紋切型の教義について疑義抗議を吹つかけた。攻手は何時も自由である。自由の立場から鋭く熊次は義兄に突かかつた。岩原さんは時々中座し、また座に復つてあらためて應答をつづけた。

「祈つて來なすつたんでせう。」

と後で駒子が熊次に曰ふた。

一

翌朝熊次駒子は高崎を立つた。

伊香保の湯宿を夫妻はきめて居なかつた。兄の花々しい出世當時、伊香保のさる溫泉宿から評判のよい兄の弟を養子にと二十歳の熊次は望まれた事を聞いて居る。それは熊次に相談するまでもなく父兄から斷はつた。其宿に行く氣にもなれなかつた。伊香保は千明が好い、と岩原さんが紹介狀を書いてくれた。書きながら岩原さんが姉に聲をかけた。

「彼處はたしか茶代をとらんだつたな。」

「ええ、さうです。取りません。」

この問答で、千明と云ふ宿の見當がついた。

高崎から鐵道馬車で、榛名の麓を南から北へずうと利根川近くの渋川まで往つた。渋川から車に乘つた。麓の宿(しゅく)の勾配のついた石ころ路を町のはづれまで來ると、「伊香保みち」と大きな道

しるべの石が立つて居る。車は其方へきれ込んだ。これからは二里十八丁の登りである。一足毎に力を入れて曳き上ぐる車夫の背は直ぐ汗になつた。「歩いた方が餘程好い。」といふた岩原さんの言葉が思ひ合はされた。

去年正月お崩れになつた英照皇太后が、明治十二年伊香保へ御成の節、御休憩になつた御蔭の松のほとり、御蔭の茶屋で一休みした。茶屋のお婆さんが、滿開の八重櫻一枝折つてくれた。尙上ると、山腹拓かれて、杉、檜、松などの苗が一面植ゑつけてある。小高い處に、見張りの家が立つて居る。大和の林業家土倉の植林地、と車夫が敎へる。土倉の名は同志社時代熊次も知つて居た。板垣さんの洋行に、壹萬圓借用を申込んだら、土倉が熨斗をつけた、といふ話なども聞いて居る。其處の娘が二人同志社女學校に來て居て、夏の歸省に新しく買つた柳行李に雑氷先生の甥の正義さんが平べつたい顏をにやにやさせながら得意の潭香流に娘の名を書いて居ると、次の間から半分顏を出して娘の一人が禮を言ふて居る處に出會した記憶も熊次にあつた。駄馬に蒲團、飯櫃など積んで、湯治歸りの田舍の人人が續々下りて來る。もう蠶が生れるのだ。

行手の山の上に一團の黒雲が湧いた。車の上急に冷やりとする。雷が鳴り出した。電がぴかりぴかりとする。一粒落ちた、と思ふともう瀑落しに雨が落ちて來た。逃ぐるも躱るるも出來た事ではない。引く者はもとより、引かるる者も幌の内ながら半身ずぶ濡れになつた。伊香保の山の襞をせられたやうなものである。やがて富士なら胸突八丁といふ最後の急坂に來ると、雨も止んだ。夫妻は車を下りた。右手に浴客あらための事務所がある。車夫が人數と宿を屆ける。坂を上つて、これからもう伊香保であつた。また車にのつて、狹い通を上つて、曲つて、下りて、上つて、他の宿の前を踏み通つて、指す宿に來た。鍵形に建つた座敷の長庭、其處の湯氣立つ小池に緋鯉の悠々と泳いで居るも珍らしい。突當りが帳場であつた。

岩原さんの紹介狀を出した熊次駒子は、帳場の上の三階六疊に導かれた。取りあへず濡れ衣を褞袍を重ねた宿の浴衣に換えて、浴室に下りた。勢よく湯瀧の落つる浴槽は、赭くさらさらして無氣味であつたが、湯は穩やかな好い湯であつた。溫まつて、清清しくなつて三階に歸ると、途中で萎れた御蔭の茶屋の八重櫻も溫湯に生々と蘇つて、ちやんと小さな床に活けられて居た。文人畫を張り交ぜの格天井、眞中の一枚には淡紅桃花に口の大きい魚を畫いて、「桃花流水鱖魚

肥」と題してある。二つ並んだ右隣との間は唐紙で仕切られ、黑ぶち細骨の四枚障子をあけると、欄干つきの狹い緣が直ぐ先刻の雨に洗ひ上げた五月の空と山につづいて居る。前室がはりに使はるる裏の六疊の細緣からは、一層一層彌が上に築き成された他の湯宿の上に、二つ並んだ赭禿げ山が聳えて居る。伊香保溫泉の生みの親、二つ双んだ二つ岳、といふ名は後で知つた。

五月の伊香保は、さながら熊次駒子を待ち設けて開かれた寶の庫であつた。熊次は二十一の夏、阿蘇山に登つて、半腹の湯の谷溫泉から肥後の平原を見下ろした時、せめて一夏其處に居たかつた。十年目に其念願を伊香保に果した。駒子ははじめて上京した十七の一夏を、清人兄と日光小倉山御料地の番舍に置いてもらつた事があつたが、斯樣な見晴らしの高みに居るははじめての經驗であつた。上へ上へと築き成した伊香保の町の一番下にある千明の三階からは、眼下に邪魔なものもなく、見はらしは思ふままであつた。正面に小野子、子持山。右に赤城山。其等の向ふは越後野州の遠山がまだ雪をかついで居る。相模の海邊から袷で出て來た夫婦は、山の上の奇寒に宿の褞袍を感謝する朝夕が多かつた。五月の鯉も取り下ろされて出て來たに、伊香保の山には一團の霞か一簇の雲かとばかり山櫻が咲いて居る。雲に、霧に、雨に、日に、朝

に、夕に、山の變化の面白さ。居ながらにそれは勿體ない程の眺望であつた。高きには登るべきである。高いものがいよいよ高く仰がれる。低いは殘りなく面目を露はす。海拔三千尺近い山の上に此溫泉がある事は、何と云ふ夫妻に感謝であつたらう！

夏は未だ遠く、蠶はもうそろそろといふ五月の伊香保は、靜であつた。千代といふ女中が附いて、望のままに三度の賄をした。生椎蕈、山獨活、蕨、薇、それから山女の味は、今まで二人が知らぬものであつた。ドクトル、ベルツが飲用に適すと敎へた呑湯を飲んで、二日目位から著しく食慾が進んだ。三食足らず、買つて食ふ櫻餅の味も格別であつた。十日目位に、帳場から客一統に萩の餅など出すもうれしい習慣であつた。戰國武士の末といふ十二軒の湯宿は十二支にわかれ、中にも酉の千明はふるく、元祖と稱する程あつて、仁泉亭といふ名は四百年前連歌師の宗祇法師が越後への途來り浴して與へた名であつた。先代が蚤世して一時困難な場合に陷つたを、未亡人の實弟津田さんが來て、茶代廢止を決行し、よろづ手堅くぢりぢり基礎を固めて居る。津田さんが深水の義兄と同鄕竹馬の友といふ事を、熊次は未だ知らなかつた。先代に男の子なく、長女に婿を迎へ、結婚してまだ幾程もなかつた。しんねりした母刀自に肖て口數少

ない若主婦は、伊豆へ新婚旅行の話をして、肺患者の多い熱海の宿は、夜のものに白い被がかけてあつても「ふせりますにも氣味が惡ふございまして」と言ふて居た。新郎は東京で未だ三菱に勤めて居るさう。手堅い津田さんは岩崎に信用され、伊香保の地所山林の世話なども任されて居る關係から、養子も其見立てといふ事であつた。柳北の記文によれば、其頃は向山に藝者家があつて、竹法螺で「お直しかア？」などと此方の座敷に聲をかけたものだ。今は向山一帶は岩崎の有になつて、其處には別邸が建ち、而して西澤から其處へ引かるる淸冽の山水は、また筧を傳ふて谷を渡り崖をのぼつて千明の水槽に溢るるのであつた。總じて地味な伊香保の中にも、分けて世辭ぬきの實體な此宿の氣風は、熊次夫妻に居心地が好かつた。

日に日に山は綠になつた。山の上の新綠は、全く眼ざましい程美しかつた。落葉松の若綠などは、南國生れの二人が初めて見る美しいものであつた。湯治そちのけに、夫妻は日に日に寫生道具持參で歩き廻はつた。勾配をつけて見れば物皆珍らしく、彼も此もと搔き集めるやうにして、新しい寫生帖が直ぐ一ぱいになつた。湯元、七重の瀧、近まわりから追々ぶらつきの範圍を廣めた。榛名詣は、瘠骨峠を攀ぢて、未だ霜枯れの沼の平の歩き心地がまたなく好かつた。

側面から見る榛名富士はふつくらとして、湖は小さく明るく麗はしく、湖畔の山の紅樓の一樹二樹も美しく、湖畔亭の鮒のヌタは香高い山獨活を添へ、洗ひは其處の貯藏氷をあしらつてうまいものであつた。天神峠から向ふを見ると、碓氷淺間と信州へつづく山又山を限りなく歩いて見たい氣に二人はなつたが、下り十八丁榛名神社までにして引返へした。沼の平から聳(そそ)り立つ相馬か岳の奇峭な姿は、身輕い夫妻を其絶巓に誘はずに居なかつた。ある日、二人は鐵鎖を攀ぢ、岩角を踏み、絶頂をきはめた。それは海拔五千五百尺、榛名山彙の最高峰であつた事は後で知つた。狹い頂上には、衣冠束帶兩手に悠然と笏をささげた石の人は高く、拳を握り眼を剝き出した石の像は低く、いづれも南向きに立つて居る。其方には遙に富士が群山を抽いて鮮やかに見えて居た。見下ろす下は、富士の劍が峰の俯視を思ひ起さすやうな、立つ足も震ふ急峻な山壁である。其處を猿の如く攀ぢて來た土地の子等三人、不思議さうに頂上の夫妻を見て居たが、やがて裏の岩間や霜枯れた灌木の間をかさかさ殘雪を探しつつ、「今年は無(ね)えな。」など言ひ合ふて居た。相馬も榛名も然し水澤道程二人の氣に入らなかつた。澁川道を地藏河原から横にわかれて、日あたりの好い山腹の平らな細路を、水澤觀音へ一里餘、雲雀聞き、蕨摘み

つつ、綠の中の銀一條、利根の流れの行末はるかに關東平野を一目に見晴らす心地は、所詮忘られぬものであつた。

夫妻は伊香保がしみじみ好きになつた。何時の世にか地に落ちて忘れ果てた天上の遊びをここに再びするやうに、二人は知らぬ間に二週日を伊香保に遊び暮らした。